



始



KZ 65-96



畫
論
集

上
卷

中
央
美
術
社
版

大 正
15. 10. 5
內 交

東洋畫論集上卷解説

歴代名畫記

張彦遠(唐)

張彦遠の歴代名畫記は唐代に於ける畫論と批評とを兼ねた最も代表的な著述であつて、全十卷第一卷より第三卷までは「畫の源流を叙す」以下一般的畫論を叙述し、第四卷より第十卷迄は、畫人の品第、則ち畫人を批評して是に等級を附したものである。其の畫人は、上は軒轅の時の史皇より、下は唐の會昌元年に至る凡そ三百七十一人に及んでゐる。本書に収録したものは、其の論畫部の内、第一卷及び第二卷を全部と、第三卷中より、「裝背標軸を論ず」の一項を譯出したものである。

圖畫見聞誌

郭若虛(宋)

郭若虛の圖畫見聞誌は、張彦遠の歴代名畫記を受け継いだものであつて、名畫記が筆を絶つた唐の會昌元年に筆を起し、宋朝の熙寧七年に到る名人藝士の傳記を考へ、得失を參較して編纂し

たものである。名畫記の著者張彥遠は、畫人の品第をなしたが、郭若虚は「今の作者は互に長ずる處があり、或は少くして嫩であつても、老ひて壯なるものもあり、或は始めは勤めても、終りに怠るものもある」といふ意味から、品を定めなかつた。

即ち作家の等級を作らず、記すべき能、談すべき事、或は又諸家の畫説を筆録し、傳記の中、自ら畫論を叙べ、其の他古事・事蹟を編據して全六卷となしたものである。其畫論は大略所謂畫工の畫を鄙しみ、士大夫、隱逸の士の畫を高きとなした。卓拔せる識見と精透なる議論とは後世遂に畫學の指南書となるに到つた。

林 泉 高 致

郭

熙 (宋)

林泉高致は郭熙の著はす處となつて居るが實は其の子郭若虚が、先子に侍して泉石に遊び、筆を落す毎に、父が説いた處を盡く筆記し、其の數十百條を收拾纂集したものである。郭熙は山水を學んで、多く李成を摹し、峯巒の秀起、雲烟の變滅に獨歩の畫境を拓いた人であるが、常に畫論を好み、其の子若虚の爲めには絶えず是れを口授した。郭若虚はこの書の序に「先子若くして道家の學に従ひ、故きを吐きて新しきを納れ、本方外に遊び、家には世々畫學無けれど、蓋し天

性之を得、遂に藝に此に遊び、以つて名を成したり。然れども潛德懿行、孝友仁施に於いて深しとなす、則ち焉に遊び、焉に息ひしなり。此の志、子孫當に之を曉るべきなり。」と述べてゐるが、是に依つて其の人爲を知る事が出来るであらう。

畫

繼

鄧

椿 (宋)

畫繼は郭若虚の圖畫見聞誌の後を繼ぎ、宋の神宗熙寧七年より、乾道三年に至る繪事百般を論述したものである。即ち上は王侯より下は工技に到るまで、凡そ二百十九人の畫人に關する傳記逸話を記し、名迹を論じて全十卷と爲した。鄧椿の時代は徽宗皇帝が畫道興隆に力を致した時代であつた。この名手百出の時に際し、鄧椿は其の見聞を盡く記したのであるから、此書が後世を裨益する所の多かつたことは云ふを俟たない。其の論旨は、郭若虚と同じく、畫の精神主義を唱へ所謂高雅を以て太宗とした。本書に掲げたものは「畫繼」の内、特に畫論と見做し得る部分を抄録したものである。

寫 山 水 訣

黃 子 久 (元)

黄子久は所謂元四大家の随一である。元以後明清に到る南宗畫家は、殆んどすべて黄子久の畫風を宗としたと云つてもよい。それ程子久は偉大なる山水畫家であつた。子久は浙江富春の人であつたが、常熟の虞山の風光を愛し、其の湖山に寓居すること二十年、其の間、絶えず湖橋の畔に座して酒に親しみながら湖光山色を賞した。殊に虞山の拂水嶺を愛で、寫山水の秘訣を此に得たのである。

本書は其の行文一見甚だ輕易に叙し去つてゐるやうであるが、山水畫の秘蘊を説き來り説き去つて餘す所がないのは、流石に後世の山水畫に偉大なる感化を與へた黄子久であると肯かれる。

畫 鑒

湯 壺 (元)

畫鑒は元の湯壺が、京師に在つた際、鑑書博士柯九思(敬仲)と畫を論じて著はしたものである。吳畫に筆を起し、晉、唐、宋、元初に到る畫風の推移變遷を説き、簡にして頗る要を得、悉く依據する處があつて、用意精到である。鑒賞に靈眼あるものでなければ能はぬ處であらう。

畫 禪 室 隨 筆

董 其 昌 (明)

董其昌(玄宰)は華亭の人で、明の萬曆十七年進士となり、官に仕へて禮部尙書に到つた。詩文を巧にし、書法は「吳興(趙子昂)を突過す」と自負したといふが、實に書は仿はざる處なく、到らざる處なしと稱され、畫は董北苑、巨然、趙子昂、黄子久、倪雲林諸家に仿ひ、六法を精研して、其の蘊奥を極め、藝苑百世の師として、其の高名は當時の畫壇を風靡した概があつた。本書は其畫訣、畫源を論じ、自畫の題跋古畫の評語を蒐録したものであつて、其の高遠なる識見と該博精通せる鑒識とを窺ふのみならず、其の間禪理に通じた董其昌の人格を反映する處のものがある。

藝 苑 扈 言

王 世 貞 (明)

王世貞(弇州)は明一代の鴻儒であつて、藝術百般に精通した大才であつた。本書は藝術の各般に亘つて其博識卓見を傾倒して叙述したものゝ一部、特に歴代の畫風を論評したものである。一言一句、盡く肯綮に當つて居るのは王世貞の如く博識の士が靈眼を抛て始めて得られる事で、尋常人の到底及ぶべきものではない。特に其の風俗を論ずるに當り、張彥遠、並に郭若虛の誤謬を正した邊りは如何に彼の學問が深遠であつたかを窺ふ事が出来る適例であらう。

南田畫跋

惲壽平(清)

南田畫跋は清初の畫家惲南田(壽平)の著、「甌香館畫跋」の抄録である。これは南田の畫の題跋を集めたものであるが、其幽微なる立論、巧緻なる文章、豊富なる畫趣は一讀三嘆、眞に卷を掩ふ能はざるものがある。惲南田は所謂四王吳惲の一人であつて、詩文を巧にし、書は光元章、褚遂良を學んで一家の格を作り、畫は初め好んで山水を描いたが、後山水を一擲して花卉を學び別に新しい境地を拓いた。即ち花卉は北宋の徐熙を宗とし、徐崇嗣の沒骨法に依り、古今を斟酌して時習を一洗し、遂に寫生の正派となつた。

畫學淺說

沈心友(清)

寫眞秘訣

丁阜鶴州(清)

前者は芥子園畫傳初集論畫部の抄譯であり、後者は第四集の全譯である。芥子園畫傳は我が寛永年間、黃蘗僧に依つて初めて我が國に將來された畫法指南書であつて、當時より今日に到るまで南畫家の金科玉條として來たものである。初集は明の李流芳が集めた古人幾多の畫例を、李笠

翁の婿、沈心友が王子安節(王槩)に依囑して増輯編次したものであるが、安節は類を分ちて仿摹し、其速ばざるを補ひ、上は歴代を窮め、近くは名流を輯め、諸家の長所を傳へたもので、山水、樹石、人物等其の圖例四百四十頁つに及び、初學の宗式とした。二集、三集は、いづれも書商が射利の爲めに編輯したもので、取るに足らないが、第四集の寫眞秘訣は清末に到つて成つたもので、獨立せる肖像畫論として充分に存在の價値を有して居る。

山靜居畫論

方薰(清)

方薰(蘭之)は石門の布衣で、人格高逸、錢唐の奚鐵生と共に兩高士と稱された人物である。詩畫に巧で畫は山水、花卉と共に宋元人の秘法を得、其の寫生は南田以後第一人であると稱せられた。著述には山靜居集四卷畫論二卷があるが、山靜居集中の五言古體は、漢魏盛唐の精微があり、五七言律も亦唐賢に減ぜずとさへ推賞された。茲に掲げたものは山靜居畫論二卷中より最も畫學者の範とするに足るべき部分を抄録したものである。

論畫十則

王原祁(清)

歷代名畫記

張彦遠(唐)



畫の源流を叙す

夫畫は教化を成し、人倫を助け神變を窮め幽微を測り、六籍と功を同じくし、四時と並び運り天然に發し、述作に繇るに非ず。古先聖王、命を受け籙に應ずるときは、則ち龜字、靈をいたし龍圖寶を呈するあり。巢燧より以來みなこの瑞あり。迹は瑤牒に映じ、事は金冊に傳はる。庖犧氏、滌河の中より發して、典籍、畫圖萌し、軒轅氏、溫洛の中より得て、史皇、蒼頡狀す。奎に芒角あり、下りて辭章に主たり。頡に四目あり仰ぎて垂象を觀る。因て鳥龜の跡をならべ、遂に書字の形を定む。造化も其の祕を藏す能はず、故に天、粟をふらす。靈怪も其の形を遁るゝ能はず。故に鬼、夜哭す。是の時や書畫は體を同じくして、未だ、象制を分たず、肇創すれども猶略す。以て其の意を傳ふる無し、故に書あり。以て其の形をしめす無し、故に畫あり。天地、聖人の意な

り。字學の部を按ずるに、其の體に六あり一は古文、二は奇字、三は篆書、四は佐書、五は繆篆
六は鳥書にして、幡信上に在りて端に書して鳥頭にかたどる者は、則ち畫の流なり。

顔光祿云ふ。圖載の意に三あり、一に曰く圖理卦象これなり。二に曰く、圖識字學これなり。

三に曰く圖形繪畫これなりと。また周官に、國子を教ふるに六書を以てし、其の三を象形と曰ふ
則ち畫の意なり。この故に書、畫は異名にして同體なるを知るなり。有虞舜の繪を作るにおよびて
繪畫は明に既に彰施に就きなほ比象に深し。是に於て禮樂大にひらけ、教化より興る。故に能
く揖讓して天下治まり、煥乎として詞章備はる。廣雅に云ふ、畫は類なりと。爾雅に云ふ、畫は
形なりと。説文に云ふ、畫は吟なり田の吟畔に象る。畫する所以なりと。釋名に云ふ、畫は挂く
るなり、彩色を以て物象に挂くるなりと。故に鼎鐘刻めば、則ち魘魅を識りて神姦を知り、旂章
明なれば、則ち軌度を昭にして國制を備ふ。清廟肅みて罍彝つらなり、廣輪度りて彊理辨ふ。以
て忠、以て孝、盡く雲臺にあり。烈あり勳あり、みな鱗閣に登る。善を見ては以て惡を戒むに足
り、惡を見ては以て賢を思ふに足る。形容を留めて、もつて盛徳の事をあきらかにし、其の成敗
を具して、以て既往のあとを傳ふ。記傳は其の事を敘する所以なれども、其の容を載する能はず
賦頌は以て其の美を詠することあるも、其の象を備ふこと能はず。圖畫の制は、之を兼ぬる所以

なり。故に陸士衡云ふ、丹青の興るは雅頌の述作に比し、大業の馨香を美にす。物を宣ぶるは言
より大なるはなく、形を存するは畫より善きはなしといふは、此の謂なり。

善いかな曹植言へるあり、曰く、畫を觀る者、三皇、五帝を見ては仰ぎ戴かざるなく、三季の
異主を見ては悲惋せざるなく、篡臣、賊嗣を見ては齒を切らざるなく、高節の妙士を見ては食を
忘れざるなく、忠臣の難に死するを見ては節を抗げざるなく、放臣逐子を見ては歎息せざるなく
姪夫妬婦を見ては目をそばだてざるなく、令妃順后を見ては嘉貴せざるなしと。是に於いて、鑿
戒を存する者は圖畫なることを知る。むかし、夏の衰へて桀の暴亂を爲すや、太史終は畫を抱き
て以て商に奔り、殷の亡びて紂の淫虐を爲すや、内史摯は圖を載せて周に歸し、燕丹（燕の太子
丹）獻ぜんことを請ふて、秦皇疑はず、蕭何まづ收めて、沛公（漢の高祖）乃ち王たり。

圖畫は有國の鴻寶にして理亂の紀綱なり。これを以て漢明の宮殿はこの粉繪の功を賛し、蜀郡
の學堂は、義、勸戒の道を存す。馬后は女子なりなほ君を唐堯に戴かんと願ふ。石勒は羯胡なり
なほ古よりの忠孝を觀る。豈に博奕と同じく心を用ひんや、おのづからは名教の樂事なり。余嘗
て王充が言を知らざるを恨みき。云ふ、人の圖畫を觀るに、上に畫く所は古人なり。古人を畫く
を視ること、死人を視るが如し。其の面を見るは其の言行を觀るに若かず。古賢の道は竹帛の載

する所粲然たり。豈に徒に牆壁の畫のみならんやと。余おもへらく、此等の論は、夫の其の道を大笑し、其の儒を詬病し食を以て耳に與へ、牛に對ひて簧を鼓くと、また何ぞ異らんやと。

畫の興廢を敘す

圖畫の妙は、こゝに秦漢より得て記すべし。魏晉に降り代々、賢に乏しからず。南北におよびて哲匠まゝ出で、曹・曹不興・衛・衛協・顧・顧愷之・陸・陸探微・重價を前にほし、董・董伯仁・展・展子虔・孫・孫尚子・揚・揚契丹、妙迹を後に垂れ、張・鄭・張僧繇、鄭法士の兩家は隋室に高歩し、大安・閻立德、閻立本の兄弟は皇朝に首冠たり。これ蓋し尤も烜赫する所にして、世俗の尙ぶを知る者なり。その餘の英妙はいままた彈論せん。漢武創めて祕閣を置き以て圖畫を聚め、漢明(後漢の明帝)もと丹青を好みて別に畫室を開き、又鴻都學を創立して以て奇藝を集めしかば、天下の藝、雲集しぬ。董卓の亂に山陽(後漢の獻帝)西遷するに及び、圖畫縑帛は軍人皆取りて帷囊と爲す。收めて西する所の七十餘乘、雨に遇ひて道艱み、なかばは皆遺棄す。魏晉の代は固より藏蓄多かりしが、胡寇の洛に入るや一時に焚燒せり。宋、齊、梁、陳の君、もと好尙あり。晉は劉曜に遭ひ、毀散する所多し。重ぬるに桓玄が性貪りて奇を好むを以てし、天下の法

書、名畫をして必ず己に歸せしむ。玄が篡逆に及びて晉府の眞迹は、玄盡く之を得たり。

何法盛が、晉中興書に云ふ、劉牢之、子敬宣を遣はし、玄に詣りて降を請ふ。玄大に喜び、書畫をつらねて共に之を觀る。玄敗るゝや、宋の高祖、先づ滅喜をして宮に入りて載せしむと。南齊の高帝は其の尤も精しき者を科し古來の名手を録し、遠近を以て次と爲さず但優劣を以て差と爲し、陸探微より范惟賢に至る四十二人を四十二等と爲し、二十七秩、三百四十八卷、政を聽くの餘、且夕披玩す。梁の武帝尤も寶異を加へなほ因て搜葺す。元帝雅才藝ありて自ら丹青を善くしたれば、古の珍奇、内府に充切せり。侯景の亂に、太子綱しばく夢む、秦皇更に天下の書を焚かんと欲すと。既にして内府の圖畫數百函、果して景が爲に焚かれたり。景平ぐに及びて、有る所の畫、みな載せて江陵に入り、西魏の將于謹がために陥れらる。元帝まさに降らんとし、乃ち名畫、法書及び典籍二十四萬卷を聚め、後閣舍人高善寶をして之を焚かしむ。帝は火に投じて俱に焚けんとせしが宮嬪、衣を牽きて免るゝを得たり。吳越の寶劍、並び將ちて柱を斫りて折らしめ、乃ち歎じて曰く、蕭世誠遂にこゝに至る。儒雅の道今夜窮まると。于謹等、煨燼の中に於て、其の書畫四千餘軸を收めて、長安に歸る。故に顔之推が觀我生賦に云ふ、人民百萬にして囚虜となり、書史千兩にして烟麴る。史籍已來、未だ之有らざるなり。普天の下、斯の文盡く喪

ふと。

陳の天嘉中、陳主、意をほしいまゝにして搜求し、得る所少からず。隋の陳を平ぐに及び、元帥記室參軍裴矩、高穎に命じて之を收めしめ、百餘卷を得たり。隋帝は東京の觀文殿の後に於て二臺を起し、東を妙楷臺と曰ひて、古よりの法書を藏め、西を寶蹟臺と曰ひて、古よりの名畫を收めしが、煬帝、東の方揚州に幸する時、盡く將ちて駕に隨ふ、中道にして船覆り大半は淪弃す煬帝崩じて、並に字文化及に歸せしが、化及が聊城に至るや竇建徳が爲に取られ、東都に留まる者は、王世充が爲に取らる。聖唐の武徳五年、僭逆を尅平し、二僞主を擒にし、兩都祕藏のあと維揚扈從の珍わが國家に歸す。乃ち司農少卿宋遵貴に命じ、之を載するに船を以てし、河にさかのぼりて西上し、將に京師に致さんとす、行きて砥柱を經しとき忽ち漂没に遭ひ、存する所、十に一二を亡ふ。(國初、内庫に只三百卷あり。並に隋朝以前相承けて、御府の寶とせし所。)太宗皇帝特に耽玩する所、更に人間に於て購求せしむ。天后(則天武后)の朝、張易之奏して、天下の畫工を召し、内庫の圖畫を修めしむ。因て工人をして、各長する所を推して銳意模寫せしめ、舊によりて裝背し、一毫も差はざりしが、其の眞なる者は、多く易之に歸しぬ。易之誅せられて後薛少保稷が得る所と爲り、薛歿する後は、岐王範(玄宗の弟、惠文太子と諡す。)が得る所と爲る

王初め陳奏せざりしかば後懼れ、乃ち之を焚けり。時に薛少保と岐王範、石泉公王方慶が家に蓄ふる所の圖畫は皆天府に歸せしも、祿山の亂に耗散すること頗る多し。肅宗甚だ保持せずして、之を貴戚に頒つ。貴戚好まず、之を不肖の手に墜ぎしが、物歸する所ありて好事の家に聚まり、徳宗艱難の後に及びて、又散失を經しこと、甚だ痛むべきなり。古より兵火しばしば焚き、江波しばしば鬪ひ、年代やうやく遠く失墜いよゝ多し。もし時君尙ばずんば、則ち其の搜訪を闕かんと。至人の賞玩に非ずんば、則ち未だ妍蚩を辨へず。駿骨來らず、死鼠の璞となる所以なり。嗟乎今の人、衆藝至る鮮くこの道尤も衰ふ。未だ曾て點を誤りて蠅と爲さず、惟成を亡ひて狗に類するを見るのみ。彦遠が家代々好尙あり、高祖河東公、曾祖魏國公、相繼ぎて名迹を鳩集すこれより先魏國公、司徒泚公(李勉)と、並に霍國公關内三軍(王思禮)の幕府に佐たり。霍公が兩京を平定せしは魏公が策なり。魏公、泚公と、其の同寮に因り遂に久要を成し、並に藩閫に列なり、齊しく臺榭に居り、雅會襟靈、琴書相得たり。泚公は古に博く藝多く、精を窮め奇を蓄へ、魏晉の名蹤、篋笥に盈ちしかば、許詢、逸少、年を經て共に山泉を賞し、謝傅、戴逵、日を終るまで惟琴畫を論ぜり。(泚公の南海に任ぜられし日、羅浮山に於て片石を得、泚公の子兵部員外郎約、又潤州海門山に於いて雙峰石を得、並に好事の爲に寶とせられしが、悉く傳授せられた

り。又泚公、手づから雅琴を斲る。尤も佳なる者を響泉と曰ひ。韻磬と曰ふ。泚公は滑州に在り。魏公は西川に在り、金玉の音、山川間なし、盡く瑤畫を絨して、以て嘉貺を表す。西川の幕客司空曙賦して曰く、白雲高吟際、青霄遠望中、誰言路遐曠、宮徵暗相通と。時に泚公并せて重寶を寄す。琴解及び琴薦咸在り。大父高平公、愛弟主客員外郎(彦遠が叔祖、名は諡)及び泚公が愛子績(祠部郎中)績が弟約(兵部員外郎、字は存博)更に通舊を敘し、遂に忘言を契し、遠く莊惠の交に同じくし、近く荀陳の會を得たり。大父、績を請ひて判官と爲す。約、主客諡と、皆高く榮宦を謝し、琴尊自ら樂しみ、終日陶然たり。士流企望すれども及ぶことなし。是によりて萬卷の書、盡く王粲に歸し、一厨の畫ただ桓立に寄せたり。李兵部又江南に於て、蕭子雲が壁書せし飛白の蕭字を得、これを匣にして以て洛陽に歸り、余が叔祖に授け、之を修善里にいたし、一亭を構へ號して蕭齋と曰へり(王涯相、權勢に倚り、之を負ひて趨りしが、太和の末、亂兵の爲に壞られたり。其の蕭字の本末、余が撰する所の法書要録の中に具す)元和十三年、高平公が太原を鎮するや中書を承奉すること能はず、監軍使内官魏宏簡が爲に忌まれしが、以て其の瑕を指すなければ、且つ驟憲宗に言して曰く、張氏、書畫を富有すと。遂に宸翰を降し、其の珍とする所を索めしかば、惶駭敢て絨藏せず、科簡して登時進獻す。乃ち鍾、張、衛、索の眞迹各一卷、

二王の眞迹各五卷、魏、晉、宋、齊、梁、陳、隋の雜迹各一卷、顧、陸、張、鄭、田、楊、董、展、および國朝名手の畫合せて三十卷を以てす。表上して曰く、「伏しておもんみるに前代の帝王は多く遺逸を求め、朝に觀夕に覽、鑒をこゝに取れり。陛下睿聖欽明、情を凝らし古を好み、政を聽くの暇、まさに以て神を怡ばしめんとす。前件の書畫は、歴代共に寶とし、是を珍絶と稱す。其の陸探微、蕭史が圖、妙は一時に冠し、名は上品に居れり。希ふ所は睿鑒別に省覽を賜へ」と。又別に玄宗の馬射眞圖(永寶府司馬陳閔が畫)を進む。表して曰く、「玄宗、天縱神武、藝は前王に冠たり。凡そ游畋する所、必ず繪事を存す。豈に止雲夢にのうしをたふして、楚人、旌蓋の雄を美とし、潯陽に蛟を射て、漢史、舳艫の盛を稱するのみならんや。前件の圖、臣、先靈を瞻奉す、素より寶惜する所、陛下、珍迹を旁求して、以て石渠に備へらる。祖宗の美、敢て獻呈せざらんや」と。手詔して答へて曰く、「卿、慶は、台鉉を傳へ業は弓裘を嗣ぎ、雄詞は一時に冠たり。奧學は千古を窮め、圖書兼ね蓄へ、精博兩ながら全たし。別に玄宗の馬射眞圖を進め、恭しく披捧を獲たり。瞻拜感咽、聖靈臨むが如し。其の鍾、張等の書、顧、陸等の畫、古今共に寶とし、有國の珍とする所。朕、朝を視るの餘を以て、目を寓するを得、因て丹青の妙、造化の功に合するあるを知る。象を觀て以て躬を省みんと欲す、豈に奇を好みて物を玩ばん。況んや章奏を煩は

すをや。嘉歎良に深しと（掌書記監察御史李德裕が制詞。）

其の書畫、並にて内庫に收入し、世復び見ず。其の餘は長慶の初、大父、内貴魏宏簡の門人宰相元稹が爲に擠れられ、出で、幽州を鎮じ朱克融の亂に遇ひて失墜せしが、戎虜の愛する所に非ざりしかば、事定まるに及び、頗る好事ありて之を購ひ得たり。彦遠時に未だ亂歲ならずして、家内の寶とする所を見ざるを恨む。其の進奉の外、失墜之餘、存する者纔に二三軸のみ。豪勢ありと雖も能くこれを求むるなし。あゝ爾後來、尤も須らく斬固すべし。宜しく漆書を抱きて歎を興すべし、棊柿を將ちて以て身を藩するなかれ。聊か暇日に因り、編みて此の記をつくり、且つ諸評品を撮りもつて業とする所を明にし、亦史傳を探り以て其の知る所を廣くす。（後漢の孫暢之に、述畫記あり、梁の武帝、陳の姚最、謝赫、隋の沙門彦悰、唐の御史大夫李嗣真、祕書正字劉整、著作郎顧況、並に兼ねて畫評あり、中書舍人裴孝源に畫錄あり、寶蒙に畫拾遺錄あれども、率ね皆淺薄漏略にして、數紙を越えず、僧悰の評、最も謬誤と爲す。傳寫又復脱錯したれば、殊に看るに足らず。）

宋朝の謝希逸、陳朝の顧野王が流の如きは、當時の能畫なるも評品には載せず。之を近古に詳にすれば遺脱至て多し。蓋し是世上未だ其の踪を見ず、又述作の人廣く求めざるのみ。嗚呼古よ

り忠孝義烈、湮没して稱せられざる者、いづくんぞあげて記せん。況んや書畫をや。聖唐、今に至るまで二百三十年、奇藝の者駢羅し耳目相接し、開元、天寶、其人最も多し。何ぞ必ずしも六法ともに全きのみならんや。但一技の采るべきを取るのみ。（或は人物、或は屋宇、或は山水、或は鞍馬、或は鬼神、或は花鳥、各長する所あるを謂ふ。）史皇より今大唐の會昌元年に至るまで、凡そ三百七十餘人、編次して差ふ無く、銓量して頗る定まる。此の外、旁求錯綜し、心目の鑒る所之を言ひて之を隠すなし。將來の者能く撰述するあらば、其或は之を繼がん。時に大中元年、歲、丁卯に在り。

畫の六法を論ず

昔謝赫云ふ、畫に六法あり、一に曰く氣韻生動、二に曰く骨法用筆、三に曰く應物象形、四に曰く隨類賦彩、五に曰く經營位置、六に曰く傳模移寫と。古より畫人能く之を兼ねるものまれなり。彦遠試に之を論じて曰く、古の畫は或は能くその形似を移して、其の骨氣を尙ぶ。形似の外を以て其の畫を求む、此俗人と道ふべきこと難きなり。今の畫はたとひ形似を得るも、而も氣韻生ぜず、氣韻を以て其の畫を求むれば、則ち形似は其の間に在り。上古の畫は、迹簡に、意澹にし

て雅正なり。顧、陸の流これなり。中古の畫は細密精緻にして臻麗なり。展、鄭の流是なり。近代の畫は煥爛して備はらんことを求め、今人の畫は錯亂して旨無し、衆工の迹是なり。それ物を象るは、必ず形似に在り、形似は須らく其の骨氣を全くすべし。骨氣、形似は、皆立意に本きて而して用筆に歸す、故に畫に工みなる者は、多く書を善くす。然らば則ち古の嬪のゆび、ほそくして胸束ね、古の馬のくちばし、尖くして腹細く、古の臺閣の竦峙し、古の服飾の容曳する、もと古畫の獨り變態にして奇意あるには非ざるなり、抑また物象殊なればなり。

臺閣、樹石、車輿、器物に在りては、生動の擬すべきなく、氣韻のひとしくすべきなく、たゞ位置、向背を要するのみ。顧愷之曰く、「人を畫くは最も難し。次は山水次は狗馬。其の臺閣は、一定器のみ、差爲し易し」と。この言之を得たり。鬼神、人物に至りては、生動の狀すべきありて、神韻を須ちて而して後に全し。若し氣韻あまねからず、空しく形似をつらね、筆力未だ、たけからず、空しく賦彩に善しとは、妙に非ざるを謂ふなり。故に韓子曰く、「狗馬は難く、鬼神は易し。狗馬は乃ち凡俗の見る所、鬼神は乃ち謫怪の狀」と。この言之を得たり。經營位置に至りては即ち畫の總要なり。顧、陸より以降、畫迹存すること鮮く、悉く之を詳にする事難し。唯吳道玄が迹を觀れば、六法俱に全く萬象必ず盡し、神人手を假し、造化を窮極すと謂ふべし。氣韻雄

壯にしてほとんど纒素に容れず、筆迹磊落にして遂に意を牆壁に恣にする所以なり。其の細畫また甚だ稠密なり。此神異なればなり。傳模移寫に至りては乃ち畫家の末事のみ。然れども今の畫人、粗寫貌を善くして、その形似を得るときは、則ちそれ氣韻なし。其の彩色を具するときは、則ち其の筆法に失ふ。豈に畫と曰はんや。嗚呼今の人、斯の藝至らざるなり。宋朝の顧駿之は常に高樓を結構して、以て畫所と爲し、樓に登る毎に梯を去りしかば、家人見ることまれなりしが若し時景融朗なれば、然して後に毫を含み、天地陰慘なれば則ち筆を操らざりき。今の畫人は、筆墨塵埃に混じ、丹青その泥濘に和して、徒に絹素をけがすのみ。豈に繪畫と曰はんや。古より畫を善くする者は、衣冠、貴胄、逸士、高人にあらざるなし。妙を一時に振ひ、芳を千祀に傳ふ閭閻鄙賤の能く爲す所に非ざるなり。

畫山水樹石を論ず

魏晉以降、名迹の人間に在る者皆之を見たり。其の畫山水は、則ち群峰の勢、鉅飾犀櫛の若く或は水泛ぶ容らず、或は人、山よりも大なれど、率ね皆附するに樹石を以て映帶す。其の地列植の狀、則ち臂を伸べ指を布くが若し。古人の意を詳にするに、専ら其の長ずる所を顯はすに在り

て、俗變を守らざるなり。國初は二閭、美を匠學に擅にし、楊、展は意を宮觀に精しくし、漸く附する所を變ぜしが、尙猶石をゑがけば則ち雕透に務め、氷斧又漸の如くなし、樹をゑがけば則ち刷脈鏤葉し、栖梧菴柳多く、功倍していよく拙く其の色に勝えず。吳道玄は、天、勁毫を付し幼にして神奧を抱き、往々佛寺の壁に畫き、縦するに怪灘石崩を以てし、捫酌すべきが若し。又蜀道に於て山水を寫貌す。これに由りて山水の變は吳に始まりて二李（李將軍、李中書）に成り、樹石の狀、韋驪に妙に、張通（張瓌）に窮まる。通能く紫毫秃鋒を用ゐ、掌を以て色を摸し、中に巧飾を遺れ外は混成する若し。又王右丞の重深、楊僕射の奇瞻、朱審の濃秀、王宰の巧密、劉商の取象の若き、其餘の作者一に非ざるも、皆之に過ぎず。

近代、侯莫陳廈、沙門道芬あり。精緻稠沓、皆一時の秀なり。吳興郡の南堂に、兩壁の樹石あり。余之を觀て歎じて曰く、此の畫位置は道芬の若く、迹は宗偃に類せり。是何人ぞや」と吏對へて曰く、「徐表仁といふ者あり、初め僧となりて宗偃と號し、道芬を師として則ち室に入りしがいま、郡側に寓し年未だ衰へず、而して筆力奮疾なり」と。召して來らしめ、他筆を徵するに、皆類せざれば、遂に其の單複曲折の勢を指すに、耳剽心語、成ること宿構の若し。其をして意を凝し、且つ幽襟を啓かしむるに、構成におよび、亦竊に奇狀なり。向の兩壁は蓋し得意深奇の作

にして、其の嵐籟を潛蓄し、洞泉を遮藏するに觀るに蚊根は鱗を束ね、危幹は碧を凌ぎ、重質、地に委し、青巖堂に滿つ。吳興の茶山、水石奔異にして、境、性と會したれば、乃ち山中に召し明月峽を寫さしめ因て其の所見を敘し、知言たらんことを庶ふ。之を知る者は頤を解き、知らざる者は掌を拊たん。

師資傳授、南北時代を敘す

古より畫を論ずる者、顧生の迹、天然絶倫なるを以て、評者敢て一二せざるも、余は顧生が魏晉の畫人を評論するを見るに、深く自ら衛協に推挹せり。即ち衛が顧に下らざるを知れり。只狸骨の方は右軍（王羲之）歎重し、龍頭の畫は、謝赫推高する如し。名賢の許可、豈に肯て容易ならん。後の淺俗、なんぞ能く之を察せん。つまびらかに謝赫が評量を觀るに最も允愜と爲す。姚（姚最）李（李嗣眞）が品藻は未だ安ぜざる所あり。李、謝を駁して云ふ、「衛はまさに顧の上に在くべからず」と。全く是根本を知らず、まことに於悞すべし。たゞ晉室、江を過ぎ、王廙が書畫第一たり。書は右軍の法と爲り畫は明帝の師と爲る如きも、いま書畫を言へば、一向に聲に吠え但逸少、明帝を推して、平南（王廙）を重んぜず。此の如き類至て多し聊か且つ其の一二を擧ぐる

のみ。若し師資傳授を知らざれば、則ち未だ畫を議すべからず。今ほ、大略を陳ぶと云ふ。

晉の明帝は王廙を師とし、衛協は曹不興を師とし、顧愷之、張墨、荀勗は衛協を師とし、史道碩、王微は荀勗を師とし、衛協、戴逵は范宣を師とし、遼の子敦、敦の弟顯は父を師とす。(已上は晉。)陸探微は顧愷之を師とし探微の子綏、宏肅は並に父を師とし、顧寶光、袁倩は陸を師とし倩の子質は父を師とす。顧駿之は張墨を師とし、張は則ち吳暕を師とし、吳暕は江僧寶を師とし劉允祖は晉の明帝を師とし、允祖の弟紹祖、子の璞は並に允祖を師とす(已上宋。)姚曇度の子釋惠覺は父を師とし、蓮道敏は章繼伯を師とし、道敏が甥、僧珍は道敏を師とし、沈標は謝赫を師とす。周曇妍は曹仲達を師とし、毛惠遠は顧惠遠を師とし、弟惠秀、子稜は並て惠遠を師とす。(皆惠遠に及ばず已上は南齊。)袁昂は謝、張、鄭を師とし張僧繇の子善果と儒童は並て父を師とし、解倩は孫松、蓮道敏を師とし(道敏は解倩に及ばず。)焦寶願は張、謝を師とし、江僧寶は袁、陸及び戴を師とす(江は人を畫くに長ず。已上は梁。)田僧亮は董、展を師とし(田、揚と董、展と、聲價相侔し。田、揚、鄭の三人は同時なり。)曹仲達は袁を師とす(袁は曹に勝る以上は北齊。)鄭法士は張を師とし、法士の弟法輪、子徳文は並て法士を師とし、孫尙子は顧、陸、張、鄭を師とし、陳善見は楊、鄭を師とし、李雅は張僧繇を師とし、王仲舒は孫尙子を師とす。(已上は

隋。)二閻は鄭、張、楊、展を師とし、(兼ねて父毗を師とす。毗は隋朝に在り。)范長壽、何長壽は並て張を師とし、尉遲乙僧は父を師とし、(尉遲跋質那は隋朝に在り。)陳廷は乙僧を師とし、(乙僧は外國。陳廷之に次ぐ。)靳智翼は曹を師とし、(曹、佛事を創む。佛を畫くに曹家様、張家様及び吳家様あり。)王智敏は梁寛を師とし、王智慎は閻を師とし、檀智敏は董を師とし、吳道玄は張僧繇を師とし、(又張孝師を師とし、又筆法を張長史旭に授かる。)盧稜伽、楊庭光、李生、張藏は並て吳を師とす。劉行臣は王韶應を師とし、韓幹、陳閻は曹霸を師とし、王紹宗は殷仲容を師とす(已上は國朝の畫人。近代は皆載せず。)

各師資あり、たがひに相倣効し、或は自ら戸牖を開き或は未だ門牆に及ばず。或は青、藍より出で、或は氷、水より寒きも、似類の間精粗別あり。只田僧亮、楊子華、楊契丹、鄭法士、董伯仁、展子虔、孫尙子、閻立德、閻立本が如き並て顧、陸、僧繇を祖とするも、田は則ち郊野柴荆に勝れりと爲し、楊は則ち鞍馬人物に勝れりと爲し、契丹は乃ち朝廷簪組に勝れりと爲し、法士は則ち游晏豪華に勝れりと爲し、董は則ち臺閣に勝れりと爲し、展は則ち車馬に勝れりと爲し、孫は則ち美人魑魅に勝れりと爲し、閻は則ち六法備該し萬象失はず。勝ると言ふ所は、類に觸れて皆能くするも、而も中に就きて尤も偏勝するところの者は、俗の共に推す所なるを以て、展は

屋木を善くするも、且つ董、展は時を同じふして名を齊しくし、展の屋木、董に及ばざるを知らず。李嗣真云ふ、「三休の輪奐、董氏其の微に造り、六轡の沃若、展生其の駿に居る、而も董には展の車馬あるも、展には董の臺閣なし」と。此の論、當れりと爲す。若し衣服、車輿、土風、人物を論ずれば、年代各異なり、南北殊なるあれば、畫を觀るの宜しき詳審するに在り。只吳道子が仲由（子路）を畫くに、便ち木劍を戴き、閻令公が昭君（王昭君）を畫くに、已に幃帽を着くが如き、殊に木劍は晋代に創まり、幃帽は國朝に興るを知らざるにて、此を擧げて凡例すれば亦畫の大病なり。且つ幅巾は漢、魏より傳はり、羃離は齊、隋より起り、幃頭は周朝に始まり、巾子は武徳に創まりしが如し。胡服靴衫、豈にすなはち古象に施すべけんや。衣冠組綬は今人に長用すべからず。芒屨は塞北の宜しき所に非ず、牛車は嶺南の有る所に非ず。古今の物を詳辯し土風の宜しきを商較し、事を指し形を繪くときは、時代を驗すべし。其の或は南朝に生長して、北朝の人物を見ず、塞北に習熟して、江南の山川を識らず、江東に遊處して京洛の盛なるを知らざる、これ則ち繪畫の病に非ざるなり。故に李嗣真、董、展を評して云ふ、地、平原に在りて、江南の勝を闕き、迹、戎馬に參して簪裾の儀に乏し。此は是其の未だ習はざる所にして、其の至らざる所に非ずと。此の如き論はすなはち知言と爲す。譬へば鄭玄が未だ櫛梨を辨へず、蔡謨が

螃蟹を識らず、魏帝終に典論を削り隱居の樂名に昧きあるが如き吾の知らざる、蓋し闕如たり。知らざるありと雖も、豈に其の博ならずと言ふべけんや。精通の者、宜しく南北の妙迹、古今の名蹤を詳辯すべき所。然して後、以て畫を議すべし。

顧・陸・張・吳の用筆を論ず

あるひと余に問ふに、顧、陸、張、吳の用筆如何を以てす。對へて曰く、顧愷之の迹は緊勁聯綿、循環超忽、調格逸易、風趨電疾、意は筆先に存し、畫盡きて意在り、神氣を全くする所以なり。昔、張芝は崔瑗、杜度の草書の法を學び、因て之を變じて以て今の草書の體勢を成し、一筆に成り氣脈通連、行を隔て、斷えず。唯王子敬のみ其の深旨を明にす。故に行首の字、往々其の前行を繼ぐ。世上之を一筆書と謂ふ。その後、陸探微も亦一筆畫を作り連綿として斷えず。故に知る書畫の用筆は同法なるを。陸探微は精利潤媚、新奇妙絶、名は宋代に高く時に等倫なし。張僧繇は點曳斫拂、衛夫人の筆陣圖に依り、一點一畫、別には是れ一巧、鈎戟利劍森然たり。又書畫の用筆同じきを知る。

國朝の吳道玄は古今獨歩、前に顧、陸を見ず、後に來者なく、筆法を張旭に授かる。此又書畫

の用筆同じきを知る。張既に書顛と號す、吳宜しく畫神たるべく、神假天造、英靈窮まらず。衆は皆盼際へんさいに密なるも、我は則ち其の點畫てんくわくを離披し、衆は皆象似に謹むも我は則ち其の凡俗を脱落す、弧まがをひき刃をぬき、柱を植て梁を構ふるに、界筆、直尺を假らずして、虬鬚きゆうしゆ雲鬚、數尺飛動し、毛根は肉より出で力健にして餘あり。當に口訣あるべきも、人得て知るものなし。數仞の畫、或は臂より起り、或は足より先にし、巨壯詭怪、膚脈連結すること、僧絲に過ぐ。

あるひと余に問ひて曰く、「吳生何を以て界筆、直尺を用ひずして、能く弧をひき刃をぬき、柱をたて梁をかまふる」對へて曰く、「其の神を守り其の一を専らにし、造化の功を合し吳生の筆を假る。さきに所謂る意は筆先に存し、畫盡きて意在るなり、凡そ事の妙にいたる者は皆是の如きか。豈に止畫のみならんや。庖丁は研を發し、郢匠えいしょうは斥を運す。ひそみに倣ふ者は徒に心を捧ぐるに勞し、代りてけづる者は必ず其の手を傷く。意旨亂れ、外物に役せらる。豈に能く左手に圓を劃し右手に方を劃せんや。それ界筆直尺を用ふるも、界筆は是死畫なり。其の神を守り其の一を専らにする、是真畫なり。死畫の壁に滿つるも、いづくぞ汚境せうけいに如かん。眞畫の一劃其の生氣を見る。それ思を運し毫ほを揮ひ、自ら以て畫と爲すときは、則ち愈畫を失ふ。思を運し毫を揮ひ、意は畫に在らず、故に畫に得。手に滯らず心に凝らず、然るを知らずして然り。弧をひき刃

をぬき、柱をたて梁をかまふと雖も、則ち界筆、直尺、豈に其の間に入るを得んや」と。又余に問ひて曰く、「それ思を運すこと精深なる者は、筆迹周密なるが、其の筆の周まわからざるある者、之を如何と謂ふか」と。余對へて曰く、「顧、陸の神、其の眇際めうさいを見るべからず。所謂る筆跡周密なり。張、吳の妙は筆纒ひづかに一二のみ、像は已に應ぜり。離披たる點畫、時に缺落を見る。此筆周ねからずと雖も、而も意周きなり。若し畫に疎密の二體あるを知らば、方に畫を議すべし」と。あるひと之を頷きて去る。

畫體、編寫を工用するを論ず

それ陰陽陶蒸して萬象錯布し、元化言ふことなく神工獨り運る。草木敷榮し丹碌の采を待たず雲雪飄颻して、鉛粉を待たずして白く、山は空青を待たずして翠に、鳳は五色を待たずして粹さいなり。是の故に墨を運して五色具はる、之を意を得と謂ふ。意、五色に在れば則ち物象乖へいく。夫物を畫くには特に形貌を忌む。采章歴歴として具足し、甚だ謹み甚だ細かに、而して外に巧密を露はすは、了せざるを患へずして了するを患ふる所以なり。既に其の了するを知らばまた何ぞ必ずしも了せん。これ了せざるに非ざるなり。若し其の了するを識らずんば是真に了せざるなり。夫

自然に失ひて而して後に神なり。神に失ひて而して後に妙なり。妙に失ひて而して後に精なり。精の病たるや、謹細を成す、自然は上品の上と爲し、神は上品の中と爲し、妙は上品の下と爲し、精は中品の上と爲し、謹みて細なるは、中品の中と爲す。余、今此の五等を立て、以て六法を包み以て衆妙を貫く。其の間の詮量は、數百等あるべし。たれか能く周盡せん。かの神すぐれ識高く、情超え心惠き者に非ざれば、豈に畫を知るを議すべけんや。

それ工、其の事を善くせんと欲せば必ず先づ其の器を利くす。齊紈、吳練、冰素、霧綃の精潤密緻なるは、機杼の妙なり。武陵水井の丹、磨嵯の沙、越嶲の空青、蔚の曾青、武昌の扁青、蜀郡の鉛華、始興の解錫、研鍊澄汰、深淺輕重精麤、林邑、崑崙の黃、南海の蟻鏹、雲中の鹿膠、吳中の鱧膠、東阿の牛膠、漆姑汁鍊煎、並て重采と爲し鬱して之を用ふ。古畫は頭綠、大青を用ひず、其の粉華を取り接して之を用ふ。百年傳致の膠は千載剝げず。絶奴食竹の毫は一劃して劍の如し。好手の畫人あり自ら言ふ、能く雲氣を畫くと。余謂て曰く、古人の雲を畫く、未だ臻妙と爲さず。若し能く綃素を沾溼し、輕粉を點綴し、口に縱せて之を吹く、之を吹雲と謂ふ。これ天理を得、妙解と曰ふと雖も筆蹤を見ず。故に之を畫と謂はず。山水家に潑墨あるが如き、亦之を畫と謂はず倣效に堪えず。江南は地潤ひて塵なく、人に精藝多し。三吳の跡、八絶の名、逸少

右軍、長康散騎(顧愷之)、書畫の能、其の來る尙し。淮南子云ふ、宋人は畫を善くし、吳人は治を善くすと亦然らずや。好事家宜しく宣紙百幅を置き、法を用ひて之を蠟し以て摹寫に備ふべし。古時は榻畫を好み、十に七八を得るに、神采、筆蹤を失はず。亦御府の榻本あり、之を官榻と謂ふ。國朝の内庫、翰林、集賢、祕閣、榻寫して輟ます。承平の時、此の道甚だ行はれしが、艱難の後、斯の事漸く廢す。故に非常の好本ありて、之を榻得せば、宜しく之を寶とすべき所。既に其の眞蹤を希ふべく、又留めて證驗と爲すを得ん。

遍く衆畫を觀るに、唯顧生が古賢を畫く、其の妙理を得。之に對して人をして終日倦まざらしむ。凝神遐想、妙悟自然、物我兩ながら忘れ、形を離れ智を去る。身固より槁木の如くならしむべく、心固より死灰の如くならしむべし。亦妙理にいたらずや、所謂る畫の道なり。顧生首めて維摩詰が像を創め、清羸示病の容、几に隱り言を忘るゝ狀あり。陸と張と皆之に效へども、終に及ばず。

名價、品第を論ず

あるひと曰く、「昔、張懷瓘、書估を作り、其の等級を論ずる甚だ詳らかなり。君なんぞ古よりの

名畫を詮定して畫估を爲らざる」と。張子曰く、書畫は道殊なり渾詰すべからず。書は即ち字を約して以て價を言ひ、畫は則ち涯の以て名を定むるなし。況んや漢魏、三國の名蹤、已に代に絶えたるをや。今人、耳を貴び目を賤しみ、能く詳鑿する罕なり。若し傳授昧らず、其の物猶存せば、則ち有國有家の重寶と爲す。晉の顧、宋の陸、梁の張、首尾完全ならば、希代の珍たり。皆價を論ずべからず。其の偶方寸を獲る如きは、便ち械持すべし。之を書價に比すれば、則ち顧、陸は鍾、張に同じかるべく、僧繇は逸少に同じかるべし。書は則ち逡巡して成すべきも、畫は歲月に非ずんば就るなし。書の畫より多きこと古より然る所以なり。今分ちて三古と爲し以て貴賤を定む。漢、魏、三國を以て上古と爲す。則ち趙岐、劉夔、蔡邕、張衡（已上四人後漢）曹髦、楊修、桓範、徐邈（已上四人は魏）曹不興（吳）諸葛亮（蜀）の流是なり。晉、宋を以て中古と爲す。則ち明帝、荀勗、衛協、王廙、顧愷之、謝稚、稽康、戴逵（已上八人は晉）陸探微、顧寶光、袁倩、顧景秀（已上四人は宋）の流是なり。齊、梁、北齊、後魏、陳、後周を以て下古を爲す。則ち姚曇度、謝赫、劉瑱、毛惠遠（已上四人は齊）元帝、袁昂、張僧繇、江僧寶（已上四人は梁）楊子華、田僧亮、劉殺鬼、曹仲達（已上四人は北齊）蔣少游、楊乞德（已上二人は後魏）顧野王（陳）馮提伽（後周）の流是なり。

隋及び國初は、近代の價と爲す。則ち董伯仁、展子虔、孫尚子、鄭法士、楊契丹、陳善見（已上六人は隋）張孝師、范長壽、尉遲乙僧、王知慎、閻立本（已上六人は唐朝）の流是なり。上古は質略にして徒に其の名あり、畫の蹤跡具に見るべからず。中古は妍質相まじはり、世の重する所。顧、陸の跡の如きは人間の切要なり。下古は評量科簡、やゝ辯解し易く、迹、今時の人の悦ぶ所に涉る。其の間、中古の上古に齊しくすべきあり、顧、陸是なり。下古に齊しくすべきは、僧繇、子華是なり。近代の價の下古に齊しくすべきは、董、展、楊、鄭是なり。國朝の畫の中古に齊しくすべきは、則ち尉遲乙僧、吳道玄、閻立本是なり。若し詮量次第すれば數百等あらんも、今且つ俗の知る所を擧げて言ふ。凡そ人間の藏蓄、必らず當に顧、陸、張、吳が著名の卷軸ありて、方に圖畫ありと言ふべし。若し書畫ありと言はゞ、豈に九經、三史なかるべけんや。

顧、陸、張、吳は正經と爲し、楊、鄭、董、展は三史と爲し、其の諸雜迹は百家と爲す。必ずや手に卷軸を揣り、口に貴賤を定め泉貨を惜まず。篋笥に藏せんと要するときは、則ち董伯仁、展子虔、鄭法士、楊子華、孫尚子、閻立本、吳道玄が屏風の一片、值金二萬次は一萬五千に售ふ（隋より以前、多く屏風に畫き、未だ畫幀あるを知らず。故に屏風を以て准と爲す）其の楊契丹、

田僧亮、鄭法輪、乙僧、閻立德が一扇、價金一萬。且つ俗間諳悉の者を擧ぐ。此を推して言ふときは、流品を見るべし。夫中品の藝人、合作の時あれば上品の藝人に齊しくすべく、上品の藝人も未だ道せざる日に當りては、たましく中品に落つ。唯下品は合作ありと雖も、上品に厠はるを得ず。通博の人に在りては時に臨みて其の妍醜を鑒せよ。只張顛の如き、草を善くするを以て名を得、楷隸は未だ必ずしも人の爲に寶とせられざるも、余曾て小楷を見るに、樂、毅、虞、褚の流なり、韋鷹は馬を畫くを以て名を得、人物は未だ必ずしも人の爲に貴ばれざるも、余、人物を畫くを見るに、顧、陸とひとしくすべし。

夫大畫と細畫と、筆を用ふるに殊なるあり。其の妙にいたる者、乃ち數體あり。只王右軍の書の如き、乃ち自ら數體あり。諸行草に及びては、おの／＼時に望み思を構ふる深淺によるのみ。畫の妙にいたるも、亦猶書に於けるがごとし。此須らく廣見博論すべく、匆匆一槩して取るべからず。昔は裴孝源、すべて畫を知らず妄に品第を定めしが、大に觀るに足らざりき。但之を好めば則ち金玉よりも貴く、好まざれば則ち瓦礫よりも賤し。之を要するに人に在り。豈に價を言ふべけんや。

鑒識、收藏、購求、閱玩を論ず

夫書を識る人は多く畫を知る。古より寶玩を蓄聚する家もとよりまた多し。則ち收藏して未だ鑒識する能はず、鑑識して閱玩を善くせざる者、閱玩して裝褉すること能はず、裝褉して殊に銓次を亡ふ者あり。此皆好事者の病なり。貞觀、開元の代は、古よりの盛時なり。天子神聖にして多才、士人精博にして好藝、至寶を購求し、之に歸すること雲の如し。故に内府の圖書之を大備と謂ふ。或は進獻して以て官爵を獲るあり、或は搜訪して以て錫賚を獲るあり又從來蓄聚の家、自ら圖書の府と號するあり。蓄聚既に多ければ、必ず佳なる者あり。妍蚩渾雜、亦詮量に在り。是の故に其の人に非ざれば、近代と雖も亦朽蠹し、其の地を得れば則ち遠古も亦完全なり。其の晋宋の名跡ある、煥然として新なる如く已に數百年を歴るも、紙素彩色未だ甚だ敗れざるに、何故に開元、天寶間の蹤跡、或は已に耕散せる。良に寶の其の地を得ざるに由る。夫金は山より出で珠は泉に産す。之を取りてやまず、天下の用と爲る。圖書は歲月既に久しく、耕散將に盡きんとし、名人、藝士、復び更に生るべからず。惜まざるべけんや。

それ人、寶玩を善くせざる者は、動もすれば勞辱を見、卷舒の所を失ふ者は操揉便ち損じ、裝

襪を解せざる者は手に随ひて棄捐し、遂に眞迹をして漸く少からしむ、亦痛ましからずや。好事の者に非ざれば妄に書畫を傳ふべからず。火燭に近きて書畫を観るべからず。風日に向ひて正に凜飲し、唾涕して手を洗はざる、並に書畫を観るべからず。昔は桓玄、圖書を愛重し毎に賓客に示す。客に好事ならざる者あり、正に寒具を凜せしが（按ずるに寒具は即ち今の環餅にして、酥油を以て之を煮る。遂に物を汚すなり）手を以て書畫を捉へ大に點汚す。女惋惜して時を移し、自後法書を出す毎に、すなはち手を洗はしめき。人家は一平安牀褥を置くを要す。拂拭舒展して之を観る。大巻軸は宜しく一架を造るべし。觀るときは則ち之を懸く。凡そ書畫は時時舒展すれば、即ち蠹溼を免る。余は弱年より、遺失を鳩集し、鑒玩裝理し、晝夜精勤し、一卷を獲、一幅に遇ふ毎に、必ず孜孜費綴して日を竟へ、寶玩の致すべき者は必ず貨し、弊衣を貸し糲食を減じたれば、妻子僮僕、切切嗤笑せり。あるひと曰く、終日、無益の事を爲す。竟に何の補あらんやと。既にして歎じて曰く、若し復無益の事を爲さずんば、則ちいづくんぞ能くかぎりある生を悦ばしめんと。是を以て愛好愈よ篤く、癖を成すに近し。清晨、閒景毎に、竹窓、松軒、千乘を以て輕しと爲し、一瓢を以て倦めりと爲す。身外の累、且つ長物なきも、唯書と畫と猶未だ情を忘れず。既に頽然として以て言を忘れ、又怡然として以て觀閱す。常に竊に御府の名迹を觀て、以

て書畫の廣博を資くるを得ざることを恨む。

又好事家は、以て假借に難る。況や眞本少なるをや。書は則ち筆法を得ず字を結ぶ能はず。已に家聲を墜し終身の痛を爲す。畫もまた迹、意に逮ばずたゞ以て自ら娛しめども、夫の熬熬汲汲として、名利こもく胸中に戰ふと、また猶賢らずや。昔、陶隱居は梁の武帝に啓して曰く、「愚固より博渉なるも、未だ精しき能はざるを患へ、苦だ書なきを恨む。願はくば主書令史たらん」と。晩に楷隸を愛し又典掌の人を羨みき。人生數紀の内、識解、天壤に周流する能はず、區區として惟五慾を恣にすること實に愧耻すべし。毎に以へらく、才鬼たるを得ば猶頑仙に勝ると。此陶隱居が志なり。是に由りて書畫皆清妙と爲る。況や余が凡鄙なるをや。二道に於て能く癖好するなからんや。（今、彦遠又別に法書要錄等撰し、共に二十卷と爲す。好事の者、余が二書を得ば、則ち書畫の事畢らん。）

裝背、標軸を論ず

晉代より以前、裝背佳ならざりしが、宋の時、范曄始めて能く裝背せり。宋の武帝の時に徐爰、明帝の時に虞翻、巢尚之、徐希秀、孫奉伯、圖書を編次し、裝背を妙と爲し、が、梁の武帝は朱

昇、徐僧權、唐懷克、姚懷珍、沈織文等に命じて、又裝護を加へしめたり。國朝の太宗皇帝は典儀王行眞等をして裝褉せしめ、起居郎褚遂良、較書郎王知敬等をして監領せしむ。凡そ圖書本、是首尾完全著名の物は、たやすく割截改移を議する限に在らず。若し錯綜次第を要せば、或は三紙、五紙、三扇、五扇、また上中下等相揉雜す。本詮次なき者は必ず宜しく好處を與へて首と爲すべし。下なる者之に次ぎ、中なる者を最も後とす。何を以て然るか。凡そ人の畫を觀る、必ず開卷に鋭く、將に半ならんとするに懈怠し、次に中品に遇ひ覺えず留連し以て卷終に至る。此れ虞齋が書畫を裝ふを論する例にして、理に於て甚だ暢ぶ。凡そ糊を煮るには、必ず筋を去り、稀緩、所を得、之を攪して停まらずんば、自然に調熟す。余往往少細の研薰陸香末を入るゝこと拙意より出づ。永く蠹を去りて牢固なり。古人未だ之を思はざるなり。汧國公の家、書畫を背するに少蠟を入る。要は密潤に在り。此の法宜しきを得たり。(趙國公李吉甫が家云ふ、書を背するには、黃硬を要すと。余が家に數帖の黃硬書あるも、都て堪へず。陰陽の氣をうかゞひて以て調適す。秋を上時と爲し、春を中時と爲し、夏を下時と爲す。暑溼の時は用ふべからず。熟紙を以て背する勿れ。必ず皺起せん。宜しく白滑漫薄の大幅生紙を用ふべし。紙縫は先づ人面及び要節の處を避く。若し縫縫相當らば則ち強急に、卷舒して損するあらん、其の縫を參差せしむるを要す。

則ち氣力均平なり。太硬なれば則ち強急に、太薄なれば則ち力を失ふ。絹素彩色は、擣理すべからず。紙上の白畫は、砧石を以て妥帖すべし。宜しく一太平案をつくり、漆板朱界、其の曲直を制すべし。古畫は必ず積年の塵埃あり。須らく皂莢清水を用ひ、數宿之を漬し、平案にて其の塵垢を扞去すべし。畫復鮮明に、色亦落ちず。補綴擗策は、油絹にて之を襯し、其の邊際を直くし、其の隙縫を密にし、其の經緯を端しくし、其の形制に就き、其の遺脱を拾ひ、厚薄均調、潤潔平穩にして、然して後乃ち鏤沉檀を以て軸と爲し、首は或は裏纒束金を飾と爲す。白檀身を上と爲す。香潔にして蠹を去る。小軸を白玉を上と爲し、水精を次と爲し、琥珀を下と爲す。大軸は杉木漆頭、輕圓最も妙なり。前代多く雜寶を用ひて飾と爲しが、剝壞し易し。故に貞觀、開元中、内府の圖書は、一例に白檀身、紫檀首、紫羅標、織成帶を用ひて、以て官畫の標と爲す。或者云ふ、書畫は標軸を以て害を買ふ。宜しく飾を盡すべからずと。余曰く、裝の珍華にして、まともな藻繡を以てし、絨縑蘊藉、方に宜稱と爲す(其の古の異錦は、李章武が集むる所の錦譜に具す)必ず若し大盜至るとも、亦何ぞ寶惜を計らん。梁朝大に圖書を聚め、古より盛なりと爲しか、湘東の敗に烟焰天に漲れり、此其の運なり。況んや私室の寶持をや。子孫不肖なるときは、大なれば則ち篋をひらきて以て勢家に遺り、小なれば則ち軸を擧げて以て朝饌に易ふ。此又時なり。亦

何ぞ嘆くべけんや。

圖畫見聞誌

郭 若 虛 (宋)

諸家の文字を叙す

古より近代に及ぶまで、畫筆を紀評する文字は一に非ずして、悉く具載し難きが、聊か其の見聞の篇目を以て之に次す。凡て三十家なり。

- 名畫集 (南齊の高帝撰) 古畫品錄 (謝赫撰) 裝馬譜 (毛惠遠撰)
- 昭公錄 (梁の武帝撰) 脩繇錄 (亡名氏) 畫說文 (亡名氏)
- 述畫記 (後魏の孫暢之撰) 續畫品錄 (陳の姚最撰) 後畫錄 (唐の沙門彥悰撰)
- 畫 斷 (張懷瓘撰) 名畫獵精錄 (亡名氏) 後畫品錄 (李嗣真撰)
- 雜色駿騎錄 (韓幹撰) 繪 境 (張璪撰) 畫 評 (顧況撰)
- 續畫評 (劉整撰) 公私畫錄 (裴孝源撰) 畫拾遺錄 (竇蒙撰)

畫山水錄(吳恬撰、一名は珍) 唐朝名畫錄(朱景真撰)

歷代名畫記(張彥遠撰)

34

畫山水訣(荆浩撰、一名洪谷子) 梁朝畫目(亡名氏)

廣畫新集(蜀の沙門仁顯撰)

益州畫錄(辛顯撰)

江南畫錄(亡名氏)

江南畫錄拾遺(徐鉉撰)

廣梁朝畫目(皇朝の胡嶠撰)

總畫集(黃休復撰)

本朝畫評(劉道醇纂 符嘉應撰)

國朝の求訪を敘す

畫の源流は諸家備さに載す。爰に唐季の兵難、五朝の亂離より圖畫の好、乍ち存し乍ち失す。我が宋に逮びて上は天命に符し、下は人心に順ひ、皇基を肇建し、六合を肅清す。沃野謳歌の際、復び堯風を見、坐客閑晏の餘、兼ねて繪事を窮めたり。太宗皇帝は欽明濬哲、富藝多才、時方さに諸僞、眞に歸し、四荒、譯を重ね、萬幾の暇豊かなりしかば、屢珍奇を購ひ、太平興國の間天下郡縣に詔して前哲の墨蹟圖畫を搜訪せしむ。是より先き荆湖轉運使は漢の張芝の草書、唐の韓幹の馬二本を得、以て之を獻じ、韶州は張九齡の畫像並に文集九卷を得て表進し、後、繼ぐ者、勝げて紀すべき難し。又待詔高文進、黃居來に勅して、民間の圖畫を搜訪せしむ。端拱元年、崇文院の中堂を以て祕閣を置き、吏部侍郎李至に命じて祕書監を兼ね、供御の圖畫を點檢せしめ、

三館の正本書萬卷を選びて之に實て、祕監以て進御し、退餘は閣内に藏し、又中より圖畫並に前賢の墨蹟數千軸を降して之を藏せしむ。淳化中、閣成るや、上、飛白書額し、親幸し、近臣を召して圖籍を縱觀せしめ、宴を賜ひ、又供奉僧元霽が寫し、所の御容二軸を以て閣に藏せしむ。又天章、龍圖、寶文の三閣あり、後苑に圖書庫ありて、皆圖書を藏貯する府なり。祕閣、每歲、暑伏に因りて曝曬し、近侍および館閣の諸公をして、筵を張りて縱觀せしむ。圖典の盛んなること、天祿、石渠、妙楷、寶蹟に替ふる無し。

古よりの規鑿を敘す

易に稱す、聖人以て天下の隨を見るあり、而してこれを其の形容に擬し、其の物宜に象どる。故にこれを象と謂ふと。又曰く象なる者は此を像る者なりと。嘗て前賢の畫論を考ふるに、首めに人に像どると稱し、獨り神氣、骨法、衣紋、向背を難しと爲すのみならず。蓋し古人必ず聖賢の形像、往昔の事實を以て、毫を含み素に命じ、製して圖畫と爲す者要するに賢愚を指鑿し治亂を發明するに在り。故に魯殿に興廢の事を紀し、麟閣に勳業の臣を繪き、曠代の幽潛を迹し、無窮の炳煥を託す。昔、漢の孝武帝は鈎弋趙婕妤の少子を以て嗣と爲さんと欲し、大臣に命じて之

85

を輔けしめんとせしが、惟霍光のみ重大に任じて社稷を屬すべし。乃ち黃門畫者をして周公が成王を輔けて諸侯を朝せしむるを畫かしめ、以て光に賜ふ。孝成帝は後庭に遊び、班婕妤を以て輦を同じくして載らんと欲す。婕妤辭して曰く、古圖畫を觀るに、聖賢の君みな名臣の側に在るも三代の末主は乃ち嬖倖あり。今輦を同じくせんと欲せば之に近似するなきを得んやと。上、其の言を善しとして止む。太后これを聞き、喜びて曰く古は樊姬あり、今は班婕妤ありと。又嘗て宴飲の會を設けしが、趙、李の諸侍中、皆滿を引き白を擧げ、談笑して大噱す。時に乘輿の幄坐、畫屏風を張り、紉が酔ひて姐己に踞し、長夜の樂を作すを畫く。上因て顧みて書を指し、班伯に問ひて曰く、紉が無道をなすこと是に至るか。伯曰く、書に云ふ、乃ち婦人の言を用ふと。何ぞ朝に踞肆するあらん。所謂る衆惡之に歸するにて是の如く甚だしき者ならざるなりと。上曰く苟しくも此の如くならざる時は、此の圖何をか戒しむと。伯曰く、酒に沈湎するは、微子が去るを告ぐる所以なり。もつて號びもつて諄ぶは、大雅に流連とする所以なり。淫亂の戒しめを書して、其の原、酒にあるを謂ふなりと。上喟然として歎じて曰く、久しく班生を見ざりしが、今日復讜言を聞けりと。後漢の光武の明德馬皇后は、色に美にして德に厚ければ、帝用て之を嘉したり。嘗て從ひて虞舜が娥皇、女英を見るを畫くを觀る。帝之を指して后に戯れて曰く、此の如

きを妃と爲すを得ざるを恨むと。又前みて陶唐(堯)の像を見る。妃、堯を指して曰く、嗟乎群臣百僚、君たること是の如きを得ざるを恨むと。帝顧みて笑ふ。唐の德宗詔して曰く、貞元己巳歲秋九月、我、西宮を行きて閔闈の崇構を瞻、老臣の遺像を見、頓然肅然、和敬、色に在り。雲龍の叶應を想ひ、致業の艱難を感じ、往を親今を思ひ、類を取ること遠きに非ずと。文宗の太和二年、自ら尙書中の君臣の事迹を撰び、畫工に命じて、太液亭に圖かしめ、朝夕に觀覽す。漢の文翁が學堂益州大城内に在り。昔、頽廢を經しが、後漢の蜀郡太守高朕復び繕立し、乃ち古人聖賢の像、及び禮器、瑞物を壁に圖く。唐韋の機は檀州刺史となり、邊人僻陋にして、文儒の貴きを知らざるを以て、學館を修め、孔子の七十二弟子、漢、晉の名儒の像を畫き、自ら讚をつくり、あつく生徒を勸めたりしが、茲によりて大に化せり。それはの如し。豈に文未だ經緯を盡さず、而して書も形容する能はず、然して後にこれを畫に繼ぐに非ずや。所謂る六籍と功を同じくし、四時と並び運るといふも、亦宜なる哉

圖畫の名意を叙す

古の祕畫珍圖、名、意に隨ひて典範を立つ。則ち春秋、毛詩、論語、孝經、爾雅等の圖あり、

其の次は、後漢の蔡邕に講學圖あり、梁の張僧繇に孔子問禮圖あり、隨の鄭法士に明堂朝會圖あり、唐の閻立德に封禪圖あり、尹繼昭に雪宮圖あり。徳を觀るには則ち帝舜、娥皇、女英圖あり。隋の展子虔に禹治水圖あり、晉の戴逵に列女仁智圖あり、宋の陸探微に勳賢圖あり。忠鯁には則ち隋の楊契丹に辛毘引裾圖あり、唐の閻立本に陳元逵諫圖あり、吳道子に朱雲折檻圖あり。高節には則ち晉の顧愷之に祖三疏圖あり。王廙に木雁圖あり、宋の史藝に屈原漁父圖あり、南齊の蘧伯珍に巢由洗耳圖あり。壯氣には則ち魏の曹髦に下莊刺虎圖あり、宋の宗炳に獅子擊象圖あり、梁の張僧繇に漢武射蛟圖あり。寫景には則ち晉の明帝の輕舟迅邁圖あり、衛協に穆天子宴瑤池圖あり、史道碩に金谷園圖あり、顧愷之に雪霽望五老峰圖あり。靡麗には則ち晉の戴逵に南朝貴戚圖あり、宋の袁倩に丁貴人彈曲項琵琶圖あり、唐の周昉に楊妃架雪衣女亂雙陸局圖あり。風俗には則ち南齊の毛惠遠に剡中溪谷村墟圖あり、陶景真に永嘉屋邑圖あり、隋の楊契丹に長安車馬人物圖あり、唐の韓滉に堯民擊壤圖あり。以上の圖畫、盡く其の蹟を見る能はずと雖も前人之を載せて甚だ詳なれば、たゞ其の佳名を愛し、聊か一二を取り、類して之を録す。

製作の楷模を論ず

大率そ圖畫は風力氣韻、固より人に當るに在り。其の種種の要の如きは察せざるべからず。人物を畫く者は、必ず貴賤の氣貌、朝代の衣冠を分つ。釋門には即ち善功方便の顔あり、道像には必ず修真度世の範を具し、帝王には當に上聖天日の表を崇ぶべく、外夷には應さに慕華欽順の情を得べく、儒賢には即ち忠信禮儀の風を見、武士は固より勇悍英烈の貌多く、隱逸はもとより肥遯高世の節を知り、貴戚は蓋し紛華修麗の容を尙び、帝釋は須らく威福嚴重の儀を明らかにすべく、鬼神は乃ち醜醜馳趨の狀を作り、士女は宜しく秀色嫵媚の態富むべく、田家は自ら醇朴朴野の眞ありて、恭驚愉慘、又其の間に在り。衣紋、林石を畫くには用筆全く書に類す。衣紋を畫くに、重大にして調暢なる者あり、縝細にして勁健なる者あり。勾綽縱掣、理に妄下なく、以て高側深斜卷摺飄擧の勢を狀す。林木を畫くには、樛枝、挺幹、屈節、皴皮あり、紐裂多端、分敷萬狀、怒龍驚虺の勢を作り、凌雲翳日の姿を聳やかす。宜しく崖岸豊隆を須ひて、方さに蟠根老壯に稱ふべし。山石を畫くには多く磬頭を作り、亦凌面を爲り、落筆すなはち堅重の性を見、皴淡即ち窟凸の形を生じ、毎に素を留めて雲を成し、或は地を借りて雪を爲すも、其の破蓋の功尤も難しと爲す。畜獸を畫くには全く向背を停分し、筋力精神、肉は肥圓を分ち、毛骨隱起す。仍諸物稟くる所の動止の性を分つを要す（四足は唯兔のみ掌底に毛あり。之を建毛と謂ふ）龍を畫くには

三停を析出し（首より膊に至り、膊より腰に至り、腰より尾に至るなり）九似を分成し（角は鹿に似、頭は駝に似、眼は鬼に似、項は蛇に似、腹は蜃に似、鱗は魚に似、爪は鷹に似、掌は虎に似、耳は牛に似たり）游泳蜿蜒の妙を窮め、回蟠升降の宜きを得、仍て鬚鬣肘毛、筆畫壯快、直ちに肉中より生出するを要して佳なりと爲すなり（凡そ龍を畫くには、口を開く者は巧を爲し易く、口を合する者は功を爲し難し。畫家、口を開く猫兒、口を合する龍と稱するは、其の兩難を言ふなり。）水を畫くには三擺の波、三摺の浪あり、之の字の勢を布き、虎爪の形を分ち、湯々として動くがごとく、觀る者をして浩然として江湖の思あらしむるを妙と爲すなり。屋木を畫くには折算虧くるなく、筆畫勻壯、深遠透空、百邪を一去すること、隋、唐、五代已前、國初に洎び、郭忠恕、王士元の流の如し。樓閣を畫くには多く四角を見、其の斗拱に逐鋪してこれを作爲し、向背分明にして、細墨を失はず。今の畫く者は多く直尺を用ひ、一に界畫に就きて斗拱を分成し、筆迹繁雜にして壯麗閒雅の意なし。花果、草木を畫くには、自から四時の景候、陰陽、向背あり。筍條の老嫩、苞萼の後先、諸園蔬、野草に逮ぶまで、威士を出づる體性あり。翎毛を畫くには、必ず須らく諸禽の形體、名件を知識すべし。喙啄、口險、眼縁より、叢林腦毛、披箋毛翅。梢翅あり、蛤翅あり、翅邦上に大節、小節、大小窩翎あり、次に六梢に及ぶ。又料風、掠草、散毛、

壓磔、尾肚、毛腿、袴尾、錐脚あり、探爪、食爪、掠爪、托爪、宣黃、八甲あり。鷲鳥は、眼上これを看棚と謂ひ、背毛の間これを合溜と謂ふ。山鵲雞の類は各歳時蒼嫩にして皮毛眼爪の異あり。家鷲鴨は即ち子肚あり。野飛水禽は自然に輕梢あり。此の如き類或は鳴集して羽翮緊戔し、或は寒棲して、毛葉糝泡す。已上具に名體處所あり。必ず須らく融會すべし。一を闕けば不可なり。もし或は未だ漢殿、吳殿、梁柱、斗拱、叉手、替木、熟柱、駝峰、方莖、額道、抱間、昂頭、羅花、羅幔、暗制綽幕、獅獅頭、琥珀枋、龜頭虎座、飛簷、撲水膊風、化廢垂魚惹草、當鈎曲脊の類を識らずんば何に憑りてか以て屋木を畫かんや。畫く者すら尙能く粹究すること罕れなり。況んや觀る者をや。

衣冠の異制を論ず

古より衣冠の制は、荐りに變更あり。事を指して形を繪くには必ず時代を分つ。袞冕法服、三禮備さに存し、物狀寔に繁し、得て載すべきこと難し。漢魏已前、始めて幅巾を戴き、晉宋の世、方さに鬚籬を用ひ、後周は三尺の皂絹を以て、後に向ひて髪を幘し、折上巾と名け、通じて之を幘頭と謂ひしが武帝の時に裁ちて四脚と成せり。隋朝には、惟貴臣のみ黃綾紋袍、烏紗帽、九環

帶、六合靴を服す。次に桐木黒漆を用ひて巾子となし、幘頭の内に裏み、前に二脚を繋ぎ、後に二脚を垂れ、貴賤之を服せしが、烏帽漸く廢せり。唐の太宗嘗て翼善冠を服し、貴臣は進徳冠を服し、則天の朝に至りて絲葛を以て幘頭巾子と爲し、以て官を賜ひしが、開元の間、始めて易ふるに羅を以てし、又別に供奉官及び内臣に圓頭宮様巾子を賜ひ、唐末に至りてはじめて漆紗を以て之を裏めり。乃ち今の幘頭なり。三代の際は皆欄衫を衣る。秦の始皇の時、紫緋綠袍を以て、三等の品服と爲し、庶人は白を以てす。國語に曰く、袍は朝なり、古の公卿の上服なりと。周の武帝の時に至りて、下に欄を加へたり。唐の高宗の朝に、五品已上に隨身魚を給し、又勅品官は、紫服、金玉帶、深淺緋服、並に金帶、深淺綠服、並に銀帶、深淺青服並に鍮石帶、庶人は黃銅鐵帶を服し、一品已下、文官は手巾、算袋、刀子、礪石を帶び、武官もまた聽す。睿宗の朝制に、武官五品已上、七事の跣蹠を帶びしが、(佩刀、刀子、磨石、契必、眞賦、厥針筒、火石袋なり)開元の初、復これを罷めぬ。晉の處士馮翼、衣巾大袖、周縁は皂を以てし、下は欄を加へ、前に二長帶を繋ぐ。隋唐にては、朝野之を服し、之を馮翼之衣と謂ひ、今呼びて直掇と爲す(禮記の儒行篇に、魯の哀公、孔子に問ひて曰く、夫子の服、其儒服かと。孔子對へて曰く、丘少くして魯に居り、逢掖の衣を衣、長じて宋に居り、章甫の冠を冠すと。註に云ふ、逢掖は大なり。逢掖は

大袂禪衣なり。逢掖は馮翼と音相近し)又梁志に袴褶あり、以て戎事に從ふ。三代已前、人皆跣足なりしが、三代以後始て木履を服せり。伊尹、草を以て之をつくり、名を履と曰ふといふ。秦の世、絲革を參用せり。靴はもと胡服なるが、趙の靈王之を好み、有司の衣袍を制する者、宜しく皂靴を穿つべしとし、唐の代宗の朝、宮人の左右に侍する者をして、紅錦鞞靴を穿たしめたり。凡そ經營宜しく詳辨すべき所に在り。閻立本が昭君の虜に妃するを圖くに、帷帽を戴きて以て鞍に據り、王知愼が梁武の南郊を畫くに、衣冠にして馬に跨るあるが如きに至りては、殊に知らず帷帽は隋代より創まり、軒車は唐朝より廢せしことを。名躐たるに害せずと雖も、亦丹青の病なり。(帷帽は今の席帽の如し。周回して網を垂るゝなり)

氣韻は師よりするに非ざるを論ず

謝赫云ふ、畫に六法あり、一に曰く、氣韻生動、二に曰く、骨法用筆、三に曰く、物に應じて形を像る、四に曰く、類に隨ひて彩を傳く、五に曰く、經營位置、六に曰く、傳模移寫と。六法の精論は萬古移らず。然り而して骨法用筆以下の五法は、學びて能くすべきも、其の氣韻の如きは、必ず生知にありて固より巧密を以て得べからず、復歲月を以て到るべからず。默契神會、然

るを知らずして然るなり。嘗試ていしにこれを論ぜん。竊かに觀るに古よりの奇蹟は、多く是軒曼の才賢、巖穴の上士の、仁に依り藝に遊び、蹟を探り深を鈎り、高雅の情、一に畫に寄せたるなり。人品既に已に高ければ、氣韻高からざるを得ず。氣韻既に已に高ければ、生動至らざるを得ず。所謂る神の又神にして、而して能く精くわいし。凡そ畫は必ず氣韻を周なくして、方めて世珍と號す。爾らざれば巧思を竭すと雖も、たゞ衆工の事に同じきのみ。畫と曰ふと雖も、而も畫に非ず。故に揚氏は其の師より授けらるゝ能はず、輪扁も其の子に傳ふる能はず。天機より得、靈府より出づるに繫かればなり。且つ世の押字を相する術の如き、之を心印と謂ふ。本心源よりして形迹を想成し、迹と心と合する、是を印と謂ふ。爰に萬法に及ぶまで、慮に縁よりて施爲しゐし心の合する所に隨ひて、皆名印を得。矧なんや書畫はこれを情思に發し、これを絹楮に契するなれば、則ち印に非ずして何ぞ。押字すら且つ諸貴賤禍福を存す。書畫豈に氣韻の高卑を逃れんや。それ畫は猶書のごときなり。楊子曰く、言は心聲なり、書は心畫なりと。聲、畫、形、君子、小人見みはる。

用筆の得失を論ず

凡そ畫、氣韻は游心に本き、神彩は用筆に生ずれば、用筆の難き斷じて識るべし。故に愛賓と

稱す、惟王獻之能く一筆書をなし、陸探微能く一筆畫をなすと。まさに一篇の文、一物の像にして、能く一筆の就すべきことなきなり。乃ち是始より終に及ぶまで筆に朝揖あり、連綿として相屬し、氣脈斷えず、意は筆先に存し、筆は意内に周ねき所以なり。畫は意を盡して在り、像は應さに神全かるべし。それ内自ら足りて、然して後に神閑しんかんに意定まる、神閑に意定まるときは則ち思竭きずして筆困くわんします。昔、宋の元君、將に畫圖せんとするや。衆史皆至り、揖を受けて立ち筆を砥とりて墨に和し、外に在る者半ばす。一史の後のちて至る者あり、僮たう々然として趨はらず、揖を受けて立たず、因て舍をに之をく。公、人をして之を視せしむるに、則ち衣を解きて盤礴ばんぼくして贏あす。君曰く、可なり。是眞に畫く者なりと。又畫に三病あり、皆用筆に繋る。所謂る三とは、一に曰く版、二に曰く刻、三に曰く結。版とは腕弱く筆癡に、全く取與を虧かき、物狀平褊へいへんにして、圓混なる能はざるなり。刻とは運筆中疑なひ、心手相戻り、勾畫の際、妄に圭角を生ずるなり。結とは行かんと欲して行かず、當さに散すべくして散ぜず、物の凝礙するに似て、流暢なる能はざるなり。未だ三病を窮めず、徒に一偶を擧ぐ。畫く者克くく心を留むる鮮し。觀る者當さに背を拭ふを煩すべし。(大抵氣韻高く、筆畫壯なれば、則ち愈玩びて愈妍なり。其の或は格凡に毫儒なれば、初め觀るとき、縦ひ探るべきに似たるも之を久しくして還復意怠る。)

曹、吳の體法を論ず

曹、吳の二體は、學者の宗とする所。按ずるに唐の張彥遠が歷代名畫記に稱す、北齊の曹仲達は、本曹國の人、最も梵像を畫くに工みなりと推す。是を曹と爲す。唐の吳道子を謂ひて吳と曰ふ。吳の筆其の勢圓轉にして衣服飄舉し、曹の筆、其の體稠疊にして衣服緊窄なり。故に後輩之を稱して、吳帶は風に當り、曹衣は水より出づと曰ふ。又按ずるに、蜀僧仁顯が廣畫新集に、曹を言て曰く、昔、竺乾に康僧會といふ者あり、初めて吳に入り、像を設け道を行ふ。時に曹不興、西國佛畫の儀範を見て之を寫す。故に天下盛に曹を傳へしなりと。又言ふ、吳は宋の吳暎の作に起る。故に吳と號するなりと。且つ南齊の謝赫云ふ、不興の蹟、代復見ず、惟祕閣の一龍頭のみ。其の風骨を觀るに、名を擅まゝにすること虚しからずと。吳暎の説、聲微は蹟暖く、世復傳へず（謝評に云ふ、美を當年に擅まにし、京洛に聲ありと。第三品江僧寶が下に在り）仲達が如きに至りては、北齊の朝に見れ、唐を距ること遠からず。道子は開元の後に顯れ、繪像仍存す。近代の師承を證し、當時の體範に合す。況んや唐室已上、未だ曹、吳を立てず。豈に釋寡に顯れんや。之を要するに談亂る。愛賓が不刊の論、時を推し蹟を驗し、斯の言に愧づるなきなり（雕塑鑄像

亦曹、吳に本く）

吳生が設色を論ず

吳道子の畫古今一人のみ。愛賓稱す、前に顧、陸を見ず、後に來者なしと。其然らずや。嘗て畫く所の牆壁卷軸を觀しに、落筆雄勁にして、傳彩簡淡、或は牆壁間の設色重る處あるも、多く是後人の裝飾なり。今に至るまで畫家、輕く丹青を拂ふ者あり。これを吳裝と謂ふ（雕塑の像に亦吳裝あり）

婦人の形相を論ず

古名士の金童玉女、及び神仙宮中に婦人の形相ある者を歴觀するに、貌は端嚴と雖も、神は必ず清古に、自ら威重儼然たる色ありて、人をして見るときは則ち肅恭して歸仰の心あらしむるも、今の畫く者は、たゞ其の娉麗の容を貴ぶのみ。是悦を衆目に取りて、畫の理趣に達せざるなり。觀る者之を察せよ。

聖像を收藏するを論ず

論者或は曰く、佛、道の聖像を收藏すべからず。其の褻慢^{せつまん}童穢^{どうたい}して、時時展玩すべきこと難からんを恐ると。愚謂へらく、然らずと。凡そ士君子の相與に書畫を觀閲して適と爲すは、則ち必ず閑靜に處す。但精能を鑒賞し、遺像を瞻崇するに、なんぞ褻慢の心あらんや。且つ古人の製する所の佛、道の功德は則ち必ず心を専らにし志を勵まし、其の妙を曲盡し或ひは以て福田利益を希ふ。これ其の尤も著意の者と爲す。況んや吳の曹不興、晉の顧愷之、戴逵、宋の陸探微、梁の張僧繇、北齊の曹仲達、隋の鄭法士、楊契丹、唐の閻立本、閻立德、吳道子、周昉、盧楞伽の流より、近代の侯翼、朱絲、張圖、武宗元、王灌、高益、高文進、王翬、孫夢卿、王道真、李用及び李象坤、蜀の高道興、孫位、孫知微、范瓊、勾龍爽、石恪、金水石城の張元蒲、師訓、江南の曹仲元、陶守立、王齊翰、顧德謙の倫に及ぶまで、佛、道を以て功と爲さざるなし。豈に釋梵の莊嚴、眞仙の顯化、以て雄才の浩博を見、學志の精深を盡す者あるに非ずや。こゝに知る收藏すべからずと云ふ者は未だ要説と爲さざること。

三家の山水を論ず

畫山水はたゞ營丘の李成、長安の關同、華原の范寬、智妙、神に入り、才の高きこと類を出で、三家鼎峙し、百代の標程たり。前古、世に傳はりて見るべき者は王維、李思訓、荆浩の倫の如きありと雖も、豈に能く器を方べんや。近代、專意力學の者は翟院深、劉永、紀眞の輩ありと雖も、後塵を繼ぎ難し（翟は李を學び、劉は關を學び、紀は范を學ぶ）それ氣象蕭疎、烟林清曠、毫鋒穎脫、墨法精微なるは、營丘（李成）の制なり。石體堅凝、雜木豐茂、臺閣古雅、人物幽閒なるは、關氏（關同）の風なり。峰巒渾厚、狀勢雄強、槍筆俱に勻しく、人屋皆質なるは、范氏（范寬）の作なり（烟林平遠の妙、營丘より始まる。松葉を畫き、之を攢針と謂ひ、筆、染淡せずして、自ら榮茂の色あり。關の木葉を畫くや間墨を用ひて搵し、時に枯梢を出す。筆蹤勁利にして、學者殆んど到り難し。范の林木を畫く、或は側形にして偃蓋の如く、別に是一種の風規なれども、但未だ松柏を畫くを見ざるのみ。屋を畫くこと既に質に、墨を以て籠染す。後輩目して鐵屋と爲す）復王士元、王端、燕貴、許道寧、高克明、郭熙、李宗成、丘訥の流あり。或は一體を具へて微に、或は堂室に造るに預り、或は各戸牖を開き皆稱尙すべし。然れども畫を藏する者、之を三

家かに方かぶること、なほ諸子の正經に於けるがごとし（關同は荆浩を師とすと雖も、蓋し青の藍より出づるものなり）

黄、徐が體の異なるを論ず

諺に云ふ、黄筌くわんせんは富貴、徐熙は野逸と。たゞ各其の志を言ふのみならず、蓋し亦耳目の習ふ所、之を手にて得て而して心に應ずるなり。何を以て其の然るを明かにする。黄筌は其の子居來きょらいと、始め並て蜀に事へて待詔と爲れり。筌は後、如京副使に累遷せしが、既にして朝に歸し、筌、眞命を領して宮贊と爲れり（或は曰く、筌、關に到り、未だ久しからずして物故す。今の遺跡、多く蜀中に在る日の作を見る。故に往往廣政の年號あり。宮贊の命は亦恐らくば傳ふるもの、誤ならんと）居來復待詔を以て錄せられ、皆禁中に給事し、多く禁裏きんざいに有る所の珍禽、瑞鳥、奇花、怪石を寫す。今、世に傳ふる桃花鷹鷂、純白雉兔、白盆鸚鵡、孔雀龜鶴の類是なり。又翎毛は、骨氣、豐滿を尙び、而して天水、色を分つ。徐熙は江南の處士、志節高邁にして放遠不羈、多く江湖に有る所の汀花、野竹、水鳥、閑魚を狀まがく。今、世に傳ふる鳧雁鷺鷥、蒲草鰕魚、叢艷折枝、園蔬藥苗の類是なり。又翎毛は形骨輕秀を貴び、しかして天水、色を通ず（多狀と言ふは、人の

稱に縁り、聊か兩家の作用を分つも、亦時に臨み意を命するに在り。大抵江南の藝は骨氣は多く蜀人に及ばざるも、而も瀟洒は之に過ぐるなり）二者は春蘭秋菊、各重名を擅まゝにし、筆を下せば珍を成し、毫を揮へば範とすべし。復居來の兄居實あり、徐熙の孫を崇嗣と曰ひ、崇矩と曰ひ、蜀に刁處士てうし（名光胤）劉贊、滕昌祐、夏侯延祐、李懷袞あり、江南に唐希雅、希雅の孫を中祚と曰ひ、宿と曰ひ、及び解處中の輩あり、都下に李符、李吉の儔ともあり、及び後來名手間出し、徐生と二黄とを跋望すること、なほ山水の正經あるがごとし（黄筌の刁處士を師とする、なほ關同が荆浩を師とするがごとし。）

畫龍の體要を論ず

畫龍は惟五代の四明の僧傳古大師其の名最も著る。其の體を觀るに、則ち筆墨遒爽にして善く蜿蜒の狀を爲す（皇建院法堂の屏風は、是其の眞迹なり）任從一待詔（宋人）の作に至りて、稍怪怒を加ふ（建隆觀翊教院玉皇殿後は、是其の眞迹なり）今、崔曰が圖く所、又其の要を得たり（建隆觀翊教院玉皇殿中羅藤邊、一龍頭あり、北都大安寺の羅漢壁に、龍一條あり）恨む弗興（曹弗興）が祕閣の頭を見ざるを。軌範同じきや否や。又知らず葉公が當日遇ひし所、その狀何如な

るを。昔、蒙龍氏歿せしより、龍復な擾れず。所謂る上、天に飛び、晦、層雲を隔て、下、泉に歸り、深、無底に入り、人得て見るべからざるものなり。今の圖寫固より難し。惟形似を以てし、但其の揮毫、落墨、筋力、精神を觀るのみにして、理、吳畫の鬼神に契す（前三停、九似を論ぜしは、亦人多く眞龍を識らざるを以て、先匠遺す所の傳授の法なればなり。）

古今の優劣を論ず

或問あひとふ、近代の至藝、古人と何如と。答へて曰く、近代は古にくらぶるに多く及ばざれども、しかも過ぐるもの亦これあり。若し佛道、人物、士女、牛馬を論ずれば、則ち近は古に及ばず。若し山水、林石、花竹、禽魚を論ずれば、則ち古は近に及ばず。何を以て之を明にする。且つ顧陸、張、吳、中、二閻に及ぶまで、皆純重雅正にして、性は天然に出づ（晉の顧愷之、宋の陸探微、梁の張僧繇、唐の閻立本、閻立德、及び吳道子なり）吳生の作は萬世の法と爲る。號して畫聖と曰ふも、亦宜ならずや（已上、皆佛道の人物を極む）張、周、韓、戴は、氣韻、骨法、皆意に出づ（唐の張萱、周昉、皆士女に工みに、韓幹は馬を畫き、戴嵩は牛に工なり。或問ひて曰く、何を以て但韓幹を擧げて、而して曹霸を言はず、止戴嵩を引き、而して韓昇を稱せざると。答

へて曰く、韓は曹將軍を師とし、戴は韓晉公を師とす。但其の弟を擧ぐれば、其の師を知るべし。韋鑿および猶子鷗が如きに至りては、皆畫馬を善くすれども、但其の尤も著はれたる者を取りて之を明にす。即ち遍く擧げ難ければなり）後の學者、終に能く到るなし。故に曰く、近は古に及ばずと。李（李成）と關（關同）范（范寬）との迹、徐（徐熙）および二黃（黃筌、居來）の蹤の如きに至りては、前に師資に藉らず、後に復踵またもとを繼ぐなし。借使たとい二李、二王の輩をして復起り、邊鸞、陳庶の倫をして再び生れしむるも、亦將に何を以て手を其の間に措かんとするや。故に曰く、古は今に及ばずと（二李は則ち李思訓將軍、并に其の子李昭道中含、三王は則ち王維右丞、及び王熊、王宰、悉く山水に工なり。邊鸞、陳庶は花鳥に工なり。並に唐人なり）是を以て今を推して古を考ふれば、事絶え理窮まる。觀る者必ず金鏤を辨じて玉石を焚くなかれ。

林泉高致

郭

熙(宋)

山水訓

君子の夫の山水を愛する所以の者は其の旨安くにか在る。丘園に素を養ふは常に處る所なり。泉石に嘯傲するは常に樂しむ所なり。漁樵隱逸は、常に適する所なり。狷鶴くわんかくの飛鳴は、常に觀る所なり。塵囂ちんじやうの鞶鎖ばんさはこれ人情の常に厭ふ所なり。烟霞仙聖はこれ人情の常に願ひて見るを得ざる所なり。たゞ太平の盛日、君親の心ふたつながら隆んなるを以て、苟くも一身を潔くし、出處節義これ係る。豈に仁人の高蹈遠引して、離世絶俗の行を爲し、而して必ず箕穎と素をひとしくし、黄、綺と芳を同じくせんや。白駒の詩、紫芝の詠、皆已むを得ずして長往するものなり。然らば則ち林泉の志、烟霞の侶は、夢寐にありて耳目斷絶せり。今、妙手を得、鬱然として之を出し、堂筵を下らず、坐して泉壑を窮め、狷聲鳥啼、依約として耳にあり、山光水色、滉漾して目

を奪はゞ、これ豈に人意を快くして實に我が心を獲るにあらずや。これ世の夫の畫山水を貴ぶ所以の本意なり。此をこれ主とせずして而して輕心之に臨む。豈に神觀を蕪雜にし、清風を溷濁するにあらずや。

山水を畫くに體あり、鋪舒ほしよして宏圖と爲して餘りなく、消縮して小景と爲して少かず。山水を見るにも亦體あり、林泉の心を以て之に臨むときは則ち價高く、驕侈の目を以て之に臨むときは則ち價低し。

山水は大物なり。人の見る者、須らく遠くして之を觀るべし。方に一障山川の形勢氣象を見得ん。士女人物小小の筆の若きは、即ち掌中几上、一展してすなはち見、一覽してすなはち盡くす、此皆畫の法なり。

世の篤論に謂ふ、山水に行くべき者あり、望むべき者あり、遊ぶべき者あり、居るべき者ありと。畫凡そこゝに至れば皆妙品に入る。たゞ行くべく望むべきは居るべく遊ぶべきの得たりと爲すを知らず。何となれば今の山川を觀るに、地、數百里を占むるに遊ぶべく居るべき處、十に三四無きも、しかも必ず居るべく遊ぶべき品を取る。君子の林泉を渴慕する所以のもの、正に此の佳處を謂ふ故なり。故に畫く者、まさに此の意を以て造るべし。而して鑒るもの又まさに此の意

を以て之を窮むべし。これを其の本意を失はずと謂ふ。

畫亦相法あり。李成の子孫昌盛なり。其の山脚地面は、皆渾厚闊大、上秀で、下豊なること、まさに後あるべき相なり。たゞ相を論ずるのみに非ず、理まさに此の如くなるべきを兼ぬる故なり。

人の畫を學ぶは書を學ぶに異るなし。今、鍾（鍾繇）王（王羲之）虞（虞世南）柳（柳公權）を取らば、久しくして必ず其の彷彿に入らん。大人達士に至りては、一家に局せずして、必ず兼收並覽廣議博考し、以て我をして自ら一家を成さしめ、然して後得たりと爲す。今齊魯の士、たゞ營丘（李成）を摹し、關陝の士、唯范寬に摹す。一己の學すら猶蹈襲を爲す。況んや魯魯、關陝、幅隕數千里、州州縣縣の人人之を作るをや。専門の學、古より病めりと爲すは、正に一律に出づるを謂ふ。而して肯て聽かざる者は、聽かざるの人を罪すべからず。陳述に由るに迨び、人の耳目、新しきを善くし故きを厭ふは、天下の同情なり。故に予おもへらく、大人達士は一家に局せずとはこれなり。

柳子厚善く文を爲るを論ず。余おもへらく、文に止まらず、萬事に訣あること、當に是の如くなるべし。況んや畫に於てをやと。何を以て之を言ふ。凡そ一景の畫は、大小多少を以てせず、

必ず須らく精を注ぎて以て之を一にすべし。精ならざれば、則ち神專らならず、必ず神與に俱に之を成す。神與に俱に成さざれば、則ち精明かならず。必ず嚴重にして以て之を肅しむ。嚴ならざれば則ち思深からず。必ず恪勤して以て之を周ねくす。恪めざれば則ち景完からず。故に情氣を積みて之を強ゆる者は其の迹軟懦して決せず、是精を注がざる病なり。昏氣を積みて之を汨す者は其の狀黯狼して爽やかならず。これ神與に俱に成さざる弊なり。輕心を以て之を挑む者は、其の形脱略して圓かならず。此嚴重ならざる弊なり。慢心を以て之を忽がせにする者は、其の體疎率にして齊はず。是恪勤せざる弊なり。故に決せざれば則ち分解の法を失ひ、爽かならざれば則ち瀟洒の法を失ひ、齊はざれば則ち緊慢の法を失ふ。此最も作者の大病なり。然れども明者と與に道ふべし。

思、平昔、先子（郭熙）の一二圖を作るを見るに、一時委下して顧みざるあり、動もすれば二十日を経て向はず。再三之を體するに是意欲せざるなり。意欲せざるは豈に所謂の情氣といふものに非ずや。又興に乗り意を得て作る毎は則ち萬事俱に忘る。事汨し志撓るゝに及び、外物、一あるときは、則ち亦委て、顧みず。委て、顧みざるは、豈に所謂の昏氣といふ者に非ずや。凡そ落筆の日は必ず明窓淨几に香を焚き、左右に精筆、妙墨あり、手を盥ひ硯を滌ぎ、大賓を見る

が如くし、必ず神閒に意定まり然して後之を爲る。豈に所謂る敢て輕心を以て之を挑ますといふ者に非ずや。已に之を營み、又これを徹り、已にこれを増し、又これを潤し、これを一にして可、又これを再し、これを再して可又これを復し、一圖毎に必ず重複し、終始、嚴敵を戒むが如くし、然して後畢る。これ豈に所謂る敢て慢心を以て之を忽がせにせずといふ者に非ずや。所謂る天下の事は、大小を論ぜず、例へば須らく此の如くなるべし、而して後に成るあらん。先子、思に向ひ、毎に丁寧委曲、論じて此に及ぶは、豈に思をして身を終るまで之を奉じ、以て進修の道と爲さしめしか。

花を畫くを學ぶには、一株の花を以て深坑の中に置き、其の上に臨みて之を瞰るときは、則ち花の四面を得ん。竹を畫くを學ぶには一枝の竹を取り、月夜に因りて其の影を素壁の上に照すときは、則ち竹の眞形出でん。山水を畫くを學ぶこと、何を以てこれに異らん。蓋しみづから山川に即きて之を取るときは、則ち山水の意度見れん。眞山水の川谷は遠く之を望みて以て其の勢を取り、近く之を見て以て其の質を取る。眞山水の雲氣四時同じからず。春は融怡、夏は蒼鬱、秋は疎薄、冬は黯淡同じからず。春山は澹冶にして笑ふ如く、夏山は蒼翠にして滴る如く、秋山は明淨にして粧ふ如く冬山は慘淡にして睡る如し。畫くに其の大意を見て、しかして刻畫の迹をな

さざれば、則ち烟嵐の景象正し。眞山水の風雨は遠望して得べし。しかして近き者は玩習して錯綜起止の勢を究むる能はず、眞山水の陰晴は、遠望して盡すべし。而して近き者は拘狹して、明晦隱見の迹を得る能はず。山の人物は以て道路を標し、山の樓觀は以て勝槩を標し、山の林木映蔽は以て遠近を分ち、山の溪谷斷續は以て淺深を分ち、水の津渡橋梁は以て人事を足し、水の漁艇釣竿は以て人意を足す。大山は堂堂として衆山の主と爲る。分布して以て岡阜、林壑を次で遠近大小の宗と爲す所以なり。其の象、大君赫然として陽に當り、しかして百辟の奔走朝會して、偃蹇背却の勢なきがごときなり。長松は亭亭として衆木の表と爲る。分布して以て藤蘿、草木を次で振挈依附の師帥と爲す所以なり。其の勢は君子軒然として時を得、しかして衆小人之が爲に役使せられて、憑陵愁挫の態なきがごときなり。山の近看は此の如し。遠きこと數里にして看るも又此の如し。遠きこと十數里にして看るも又此の如し。每遠每異は所謂る山形步步に移るなり。山の正面は此の如し。側面も亦此の如し。背面も亦此の如し。每看每異は、所謂る山形面面に看るなり。此の如くならば、これ一山にして數十百山の形狀を兼ねたり。究めざるを得べけんや。春山は烟雲連絡して、人欣々たり。夏山は嘉木繁陰して、人坦々たり。秋山は明淨搖落して、人肅々たり。冬山は昏翳翳塞して人寂々たり。此の畫を看て人をして此の意を生ぜしむること眞に

此の山中に在るが如くならしむ。これ畫の景外の意なり。青烟、白道を見て行かんことを思ひ、平川の落照を見て望まんことを思ふ、幽人、山客を見て居らんことを思ひ、岩窟、泉石を見て遊ばんことを思ふ。此の畫を見て人をして此の心を起さしむること、眞に其の處に即かんとするが如くならしむ。これ畫の意外の妙なり。

東南の山に奇秀多きは天地の東南の爲に私せしに非ざるなり。東南の地極めて下く、水潦の歸する所、漱濯開露の出す所たるを以て故に其の地薄く其の水淺く、其の山、奇峰、峭壁多くして霄漢の外に斗出し、瀑布千丈、雲霞の表より飛落すること、華山の垂溜の如し。千丈ならざるに非ざるなり。華山の如き者の鮮きのみ。たとひ渾厚の者あるも、亦多く地上より出で、地中より出づるに非ざるなり。

西北の山に厚渾多きは、天地の西北の爲に偏せしに非ざるなり。西北の地極めて高く、水源の出づる所は岡隴擁腫の埋むる所たるを以て、故に其の地厚く其の水深く其の山堆阜多く、盤礴して連延し、千里の外に断えず、介丘に頂あり、逶迤として四遠の野に拔萃すること嵩山の少室の如し。峭拔ならざるに非ざるなり。嵩の少室の如き者鮮きのみ。たとひ峭拔の者あるも、亦多く地中より出で、地上より出づるに非ざるなり。

嵩山は好溪多く、華山は好峰多く、衡山は好別岫多く、常山は好列岫多く、泰山は特り好主峰。天台の武夷、廬霍の雁蕩、岷峨の巫峽、天壇の王屋、林廬の武當は、皆天下の名山巨鎮にして、天地寶藏の出づる所、仙聖の窟宅して隠るゝ所、奇屈神秀、其の要妙を窮むべきなし。其の造化を奪はんと欲するときは、即ち好むより神なるはなく、勤むるより精しきはなく、飽遊飫看より大なるはなし。歴々として胸中に羅列し、しかして目に絹素を見ず、手に筆墨を知らず、磊々落々杳々漠々として我が畫に非ざるはなし。此懷素が夜、嘉陵江水の聲を聞いて、而して草聖益佳に、張顛が公孫大娘の劍器を舞すを見て、而して筆勢益俊なる者なり。今、筆を執る者、養ふ所擴充せず、覽る所淳熟せず、經る所衆多ならず、取る所精粹ならざるに、しかも紙を得壁を拂ひ、水墨遽に下す。知らず何を以て景を烟霞の表に撥り、興を溪山の顛に發せんや。後生の妄語、其の病數ふべし。何をか養ふ所、擴充を欲すと謂ふ。近者畫手、仁者樂山圖に叟の願を峰畔に支ふるを作り、智者樂水圖に一叟の耳を巖前に側つるを作るあり。此擴充せざる病なり。蓋し仁者の山を樂しむは宜しく白樂天が草堂圖の如くなるべし。山居の意の裕足すればなり。智者の水を樂しむは宜しく王摩詰が輞川圖の如くなるべし。水中の樂み饒給すればなり。仁智の樂しむ所豈只一夫の形狀にて之をしめすべけんや。何をか覽る所淳熟を欲すと謂ふ。近世の畫工は山を畫け

ば即ち峰、三五峰に過ぎず。水を書けば則ち波、三五波に過ぎず。此淳熟せざる病なり。蓋し山を畫くには、高き者、下き者、大なる者、小なる者、崑崙向背、顛頂朝揖、其の體渾然として相應ずるときは、則ち山の美意足る。水を書くには、齊しき者、汨るゝ者、卷きて飛激する者、引きて舒長する者、其の狀宛然として自ら足るときは、則ち水の態富贍なり。何をか經る所の衆多ならずと謂ふ。近世の畫手は吳越に生るゝ者は、東南の聳瘦を寫し、咸秦に居る者は、關隴の壯浪を貌き、范寬を學ぶ者は、營丘の秀媚に乏しく、王維を師とする者は、關同の風骨を缺く。凡そ此の類は、咎、經る所の衆多ならざるにあり。何をか取る所の精粹ならずと謂ふ。千里の山盡く奇なる能はず、萬里の水豈に能く盡く秀でんや。太行は華夏に枕むも、しかも面目は林廬、泰山は齊魯を占むるも、しかも勝絶は龍巖。一概に之を畫かば版圖と何ぞ異らん。凡そ此の類は、咎、取る所の精粹ならざるに在るなり。故に坡陀に専らなれば、これを粗に失ひ、幽閒に専らなればこれを薄に失ひ、人物に専らなればこれを俗に失ひ、樓觀に専らなればこれを冗に失ひ、石に専らなれば則ち骨露れ、土に専らなれば則ち肉多し。筆迹の混成せざるこれを疎と謂ふ。疎なれば則ち眞意なし。墨色の滋潤せざるこれを枯と謂ふ。枯なれば則ち生意なし。水の潺湲ならざる、則ち之を死水と謂ひ、雲の自在ならざる、則ちこれを凍雲と謂ひ、山の明晦なき則ち之を日

影なしと謂ひ、山の隠見なき則ち之を烟靄なしと謂ふ。今、山、日の到る處は明にして、日の到らざる處は晦きこと、山、日影の常形に因ればなり。明晦分たす故に日影なしと曰ふ。今、山、烟靄の到る處は隠れ、烟靄の到らざる處は見るゝこと、山、烟靄の常態に因ればなり。隠見分たす、故に烟靄なしと曰ふ。

山は大物なり。其の形聳拔なるを欲し、偃蹇なるを欲し、軒豁なるを欲し、箕踞するを欲し、盤礴するを欲し、渾厚なるを欲し、雄豪なるを欲し、精神なるを欲し、嚴重なるを欲し、顧盼するを欲し、朝揖するを欲し、上に蓋ふものあるを欲し、下に乘るものあるを欲し、前に據るものあるを欲し、後に倚るものあるを欲し、下瞰して臨觀するがごときを欲し、下游して指麾するがごときを欲す。これ山の大体なり。

山は活物なり。其の形深靜なるを欲し、柔滑なるを欲し、汪洋なるを欲し、回環なるを欲し、肥膩なるを欲し、噴薄なるを欲し、激射なるを欲し、多泉なるを欲し、遠流なるを欲し、瀑布の天に挿むを欲し、濺撲して地に入るを欲し、漁釣の怡々たるを欲し、草木の欣々なるを欲し、烟雲を挾みて秀媚なるを欲し、溪谷を照して光輝あるを欲す。此水の活體なり。

山は水を以て血脈をなし、草木を以て毛髮となし、烟雲を以て神彩となす。故に山は水を得て

活き、草木を得て華やかに、烟雲を得て秀媚なり。水は山を以て面と爲し、亭榭を以て眉目と爲し、漁釣を以て精神と爲す。故に水は山を得て媚び、亭榭を得て明快に、漁釣を得て曠落なり。此山水の布置なり。

山に高きあり下きあり。高き者は血脈、下に在り。其の肩股開張し、基脚壯厚に、巒岫岡勢、培擁して相勾連し、映帶して絶えざるは、これ高山なり。故に是の如き高山はこれを孤ならずと謂ひ、これを仆れずと謂ふ。下き者は血脈上に在り。其の巔半ば落ち、頂領相攀ち、根基は龐大に、堆阜は臃腫に、直下深挿して、其の深淺を測るなきはこれ淺山なり。故に是の如き淺山はこれを薄からずと謂ひ、これを泄れずと謂ふ。高山にして孤なるときは體幹に仆るゝ理あり。淺山にして薄きときは、神氣に泄るゝ理あり。これ山水の體裁なり。

石は天地の骨なり。骨は堅深にして淺露ならざるを貴ぶ。水は天地の血なり。血は周流して凝滯せざるを貴ぶ。

山に烟雲なきは、春に花草なきが如し。

山に雲なければ則ち秀です、水なければ則ち媚びず、道路なければ則ち活きず、林木なければ則ち生きず、深淺なければ則ち淺く、平遠なければ則ち近く、高遠なければ則ち下し。

山に三遠あり。山下よりして山巔を仰ぐ、これを高遠と謂ひ、山前よりして山後を窺むる、これを深遠と謂ひ、近山よりして遠山を望む、これ平遠と謂ふ。高遠の色は清明に、深遠の色は重晦に、平遠の色は明あり晦あり、高遠の勢は突兀とし深遠の意は重疊に、平遠の意は沖融に、而して縹々縹々たり。其の人物の三遠に在るや、高遠には明瞭に、深遠には細碎に、平遠には沖澹なり。明瞭の者は短からず、細碎の者は長からず、沖澹の者は大ならず。これ三遠なり。

山に三大あり。山は木よりも大に、木は人よりも大なり。山は數十重にして木の大きさの如くならざれば則ち山大ならず。木は數十百にして人の大きさの如くならざれば則ち木大ならず。木のその人に比する所以のものは、先づ其の葉よりす。而して人のその木に比する所以のものは先づ其の頭よりす。木葉若干、以て人の頭に敵すべく、人の頭、若干葉よりして之を成すときは、則ち人の大小、木の大小、山の大小、これよりして皆程度に中る。これ三大なり。

山の高きを欲して盡く之れ出せば則ち高からず。烟霞其の腰を鎖せば則ち高し。水の遠きを欲して盡く之を出せば則ち遠からず。掩映して其の派を断てば則ち遠し。蓋し山盡く出づれば、唯秀拔の高き無きのみならず、兼て何ぞ確嘴を畫くに異らん。水盡く出でば唯盤折の遠き無きのみならず兼て何ぞ蚯蚓を畫くに異らん。

正面の溪山林木は、盤折委曲して其の景を鋪設すれども、而も來ること其の詳なるを厭はず。人目の近尋に足る所以なり。傍邊の平遠、嶠嶺の重疊、鈎連縹緲たれども、しかも去ること其の速きを厭はず。人目の曠望を極むる所以なり。遠山に皴なく、遠水に波なく、遠人に目なし。なきに非ざるなり、なきが如きなり。

畫 意

世人たゞ吾が筆を落して畫を作るを知るも、却つて畫の易事に非ざるを知らず。莊子に、畫史、衣を解きて盤礴すと説きしがこれ眞に畫家の法を得たり。人須らく養ひ得て胸中寛快、意思悅適なるべし。所謂る易直子諒、油然の心生するが如くならば、則ち人の笑啼情狀、物の尖斜偃側、自然に心に布列し、覺えずこれを筆下に見さん。晉人顧駿之は必ず層樓を構へて以て畫所と爲す。これ眞に古の達士、然らざれば則ち志意已に抑鬱沈滞して一曲に局在せん。如何ぞ物情を寫貌し人思を擅發するを得んや。たとへば工人の琴を斷りて暉陽の孤桐を得るが如し。巧手妙意、中に洞然たるときは則ち樸材、地に在り。枝葉未だ披かざるも、しかも雷氏の琴を成すや曉然として已に目に在り。其の意煩しく體悖り、拙魯悶嘿の人は、鉞鑿、利刀を見て、手を下すところを知

らす。いづくんぞ焦尾の五聲、音を清風流水に揚ぐるを得んや。更に前人の詩は無形の畫、畫は是有形の詩と言ふが如し。哲人の多談なる、此の言は、吾人の師とするところ。余因て暇日、晉唐古今の詩什を閱するに、其の中の佳句、人の腹中の事を道盡するあり。目前の景を裝出するあり。然れども靜居燕坐、明窓淨几、一炷の爐香、萬慮消沈するに因らんすんば、則ち佳句好意も、亦看出さず、幽情美趣も、亦想ひ成さず。即ち畫の主意、亦豈に及び易からんや。境界已に熟し、心中已に應じ、まさに始めて縱横、度に中り、左右、原に逢ふ。世人まさに意にまかせ情に觸れ、草々にしてすなはち得んとす。思因て先子が嘗て誦道する所の古人の清篇秀句の佳思に發するありて、しかして畫くべき者を記し、並せて思が亦嘗て旁搜廣引して、先子の用ふべしとせし者も、みな之れを下に録す。

女几山頭春雪消。路傍仙杏發柔條。心期欲去知何日。惆望回車下野橋。(羊士諤の望几山)

獨訪山家歇還涉。茅屋斜連隔松葉。主人聞語未開門。繞籬野菜飛黃蝶。(長孫左輔の尋山家)

南遊兄弟幾時還。知在三湘五嶺間。獨立衡門秋水闊。寒鴉飛去日沈山。(竇鞏)

釣罷孤舟繫葦梢。酒開新甕餅開包。自從江浙爲漁父。二十餘年手不收。(無名氏)

舍南舍北皆春水。但見群鷗日日來。(老杜)

渡水蹇驢雙耳直。避風羸僕一肩高。(盧雪詩)

行到水窮處。坐看雲起時。(王摩詰)

六月杖藜來石路。午陰多處聽潺湲。(王介甫)

數聲離岸檣。幾點別州山。(魏野)

遠水兼天淨。孤城隱霧深。(老杜)

犬眠花影地。牛牧雨聲陂。(李後村)

密竹滴殘雨。高峰留夕陽。(夏侯叔簡)

天遙來雁小。江闊去帆孤。(姚合)

雪意未成雲著地。秋聲不絕雁連天。(錢惟演)

春潮帶雨晚來急。野渡無人舟自橫。(韋應物)

相看臨遠水。獨自坐孤舟。(鄭谷)

畫訣

凡そ經營して筆を下すには必ず天地に合す。何をか天地と謂ふ。一尺半幅の上、上に天の位を留め、下に地の位を留め、中間まさに意を立て景を定むるが如きを謂ふ。初學を見るに、遽かに筆を把りて下し去り、卒爾として意を立て、情に觸れて塗抹すること滿幅なれば、これを看て人目に填塞す。已に人意をして快よからざらしむ。なんぞ賞を瀟灑に取り、情を高大に見すを得んや。

山水は先づ大山に理會す、名けて主峰と爲す。主峰已に定まればまさに作るに次を以てし、近き者、遠き者、小なる者、大なる者、其の一境これを此に主とするを以て、故に主峰と曰ふ。君臣、上下の如きなり。

林石は先づ一大松を理會す。名けて宗老と爲す。宗老已に定まればまさに作るに次を以てし、雜窠、小卉、女蘿、碎石、其の一山これを此に表するを以て、故に宗老と曰ふ。君子、小人の如きなり。

山に土を戴くあり、山に石を戴くあり、土山、石を戴けば林木瘦聳し、石山、土を戴けば林木

肥茂す。木の山に在るあり、木の水に在るあり。山に在る者は土厚き處千尺の松あり。水に在る者は土薄き處數尺の蘗あり。水に流水あり、石に盤石あり。水に瀑布あり、石に怪石あり。瀑布練は林表に飛び、怪石虎は路隅に蹲まる。

雨に雨らんと欲するあり、雪に雪らんと欲するあり。雨に大雨あり、雪に大雪あり。雨に雨霽あり、雪に雪霽あり。風に急風あり、雲に歸雲あり。風に大風あり。雲に輕雲あり。大風に沙を吹き石を走らす勢あり、輕雲に薄羅、素を引く容あり。

店舎は溪に依りて水衝に依らず、溪に依るは水に近きを以てす。水衝に依らざるは害を爲すを以てす。或は水衝に依る者あるも、水これを衝くと雖も必ず水害なき處なり。村落は陸に依りて山に依らず、陸に依るは耕すに便なるを以てし、山に依らざるは耕すを爲すに遠きを以てす。或は山に依る者あるも、山の間必ず耕すべき處あればなり。

大松、大石は、必ず大岸、大坡の上に畫き、淺灘、平渚の邊に作るべからず。一種、筆を使ひ、反つて筆の爲に用ひらるべからず。一種、墨を用ひ、反つて墨の爲に用ひらるべからず、筆と墨とは人の淺近の事。二物すら且つ操縦する所以を知らず、又いづくんぞ絶妙を成すを得んや。此また難きに非ず。近くこれを書法に取るにまさるに此と類するなり。故に説者

曰ふ、王右軍（王羲之）の鸞を喜ぶは、意、其の項を轉すること人の筆を執り腕を轉じて以て字を結ぶが如きを取るに在りと。これ正に畫の用筆を論ずると同じ。故に世の人多く謂ふ、書を善くする者は往々にして畫を善くすと。蓋し其の轉腕用筆の滯らざるに由るなり。或人曰く墨の用如何と。答へて曰く焦墨を用ひ、宿墨を用ひ、退墨を用ひ、埃墨を用ひ、一にして足らず、一にして得ずと。

硯は石を用ひ、瓦を用ひ、盆を用ひ、甕片を用ふ。墨は精墨を用ふるのみにして、必ずしも東川と西山とを用ひず。筆は尖き者、圓き者、麤き者、細き者、針の如き者、刷の如き者を用ひて運らす。墨は時ありて淡墨を用ひ、時ありて濃墨を用ひ、時ありて焦墨を用ひ、時ありて宿墨を用ひ、時ありて退墨を用ひ、時ありて厨中の埃墨を用ひ、時ありて青黛を取り、墨水を雜へて之を用ふ。淡墨六七を用ひ、加へて深きを成すときは即ち墨色滋潤して枯燥ならず。濃墨、焦墨を用ふるには特なるを欲す。然れども其の限界を取るには濃と焦とに非ざれば、則ち松稜、石角の瞭然たらざる故のみ。瞭然として然して後、青墨水を用ひ、重疊してこれを過するときは即ち墨色分明にして、常に霧露中より出づるが如し。淡墨重疊し、旋々してこれを取る、これを幹淡と謂ふ。銳筆を以て横臥し惹々してこれを取る、これを皴擦と謂ふ。水墨を以て再三して之を淋ぐ、

これを澹と謂ふ。水墨を以て淡同してこれを澤する、これを刷と謂ふ。筆頭を以て直往してこれを指す、これを粹と謂ふ。筆頭を以て特下してこれを指す、これを擢と謂ふ。筆端を以てしてこれを注ぐ、これを點と謂ふ。點は人物に施し、こた木葉に施す。筆を以て引きてこれを去る、これを畫と謂ふ。畫は樓屋に施し、亦松針に施す。雪色は濃淡墨を用ひて濃淡を作る。たゞ墨の色一にして染就せず。烟色は縑素の本色に就き、縑拂するに淡水を以てしてこれに痕し、筆墨の迹を見はすべからず。風色は黄土或は埃墨を用ひてこれを得、土色は淡墨、埃墨を用ひてこれを得、石色は青黛を用ひて墨に和し、しかして淺深してこれを取る。瀑布は縑素の本色を用ふ。たゞ焦墨にて其の旁を作りて以てこれを得る。

水色は春緑に夏碧に秋青く冬黒し。天色は春晃やき夏蒼く秋淨く冬黯らし。畫の處所は須らく冬煖たかに夏涼しく宏堂邃宇なるべく、畫の志思は須らく百慮干さず、神盤しみ意豁なるべし。老杜が詩に所謂る五日畫一水。十日畫一石。能事不受相促逼。王宰始肯留眞跡。といふもの、斯の言これを得たり。一種の畫、春夏秋冬、各始終あり。曉暮の類、品意物色、すなはちまさきに分解すべし。況んや其の間各趣あるをや。その他、四時に省拘せず。しかして經史諸子中の故事、また各須らく時に臨みて宜しき所の者を可と爲すべし。春に早春雲景、早春雨景、殘雪、

早春雪霽、早春雨霽、早春烟雨、早春寒雲欲雨、春早春晚景、曉日春山、春雲欲雨、早春烟靄、春雲出谷、滿溪春溜、春雨春風作斜風細雨、春山明麗、春雲如白鶴の如きを謂ふ。皆春の題なり。

夏に夏山晴霽、夏山雨霽、夏山風雨、夏山早行、夏山林館、夏雨山行、夏山林木、怪石、夏山松石、平遠、夏山雨過、濃雲欲雨、驟風急雨。又曰ふ、飄雨急雨、夏山雨罷、雲歸、夏雨溪谷澗瀑、夏山烟曉、夏山烟晚、夏田山居、夏雲多奇峰あり。皆夏の題なり。

秋に初秋雨過、平遠秋霽、亦曰ふ、秋山雨霽、秋風雨霽、秋雲下隴、秋烟出谷、秋風欲雨。又曰ふ、西風欲雨、秋風細雨。亦曰ふ、西風驟雨、秋晚烟嵐、秋山晚意、秋山晚照、秋晚平遠、遠水澄清、疎林秋晚、秋景林石、秋景松石、平遠秋景あり。皆秋の題なり。

冬に寒雲欲雪、冬陰密雪、朔風霰雪、山澗小雪、四溪遠雪、雪後山家、雪中漁舍、巖舟沽酒、踏雪遠沽、雪溪平遠。又曰ふ、風雪平遠、絕澗松雪、松軒醉雪、水榭吟風あり。皆冬の題なり。

曉に春曉、秋曉、雨曉、雪曉、烟嵐曉色、秋烟曉色、春靄曉色あり。皆曉の題なり。

晩に春山晚照、雨過晚照、雪殘晚照、疎林晚照、平川返照、遠水晚照、暮山烟靄、僧歸溪寺、

客到三晚扉あり。皆晩の題なり。

松に雙松、三松、五松、六松、怪木、古木、老木、垂岸怪木、垂崖古木、喬松あり。一望松に至りては、皆祝壽にして、青松、長松を用ふ。

思（郭思）嘗て先子（郭熙）が遠山一望松を作るを見るに、一望不斷の意を帯び、一幅の上に於て之を爲し、一老人、手を以て面前の大松を撫し、極めて引望する意を作る。其の老人は、壽星の獻する所の人たる若しと云ふ。

石に怪石、坡石あり。松石は雲松を兼ねる者たり。林石は之に林木を兼ねたり。秋江怪石は、怪石の秋江に在るなり。江上の蓼花、菴葭の致、以て遠近に映帶して一二を作るべきなり。

雲に雲横ニ谷口、雲出ニ岩間、白雲出岫、輕雲下嶺あり。烟に烟横ニ谷口、烟出ニ亂山、暮靄平林、輕烟引素、春山烟嵐、秋山烟靄あり。

水に四溪濺撲、松石濺撲、雲嶺飛泉、雨中瀑布、雪中瀑布、烟溪瀑布、遠水鳴榔、雲溪釣艇あり。

雜に水村漁舍、憑高觀海、平沙落雁、溪橋酒家、橋梁樵子あり。皆雜題なり。

畫

繼

鄧

椿（宋）

遠を論ず

畫は文の極なり。故に古今の人頗る多く意を著く。張彦遠が次せし所の歴代の畫人、冠裳大半にして唐は則ち少陵（杜子美）が題詠は形容を曲盡し、昌黎（韓退之）が作記は毫髮を遺さず。本朝にては文忠歐公、三蘇父子、兩晁兄弟、山谷、後村、宛邱、淮海、月巖より、以て漫仕、龍眠に至るまで、或ひは評品精高に、或ひは揮染超拔なり。然らば畫は豈に獨り藝のいひのみならんや。難者以爲へらく「古より文人は何ぞたゞ數公のみならんや。能くせず且つ好まざるものあり」と。將にこれに應へていはんとす。「其の人となりや文多ければ畫を曉らざるものありと雖も寡なし。其の人となりや文無ければ、畫を曉るものありと雖も寡なし」と。

畫の用たる大なり。天地の間に盈つる者は萬物悉く皆毫を含み思を運らし其の態を曲盡す。而

して能く曲畫する所以の者はたゞ一法のみ。一とは何ぞや。曰く傳神のみ。世徒に人の神あるを
知りて物の神あるを知らず。これ若虛が深く衆工を鄙しみて畫と曰ふと雖も、しかも畫に非すと
謂ふものにして、蓋したゞ能く其の形を傳へて其の神を傳ふる能はざればなり。故に畫法は氣韻
生動を以て第一と爲す。而して若虛獨り軒冕、巖穴に歸する、ゆゑある哉。

昔より鑒賞家、品を分つに三あり、曰く神、曰く妙、曰く能と。獨り唐の朱景眞は唐賢畫錄を
撰し、三品の外更に逸品を増したり。其の後、黃休復は益州名畫記を作り、乃ち逸を以て先と爲
し、而して神、妙、能はこれに次ぐ。景眞は逸格は常法に拘はらず、用て賢愚を表すと云ふと雖
も、然れども逸の高きこと、豈に三品の末に附するを得ん。未だ休復が首推の當れりと爲すに若
かざるなり。徽宗皇帝の専ら法度を尙ぶに至りて、乃ち神、逸、妙、能を以て次と爲す。

予曾て唐宋兩朝名臣の文集を取り、凡そ圖畫の紀詠は考究して遺すなし。故に群公に於て略能
く其の鑒別を察するに、獨り山谷（黃魯直）最も精嚴と爲す。元章（米芾）心眼高妙なるも、し
かも立論、中を過ぐる處あり。少陵（杜甫）東坡（蘇軾）の兩翁意を注ぐこと専らならざるも、
しかも天機本高ければ一語の確、合するを期せずして自ら合する者あり。杜云ふ、「妙絶動宮牆」
と。則ち壁傳の人物は須らく動の字にして始めて能く了すべし。「請公放筆爲直幹」と。則ち

千丈の姿、用筆の際に於て放の字に非ずんば、亦辨する能はず。東坡に至りては又其の理を曲畫
す、「始知眞放木細微、不比狂華生客慧」。「當其下筆風雨快、筆所未到氣已吞」と。前身、
顧、陸に非ずんば、いづくんぞ能く此等の語をいはんや。

予、此の錄を作りて獨り高雅の二門を推し、餘は則ちはなはだ褒貶を立てず。蓋し見る者まさ
に語を下すべく、聞く者豈に輕議すべけんや。嘗て郭若虛が成都應天（應天寺）の孫位、景朴が
天王を論ずるを考ふるに、曰く、二藝、鋒を争ひ、一時の壯觀にして、傾城の士庶、これを看て
闐噦すと。予嘗て圖を按じて熟觀するに、則ち知る朴が變怪を務めて以て位に倣ふこと、正に杜
默が詩の廬同、馬異を學ぶが如きを。若虛未だ嘗て蜀に入らず、徒に聞く所に因りて妄意に比方
す。豈に歐陽燭の誤を爲すか。然れども恕すべき者あり。尙辛顯が論を註して謂ふ、朴の位に及
ばざる遠きこと甚だしと。蓋し亦傳を以て疑を爲すなり。此予が少しく褒貶を立つる所以なり。
郭若虛が載する所、往々遺略す。江南の王凝の花鳥、潤州の僧修範の湖石、道士劉貞白の松石梅
雀、蜀の童祥、許中正の人物仙佛、邱仁慶の花、王延嗣の鬼神は皆名筆なり。俱に熙寧以前の人
物なり。

山水家の雪景を畫く多く俗なり。嘗て營邱が作る所の雪圖を見るに、峰巒林屋、皆淡墨を以て

これを爲す。而して水天の空處全く粉を以て填むる、亦一奇なり。予毎に以て畫人に告ぐるに、愕然として驚かずんば、則ち莞爾として笑へり。以て後學者の凡下を見るに足る。

李營邱は多才足學の士なり。少くして大志あり、屢擧げられて第せず、竟に成す所なし。故に意を畫に放ましまにす。其の作る所の寒林は多く巖穴中に在り、裁割さいかく俱ともに露る。以て君子の野に在るを興するなり。自餘の窠植くわしよくは盡く平地に生ず。亦以て小人の位に在るを興す。其の意微かたがなり。宇文（龍圖）季蒙云ふ、宣和御府の曝書、屢嘗て預り、李成が大小山水無數の軸を觀たり。今、臣庶の家各自に其の藏する所を謂ひて李成と爲すも吾信ぜずと。

畫の六法は兼ねて全くし難きが、獨り唐の吳道子と本朝の李伯時とは始めて能く之を全くす。然れども吳筆は豪放にして長壁大軸を限らず、奇を出すこと窮りなきも、伯時は痛く自ら裁損し、只澄心紙上に於て、奇を運らし巧を布き未だ其の大手筆を見ず。能はざるには非ざるなり。蓋し實は之を矯め、其の或ひは衆工の事に近づかんことを恐るゝなり。

米元章云ふ、伯時、臂を病むこと三年。予始めて畫くと。伯時を推避するに似たりと雖も、然れども自ら謂ふ、顧高古を學び、一筆をして吳生に入らしめずと。専ら古忠賢の像を爲る。其の木強の氣亦伯時が下に立つべからず。

鳥獸草木の狀を賦くるや、其の五方に在りて、自ら各同じからず。而して畫を觀る者、獨り其の方の見る所を以て、形似の同じからざることを論難し、以爲らく、或は小、或は大、或は長、或は短、或は豐、或は瘠と。互に相譏笑し以て口實と爲せども、善く觀る者に非ざるなり。蜀は僻遠と雖も而も畫手獨り四方より多し。李方叔、德隅齋の畫を載せて、而して蜀筆は半に居れり。德麟は貴公子なり畫を蓄へて數十函に至りしが、皆京師に留め、載する所、止襄陽、隨軒の絶品のみ。多きこと已に此の如し。蜀學其盛なる哉。

畫の逸格は孫位に至りて極まる。後人往々益狂肆を爲す。石恪、孫太古は猶之可なるも、然れども未だ龕鄙かんにを免れず。貫休、雲子の輩に至りては、則ちまた忌彈する所なき者なり。意高からんと欲しては而も未だ嘗て卑からずんばあらずとは、實に斯の人の徒か。

蜀の羅漢は多しと雖も最も廬楞伽らうりょうかを稱し、其の次は杜措、邱文播兄弟のみ。楞伽が作る所、多く定本にして、たゞ坐立兩様のみ。侍衛供獻花石松竹羽毛の屬に至りては悉く皆之無く、觀るに足らず。杜、邱各此ありと雖も、而も筆意甚だ清高ならず。俱に長沙の武に愧づるなり。

舊説に楊惠之と吳道子と師を同じくせしが、道子の學成りしかば、惠之、與に名を齊しくせんことを恥ち轉じて塑を爲し、皆天下第一と爲れり。故に中原には惠之が塑せし山水の壁多しと。

郭熙之を見て又新意を出し、遂に朽者をして泥掌を用ひず、たゞ手槍を以て壁に泥せしめ、或は凹、或は凸、俱に問はざる所、乾けば則ち墨を以て其の形跡に隨ひ、峰巒林壑を暈成し、これに樓閣人物の屬を加へ、宛然天成にして、之を影壁と謂ふ。其の後作者甚だ盛なり。これ宋復古、張素が敗壁の餘意なり。

大抵古畫を收藏する、往々にして對せず、或は斷縑片紙、皆珍惜すべし。而して高人達士の對を恥づる者、十中に八九。而して俗眼遂に不成器を以て之を目するも、夫豈に知らんや古畫の今に至る、多きは五百年に至り、少きは二三百年に至ることを。なんぞ復完物あるを得んや。斷金碎玉、俱に寶とすべきなり。

榮輯子邕、酷だ圖畫を好み、務めて藏蓄を廣くし三伏中毎に之を曝し、各其の類を以て次に循ひて開展し、其の家に徧滿す、一種毎に日日更換し、旬日にして始めて了る。好事家に其の比鮮なし。之に故老に聞く曰く、承平の時一の不肖子ありて畫一匣を人家に質す、凡そ十餘圖。圖毎にたゞ各其の半ありて、或は横に或は豎に當中分剪す。王維の山水、戴特、徐熙の芙蓉、桃花、翟白の翎毛の如き、一も全き者なし。蓋し其の家の兄弟、不義の甚だしき、凡そ物皆是の如くにして之を分ち、以爲へらく、是の如くならずんば、則ち平ならずと。誠に傷歎すべし。

近を論ず

徽宗、龍德宮を建て、成りしかば待詔に命じて圖畫せしめ、宮中の屏壁、一時の選を極みしが上、來幸して一も稱する所なく、獨り壺中殿前柱廊拱眼の斜枝月季花を顧みて、畫く者は誰と爲すと問ひしに實に少年の新進士なり。上喜びて緋を賜ひ褒錫甚だ寵す。皆其の故を測ること莫し。近侍嘗て上に請ふ。上曰く、月季能く畫く者ある鮮し。蓋し四時朝暮、花、蕊、葉、皆同じからず。此の作は春時日中の者毫髮の差なし。故に厚く之を賞すと。

宣和殿前に荔枝を植ゑ既に實を結びしかば喜び天顔に動けり。偶孔雀其の下に在りしかば、亟かに畫院の衆史を召して之を圖かしめしに各其の思を極め華彩爛然たり。たゞ孔雀藤墩に昇らんと欲し、先づ右脚を擧げたり。上曰く未だなりと。衆史愕然として測るなし。後數日、再び呼びて之を問ふに對ふる所を知らず。則ち旨を降して曰く、孔雀の高きに升るには必ず先づ左を擧ぐと。衆史駭き服す。

宣和殿の御閣に展子虔の四載圖ありて最も高品と爲す。上毎に愛玩し或は終日捨てず。たゞ恨むたゞ三圖あるのみにして其の水行の一圖は特に補遺のみ。一日、中使、洛に至り、忽ち洛中の

故家に之有り聞き、亟かに留守に告げて觀んことを求む。既に見て則ち愕きて曰く、御閣中、正に此の一圖を欠くと。登時進入す。所謂天生神聖の物必ず會合の時あるなり。

之を薛志せつしに聞く、曰く明達皇后の閣初めて成るや、左廊に劉益が畫く所の百猿あり。後、志、右に於て百鶴を畫きて之に對し舉動各相犯すなく、頗る上の旨に稱ひ、賞資十倍なりきと。

政和の間、御畫扇毎に、則ち六宮諸邸、競ひて皆臨倣し、一樣或は數百本に至る。其の間、貴近往々御寶を求むる者あり。

先大夫、樞府に在りし日、旨ありて第を龍津橋側に賜はる。先君侍郎、提舉官たり。仍て中使を遣はして比背を監修せとむ。畫壁は皆院人の作る所の翎毛花竹及び家慶圖の類なり。一日、先君就きてこれを視、背工の舊絹山水を以て几案を楷拭するを見る、取りて觀れば迺ち郭熙が筆なり。其の自る所を問へば則ち云ふ、知らずと。又中使に問ふに、乃ち云ふ、これ内藏庫の退材所より出づ。昔、神宗、熙の筆を好み、一殿専ら熙の作を背せしが、上の即位の後、代ふるに古圖を以てし、退けて庫中に入れし者たゞ此のみならずと。先君云ふ、幸に奏知せよ。若し只此の退畫を得ば足れりと。明日、旨ありて盡く賜ひ、且つ命じて鑿して第中だいちちゆうに至らしめしに、故第中の屋壁、郭が畫に非ざるはなかりき誠に千歳の會なり。

政和の間、外宅の宗室あり、名を記せざるが、多く珍圖を蓄ふ。往々にして王公貴人、其をして別識せしむ。是に於て遂に常賣と交通し、凡そ奇蹟あれば必ず詭計を用ひて其の家に勾致し、即時臨摸して、其の眞なる者に易ふるに其の主能く別つ莫きなり。復眞本を以て價を厚くして之に易へ循環すること三四なる者あるに至る。故に當時號して便宜べんぎん三と曰へり。

勾處士は其の名を記せず。宣和の間に在りて、鑒賞第一なりしかば、眷寵甚だ厚く、凡そ四方より進むる所は必ず品を定めしめ、命ずるに官を以てせんと欲せしが謝して爲さざりしかば、ただ處士の號を賜ひて畫院に待詔せしむ。

畫院は界作最も工みに、専ら新意を以て相尙ぶ。嘗て一軸の甚だ愛玩すべき見る。一殿廊を畫き金碧焜耀くわつえう、朱門半開き、一宮女半身を戶外に露し、箕を以て果皮を貯へ、棄擲の狀を作す。鴨脚、荔枝、胡桃、榲栗せりつ、榛茨しんけんの屬の如き、一一辨すべくして、各相因らず。筆墨精微、此の如き者あり。祖宗の舊制に、凡そ待詔の出身者たゞ六種あり、模勒、書丹、裝背、界作、種飛白筆、描畫欄界是なり。徽宗、畫を好むこと此の如しと雖も、然れども好玩を以て輒たやすく名器を假すを欲せず、故に畫院の官を得る者たゞ舊制に依倣し、六種の名を以て之を命ず。以て聖意の在る所を見るに足る。本朝の舊制、凡そ藝を以て進む者は緋紫を服すと雖も、魚を佩ぶるを得ざりしが、

政宣の間、獨り書畫院出職人の魚を佩ふるを許したりしは此異數なりき。又諸の待詔の班に立つ毎に則ち畫院を首と爲し、書院之に次ぎ、琴、院、棋、玉、百工の如き、皆下に在り。又畫院は諸生の習學を聽し、凡そ籍に係くる者過犯ある毎にたゞ罰直を許し、其の罪重き者また奏裁を聽す。又他局工匠の日支錢これを食錢と謂へども、惟兩局は則ち之を俸直と謂ひ、勸勞支給、衆工を以て待たず。睿思殿、日に待詔一人、雜畫を能くする者に命じて宿直せしめ、以て不測の宣喚に備ふ。他局は皆之なし。

圖畫院、四方召試の者源々として來るも多く合はずして去る者あり。蓋し一時の尙ぶ所、専ら形似を以てす。苟しくも自得あれど放逸を免れず。則ち法度に合せず、或は師承なしと謂ふ。故に作る所たゞ衆工の事にして、高きこと能はざるなり。

凡そ畫院の人を取るや専ら筆法を以てせずして往々人物を以て先と爲す。蓋し召對時ならずして顧問を被るを恐るればなり。故に劉益、病贅異常を以て御畫を供すと雖も、而も未だ嘗て見ゆるを得ざりしかば身を終るまで恨と爲せり。

高麗の松扇、節板の形の如し。其の工人云ふ、松に非ざるなり。乃ち水柳木の皮なりと。故に乘賦にして愛すべし。其の紋酷だ松栢に似たり、故に之を松扇と謂ふ。東坡謂ふ、高麗の白松理

直くして疎折す、以て扇と爲す。蜀中にて機欄心を織るが如し、蓋し水柳なりと。又紙を用ひ、琴光竹を以て柄と爲すあり。市井中に製する所の摺疊扇といふものゝ如し。但精緻なること中國の及ぶべきに非ず。之を展ぶれば廣さ尺三四、之を合すれば唯兩指ばかり。畫く所、多く士女の車に乗り馬に跨り青を踏み翠を拾ふ状を作る。又金銀屑を以て地面を飾り、及び星漢、星月、人物を作り、ほど形似あり。其の來ること遠くして摩擦するを以ての故なり。其の染むる所の青緑は、奇なること甚だしく、中國と同じからず。専ら空清、海綠を以て之を爲す。近年作る作尤も精巧と爲す。亦絹素を以て團扇と爲すあり。たゞ柄の長さは數尺を異りと爲す。山谷之に題して云ふ會稽内史三韓扇、分送黃門畫省中、海外人烟來眼界、全勝博物注魚蟲、蘋汀遊女能騎馬、傳道蛾眉畫不如、寶扇眞成集陳準、史臣今得殺青書と。

倭扇は松枝を以てし、兩指許、砌疊することまた摺疊扇なる者の如し。其の柄は銅鑿錢環子を以てし黃絲條甚だ精妙なり。板上に山川人物、松竹花草を畫き、亦喜ぶべし。竹山尉王公軒は、惠恭后の家なるが嘗て明州の舶官と作りて兩柄を得たりき。

西天中印度那蘭陀寺僧、多く佛及び菩薩、羅漢の像を畫き、西天布を以て之をつくる。其の佛の相好は中國人と異り、眼目稍大に口耳俱に怪に、帶を以て右肩に掛け、裸袒坐立するのみ。先

づ五藏を畫背に施し、乃ち五彩を畫面に塗り、金或は朱紅を以て地と作す。牛皮膠を謂ひて觸と爲す。故に桃膠を用ひて柳枝水に合せ甚だ堅漬なり。中國は其の訣を得ず。邵太史、黎州に知りしとき、嘗て僧ありて西天より來りしかば、公廩に就きて釋迦を畫かしめたりき。今、茶馬司に十六羅漢あり。

寫山水訣

黃子久(元)

近代、畫を作るもの多く董源、李成二家の筆法を宗とす。樹石各相似ず、學者當に心を盡すべし。

樹は四面俱に幹と枝とあるを要す。蓋し其の圓潤を取る。

樹は身分あるを要す。畫家これを紐子と謂ふ。折搭して中を得るを要す。樹身は各發生あるを要す。

樹は偃仰稀密相間はるを要す。葉あれば樹枝軟らかに面後皆仰枝あり。

石を畫く法先づ淡墨より起す。改むべく救ふべし。漸く濃墨を用ふる者を上と爲す。

石に十歩の眞なく、石は三面を看る。方圓を用ふる法は須らく方多く圓少かるべし。

董源は坡脚下に多く碎石あり、乃ち建康の山勢を畫くなり。董の石、之を麻皮皴と謂ふ。坡脚、先づ筆畫の邊に向ひて皴起し、然して後に淡墨を用ひて、其の深凹の處を破す。著色も此を離れ

す。石の著色は重きを要す。

董源の小山石は、これを攀頭と謂ふ。山中に雲氣あるこれ皆金陵の山景なり。皴法は滲軟を要す。下に沙地あるは淡墨を用ひて掃ひ、屈曲して之を爲り、再び淡墨を用ひて破す。

山には三遠を論ず。下より相連りて断えざるこれを平遠と謂ひ、近くより隔開して相對ふこれを潤遠と謂ひ、山外より遠景するこれを高遠と謂ふ。

山水の中に筆法を用ふるこれを筋骨相連ると謂ひ、筆有り墨ある分なり。描を用ふる處、其の糊突するこれを墨有りと謂ひ、水筆の描法に動かざるこれを筆有りと謂ふ。これ畫家緊要なる處。山石樹木、皆此を用ふ。

大概、樹は填空ならんを要す。小樹、大樹、一偃一仰、向背濃淡、各少しも相犯すべからず。繁き處、疎なる處、須らく中を得るを要すべし。若し畫き得て純熟せば自然に筆法出現す。

石を畫く妙、藤黃を用ひ、水に浸して墨に入れば筆自然に潤色すべし。多きを用ふべからず。多ければ則ち筆を帶らす。間、螺青を用ひて墨に入るも亦妙なり。吳裝は容易に眼に入り、墨をして士氣せしむ。

皮袋中、描筆を置きて内に在き、或は好景の處に於て樹の怪異あるを見るときは便はち當さに

摸寫してこれを記すべし。分外に發生の意あらん。樓に登りて空濶なる處の氣韻を望み、雲采を見るは、即ち是れ山頭の景物、李成、郭熙は皆此の法を用ふ。郭熙は石を畫くこと雲の如し。古人云ふ、天の圖畫を開くとは是なり。

山水のうち、唯水口最も畫き難し。

遠水に灣なく、遠人に目なし。

水は高原に出で上よりして下り、切斷すべからず。派は活流の源を取るを要す。

山頭は折搭轉換するを要し、山脈は皆順ふ、これ活法なり。衆峰相揖遜し、萬樹相從ふ如く、大將、卒を領して森然犯すべからざる色あるが如し。これ眞山の形を寫すなり。

山坡中にて屋舎を置くべし。水中は小艇を置くべし。此よりして生氣あり。山腰に雲氣を用ひば山勢高くして測るべからざるを見得ん。

石を畫く法は最も形象を要す。石に三面あるを要せず。或は上にあり或は左にあり、側も皆面と爲すべし。筆に臨む際、殆ど取用を要す。

山下に水潭あるこれを瀨と謂ふ。此を畫けば甚だ生意あり。四邊は樹を用ひてこれを簇す。

一窠、一石を畫くには、當さに逸墨撇脚すること士人の家風あるべし。纔に多きときは、便ち

畫工の流に入らん。

或は山水一幅を畫かんとせば先づ題目を立て然して後に筆を著くべし。若し題目なきときは便はち畫を成さず。更に春夏秋冬の景色を記するを要す。春は則ち萬物發生し、夏は則ち樹木繁冗し、秋は則ち萬象肅殺し、冬は則ち烟雲黯淡天色模糊たり。能く此を畫く者上と爲す。

李成が坡脚を畫く、須らく數層にして其の濃厚を取るを要すべし。米元章が李光丞の後代に、兒孫の昌盛ならんを論じたりしが、果して出で、官と爲る者最も多かりき。畫も亦風水ありて存す。

松樹の根を見はさざるは君子の野に在るに喩へ、雜樹は小人崢嶸の意に喩ふ。

夏山雨ふらんと欲する、水筆を帶ぶを要す。山上に石ありて小塊堆の上に在る、之を礬頭と謂ふ。水筆を用ひて暈開し、淡螺青を加ふれば、又これ一般の秀潤。畫は意思に過ぎざるのみ。

冬景は地を借りて雪と爲す。薄粉にて山頭を暈するを要す。

山水の法は機に隨ひ變に應ずるに在り。先づ皴法を記し、布置を雜へず、遠近相映す。大概字を寫すと一般にして熟を以て妙と爲す。紙上は畫き難く、絹上は礬了せば筆を著くるに好く、顔色を用ふるに好くして眼に入り易し。先づ題目を命ずるこれこれを上品と爲す。古人の畫を作

る、胸次寬濶にして景を布くこと自然なり。古人の意趣に合するときは畫法盡きん。

好絹は水を用ひて噴濕し、石上に眼を糙して區まらかならしめ然して後に幀子かに上く。礬法は春

秋は膠礬停し、夏月は膠多く礬少なく、冬天は礬多く膠少し。

着色は、螺青にて石上を拂ひ、藤黄を墨に入れて樹を畫けば、其色潤ひて好看なり。畫を作るには祇ここれ箇の理事のみ最も緊要なり、吳融が詩に云ふ、「良工善く丹青の理を得」と。

畫を作るには墨を用ふるに最も難し、但先づ淡墨を用ひ、積みて觀るべき處に至り然して後に焦墨、濃墨を用ひて、畦徑遠近を分出す、故に生紙上にありて、許多の溼潤の處あり。李成が墨を惜むこと金の如しとは是なり。

畫を作る大要、邪、甜、俗、癩の四個の字を去る。

畫 鑒

湯 屋 (元)

采眞子は古を考ふるに妙なり。京師に在りし時、鑑書博士柯君敬仲と畫を論じ、遂に此の書を著す。用意精到悉く據依あるも惜むらくは尙疏略多きことを。乃ち刪補を爲し、編次して帙を成し、名づけて畫鑒と曰ふ。後に高識あらば其の知音を賞せよ。采眞子とは東楚の湯垢君トウコウ載の自號なり。

吳 畫

曹弗興は、古へ善畫と稱す。人物を作るに、衣紋皴皴す。畫家謂ふ曹衣は水より出で、吳帶は風に當ると。宣和の内府、刻意して摹訪しうぼうせしが兵符圖一卷に過ぎず。余かつて一人家に見しが、上に紹興の題印ありき。筆意、神彩、疑ふらくは是唐末宋初の人の所爲ならん。

晉 畫

衛協は晉人なり。唐の名畫記の品第は、顧生(顧愷之)の上に在れども世多く其の蹟を見ず。畫譜に傳ふる所の高士圖、刺虎圖、余並に見るに唐末、五代の人の爲る所のみ。眞蹟得て見るべからず。

顧愷之の畫は春蠶の絲を吐く如く、初めて見るときは甚だ平易にして、且つ形似の、時に或は失ふあるも細に之を視れば六法兼ね備はり、語言、文字を以て形容すべからざる者あり、曾て初平起石圖、夏禹治水、洛神賦、小身天王を見るに其の筆意は春雲の空に浮び、流水の地を行く如く、皆自然に出づ。傳染ふせんの人物、容貌は濃色を以て微しく點綴てんてつを加へ藻飾を求めず。唐の吳道玄、早年常に愷之の畫を摹し、位置、筆意、大いに能く彷彿す。宣和、紹興、便はち題して眞蹟と作す。覽る者察せざるべからざるなり。

六 朝 畫

陸探微は愷之と名を齊しくす。余、平生たゞ文殊降靈の眞蹟を見る。部從人物ともに八十人、

飛仙四人皆各妙處あり。内に亦番僧ありて、手に鬻體盃といふ者を持つ。蓋し西域の俗然るなり。此の卷、行筆緊細にして纖毫の遺恨なし。之を望むに神采、人を動かし、眞に希世の寶なり。今、祕府に藏む後、維摩像、觀音像、摩利支天像を見しが皆之に迫ばず。張彥遠謂ふ、風神道舉、畫力頓挫、一點一拂、動けば必ず新奇と。虛言に非ざるなり。

展子虔が山水を畫く法は、唐の李將軍父子(李思訓、李昭道)多く之を宗とす。人物を畫くに、描法甚だ細に隨ひて色を以て暈開す。余嘗て故實人物、春山人馬等の圖を見、又北齊の後主が晉陽宮に幸する圖を見しが、人物の面部は神彩生ける如く、意度具足す。唐畫の祖と爲すべし。

六朝人の畫、魯義姑圖、一兵士、戈を持ちて勇猛の勢をなし、義姑、安詳荅問の態を作し、生む所の子を地にすつるに畏懼して急に母の衣を挽くの狀を作る。而して抱く所の子、兩手を以て義姑の項を抱き、兵士を回視し、一々生ける如し。筆法細潤、傳色鮮明、望みて其の唐畫に非ざるを知る。もと申屠大用の家に藏せしが今は義興の王氏に歸せり。王氏は畫を藏すること三百軸に至るも、此を最と爲すなり。

唐 畫

閻立本が畫は三清像、異國人物職貢圖、傳法大士像、五星像、皆宣和、明昌の物、余並てこれを見る。步輦圖を見るに及びて、太宗を畫きて步輦の上に坐せしめ、宮人十餘は輿輦にあり。皆曲眉豐頰、神采生ける如し。一朱衣の髯官、笏を執り班に引く。後に贊普使者あり、小團花衣を服し、及び一從者あり。李衛公は小篆にて其の上に題し、唐人、八分にて贊普が婚を辭せし事を書し、宋の高宗の題印完し。眞に奇物なり。

王芝子慶が家、閻令が畫きし西域圖を收めて唐畫の第一と爲す。趙集賢子昂、其の後に題して云ふ、畫は惟人物のみ最も難し。器物學止また古人の特に意を留むる所の者。此一々備さに其の妙を盡し、髮采生動し、語らんと欲する狀あり。蓋し虛無の間に在りて眞に神品なりと。

吳道子は筆法超妙、百代の畫聖と爲る。早年頗る細に、中年は行筆磊落にして揮霍すること神の如し。人物に八面あり、生意活動し、方圓、平正、高下、曲直、折算、停勻、意の如くならざるなし。其の采を傳くるや、焦墨痕中に於て略微染を施し、自然に縑素に超出す。世に之を吳裝、風に當ると謂ふ。弟子甚だ多く、廬稜伽、揚廷光の如きは其の尤なる者なり。五代の朱繇また能く彷彿たるも、終に甚だ似ず。觀る者當さに之を自得すべし。

王右丞維、人物、山水に工みに、筆意清潤、羅漢、佛像を畫くこと至佳なり。平生喜びて雪景、

劍閣、棧道、羅網、曉行、捕漁、雪渡、村墟等の圖を作る。其の畫きし輞川圖は世に最も著る者なり。蓋し其の胸次瀟洒にして、意の至る所、筆を落せば便はち庸史と同じからず。

周昉善く貴游人物を畫き善く眞を寫す。仕女を作るに多く穠麗豐肥にして富貴の氣あり。李思訓の畫は著色の山水金碧を用ひて輝映し、一家の法を成す。其の子昭道父の勢を變じ、妙又これに過ぐ。時人號して大李將軍、小李將軍となす。五代に至りて蜀人李昇、工みに著色の山水を畫く、亦呼びて小李將軍となす。宋の宗室伯駒字は千里、復倣倣して之をつくるも嫵媚にして古意無し。余嘗て神女圖、明皇御苑出遊圖を見しが皆思訓が平生の合作なり。また昭道の海岸圖を見しに、絹素百碎すれどもほと神采を存せり。其の筆墨の源を觀るに皆展子虔輩に出づるなり。

曹霸が人馬を畫くや筆墨沈著神采生動す。余平生凡そ四たび其の眞蹟を見たり。一は奚官試馬圖にして申屠侍御の家にあり。一は調馬圖にして李士弘の家にあり、並に宋の高宗の題印あり。其の一は下槽馬圖にして、一は黒、一は驪、國人背立し鬚眉彷彿たるを見る。奇甚だし。其の一は余が藏する所の人馬圖なり。紅衣美髯の奚官玉面驄を牽き、綠衣の閹官、照夜白を牽き、筆意神采前の三畫と同じ。趙集賢子昂嘗て題して云ふ、唐人の善く馬を畫く者甚だ衆し。而して曹(曹霸)韓(韓幹)これが最となる。蓋し其の命意高古にして形似を求めず。衆工の右に出づる所以

のみ。此の卷、曹筆たること疑ひ無し。國人、太僕、自ら一種の氣象ありて、世俗の能く知る所に非ざるなりと。集賢は當代の賞識なり。豈に我を欺かんや。

韋偃は馬、松石を畫くこと更に佳に、世多く見ず。其の筆法磊落にして揮霍振動す。一杜子美が詩に所謂る戲拈三毛筆一寫三驂驄、倏見麒麟出東壁、といふ者。余嘗て紅韃韃背駿馬圖を收めしが筆力勁健にして駿尾數ふべし。顏魯公(顏真卿)が書法の如し。往歲、鮮于伯幾これを見、驚嘆すること日を累ねき。嘗て詩を賦して曰く、渥洼産馬如産龍、韋偃畫馬如畫松と。奇文なりしが、惜むらくは章を成さずして卒せり。

韓幹初めは陳閔を師とし後に曹霸を師とし、馬を畫くに骨肉停均の法を得遂に曹、韋と並馳して先を争ふ。及び貴游人物を畫く、各其の妙に臻り、傳染に至りては色織素に入る。余嘗て其の人馬圖の錢唐の王氏に在るを見るに、二奚官、連錢驄、燕支驄を引けり。又一卷を見るに、朱衣白帽の人棗騮に騎り五明馬に騎る。四蹄破碎し水中を行くが如し。乃ち李伯時の舊藏なり。京師に在りしとき、明皇試馬圖、三馬圖、調馬圖、五陵遊俠圖を見たりき。照夜白の粉本は、上に幹自ら内供奉韓幹照夜白粉本の十字を書したり。唐人の馬を畫く多しと雖も、曹、韋、韓の如きは、特に其の最も著れし者なるを知るを要す。後世、李公麟伯時(李龍眠)が畫馬専らこれを師とす。

亦優に聖域に入る者と謂ふべし。

戴嵩は専ら牛を畫く。韓晉公滉が幕客と爲り、専ら韓を師法すれども、而も青の藍より出でし者なり。惟牛を畫くのみならず、川原、樹石、牧子、樵童に至るまで亦各妙に臻る。余凡そ七たび眞蹟を見たり。一は揚州の司徳川の家に在りて二牛相闘ひ、毛骨竦然たり。一は四明の士人の家に在り、一牛、犢を引き奇甚だし。又三牛圖、渡水牛、歸牧圖を見しが皆合作なり。古人云ふ、牛畜は文房の清玩に非ずと。其の筆意清潤にして卷を開けば古意勃然、田家原家の氣象あるがときは、余、嵩に於て取る。

韓晉公滉は人物を畫き、及び牛圖を爲る。嘗て其の田家移居圖、村童蠶戲圖、醉客圖、鼓腹圖、醉學士圖及び牛圖數本を見しが人物は顧(愷之)陸(探微)に源流し、牛圖は是其の長ずる所。戴嵩、其の緒餘を得て世に名あり。是蓋し人物及ばずして牛獨り之に過ぐるなり。

陳閔開は元中、人物を畫きて名を得たり。明皇が蜀に幸して金橋圖を作るや、人物は、閔これをつかさどれり。余其の照夜白馬圖を見るに筆法の細潤なるは曹、韓の下に在らず。

唐人の花鳥は邊鸞最も譽れを馳すと爲す。大抵設色に精しく穠艶なること生ける如し。其の佗畫く者多しと雖も互に得失あり。五代を歴て黃筌を得、諸家の善を資集し、山水は李昇を師とし、

鶴は薛稷を師とし龍と水とは孫位を師とし、花竹翎毛に至りては衆史に超出す。筌と名を齊しくすべき者たゞ江南の徐熙のみ。熙が志趣高尚にして草木蟲魚を畫き妙は造化を奪ふ。世の畫工の及ぶ所に非ざるなり。熙が花を畫くや落筆頗る重く、中に略丹粉を施し、生意勃然たり。黃の子、居實、居采、熙の孫崇嗣、崇矩、各家學を得たり。熙の下に唐希雅ありて亦佳なり。多く顧筆棘針を作るは、是其の主李重光の書法に效ふなり。後に長沙の易元吉ありて花果禽畜を作る。尤も獐猿に長じ、多く山林に遊び、猿、鸞、禽鳥の樂しむを窺ひて其の天趣を圖く。趙昌の若きはたゞ傳染を以て工みなりと爲せども其の骨法氣韻を求むれば稍劣れり。又滕昌祐、丘慶餘、葛守昌、崔白、艾宣、丁昡が徒の如きは皆其の緒餘を得て以て一家を成せり。知るを要す花鳥の一科は唐の邊鸞、宋の徐、黃、古今の規式と爲ることを。所謂る前に古人なく後に來者なしとは是なり。尉遲乙僧は、外國の人、佛像を作ること甚だ佳に用色沈著、絹素に堆起して隱指せず。平生凡て四たび眞蹟を見しが、要するに廬稜伽の下に在らず。

楊庭光は吳生(吳道子)を學び行筆甚だ細なれども弱からず。佛像を畫くに多く山林の中に在り。雜畫は一々妙にいたる。

裴寬は善く小馬を畫く。宣和所藏の一卷余嘗て之を見しが、山水の間に小馬十數を作り、蕭散

閒適にして筆墨甚だ閒雅なり。眞に奇作なり。

張璪の松石清潤にして愛すべし。平生嘗て四本を見しが、みな佳なり。後、山堂琴會圖を得たり、趙子昂之を得んと欲せしが與へざりしかば、因て題して云ふ、張璪の松、人間最もまれなり。

此の卷、幽深平遠にして、山陰道中を行くが如し。誠に寶繪なりと。

翟璠は吳生を師とし筆法は大に及ばざれどもたゞ傳色の法を得たり。嘗て孔雀明王像を見しに甚だ佳なりき。

周古言の畫は、周昉の下、文矩の上に在り。夜游圖ありて世に傳はる。張萱は士女人物に工みに尤も嬰兒に長じ、周昉の右に在らず。平生凡て十許本を見しが皆合作なり。婦人を畫くに朱を以て耳根に暈し、此を以て別と爲す。覽る者知らざるべからず。

王洽は墨を潑して山水を成し、烟雲慘淡筆墨の畦町を脱し去る。余少時一幅を見しが甚だ意度ありき。今日之を思ひ始めて洽の畫たるを知れども再び見るべからざるなり。

湯子昇は、人物を畫くこと極めて妙なり。江南の人家に軒轅鑿鑿圖あり。眞に奇物なり。

盧鴻の畫は世に傳はること多からず。余、數人の其の草堂圖を摹したるしを見しが、筆意、位置、清氣、人を襲ふ。眞蹟は其の妙を知るべし。

范長壽の醉道圖は曾て二本を見しが、皆眞軸、筆法緊實にして愛すべく用色亦潤ふ。

蜀人の山水、人物を畫くや皆孫位を以て師と爲す。龍と水は尤も位の長ずる所の者なり。世に言ふ、孫位は水を畫き、張南本は火を畫く。水火は本より無情の物なれど、二公深く其の理を得たりと。常て孫位の水宮圖を見るに、魚龍、海濤に出沒し、神鬼雲漢に變滅す。之を覽て凜々然たり。眞に傑作なり。

唐には無名人の畫至つて多し。要するに皆望みて其の唐人たるを知る。別に一種の氣象ありて宋人の比すべき所に非ざるなり。

荆浩の山水は唐末の冠たり。關同嘗て之を師とせり。浩自ら浩谷子と號し山水訣を作り、范寬の祖と爲る。

陸晃の畫は、人物極めて工みなり。元章が畫史に稱す、其の庶人章は、余嘗て同里の葉氏に従ひて之を見しが、描法甚だ細にして力ありと。又解厄、天官像等の數畫あり。皆粗惡にして厭ふべし。蓋し晃の畫は自ら二種ありて細なる者を上と爲す。

五代の左禮は、韓虬と名を同じくし佛を畫きて妙に入る。曾て十六身小羅漢の岩石中に坐するを畫くを見しが、筆意甚だ工みにして韓虬の下に在らず。

關同の霧鎖三山圖は差嫩なり。是早年の眞蹟にして京師の人家に在り。

董源は天真爛漫にて平淡多姿なり。唐にはまさに此の品なし。畢宏が上に在り。此米元章が議論に、唐、山水を畫き、宋に至りて始めて備はる。源の如きは又諸公の上に在り。樹石は幽潤、峰巒は清深にして、蚤年には攀頭頗る多かりしが暮年に舊習を一洗せり。余、祕府において春龍出蟹圖、孔子哭虞丘子、春山圖、溪岸圖、秋山圖、及び窠石二幀を見、人間において約そ二十本を見しが、皆其平生得意の合作なり。源の後、鐘陵の僧巨然及び劉道士あり。劉と巨然とは時を同じくし畫も亦同じきがたゞ劉の畫は則ち道士を以て左に在り、巨然は僧を以て右に在り。此を以て別と爲すのみ。要するに皆各源の一體を得たり。米氏父子に至り其の遺法を用ひ、別に新意を出して自ら一家を成せり。然れども源の正傳を得しは巨然を最と爲す。

董源の山水に二種あり、一樣は水墨攀頭にして、疎林遠樹は平遠幽深に山石は麻皮皴を作る。一樣は着色にして、皴文甚だ少に、色を用ふること穠古にして人物は多く紅青衣を用ひ、人面も亦粉素を用ふる者。二種皆佳作と爲すべし。

周文矩が人物を畫くや周昉を宗とし、但顛掣筆多し。是其の主李重光の畫法を學びて此の如くなるも、士女を畫くに至りては則ち顛筆なし。

李後主(李重光)周文矩、顧弘仲に命じて韓熙載夜燕圖を圖かしむ。余、周の畫二本を見、京師に至りて、弘仲の筆を見るに、周が事蹟と稍異り。史魏、王浩の題字并せて紹興の印あり。文房の清玩に非ずと雖もまた淫樂の戒めと爲すべきのみ。

徐熙が花果を畫く多く澄心紙上に在り。絹に畫くに至りては絹文稍愈なり。元章謂ふ、徐熙が絹は布の如しとは是なり。

唐希雅の弟忠祚の花鳥亦妙品に入れども、易元吉の下に在り。若し墨を用ひて棘針を作るときは易も及ぶ能はざるなり。

李昇が畫山水は、かつて之を見しが、京師に至りて西嶽降霧圖を見るに人物百餘にして體勢生動す。未だ面目を填めざる者あり。是其の稿本にして上に紹興の題印あり。若し之無きときは則ち以て唐人の稿本と爲さん。

道士牛一巖、筆に信せて寒野の鵲雉を作る。佳なること甚だし。

宣和畫譜に載す、唐の李漸の馬を畫くや筆和らぎ氣調ひ今古に儔ひなしと。三馬圖を見るに及び聞く所と甚だしく違はず。然れども自ら一種の氣韻あり。形似を以て之を求むべからず。

支仲元の神仙人物を畫く多く奕棋の勢を作り、筆法は顧、陸を師とし緊細にして力あり。人物

は清潤にして俗ならず。高宗が題せし晉、六朝の高古の名筆を見る毎に、多くは仲元が作る所。當さに知者の余の言を賞するあるべし。

唐畫の龍圖、東浙の錢氏の家に在り。絹十二幅にして二幀と作し、其の高さは尺に稱ふ。中心に一龍頭と一左臂を畫く。雲氣騰湧し、墨痕臂大の如く、筆蹟の圓勁沈著なること印の如く、一鱗、二尺盤大の如し。知らず當時何の筆を用ひて此の如く峻利なりしかを。上に吳越の錢王の大書あり、曰く、感應祈雨神龍と。并せて事蹟を書す。舊題は吳道子に作れり。知るを要す唐人たること疑ひなきを。

かつて紙上に一人一騎を畫くを見るに甚だ佳なり。後に永徽年月日、太原の王弘畫と題せり。弘の何人たるかを知らずして、徧ねく考へしが出でざりき。信に知る唐人の能畫固より多くして、紀錄盡く述ぶる能はざることを。

士女の工は、其の閨閣の態を得るに在り。唐の周昉、張萱、五代の杜霄、周文矩より、下、蘇漢臣の輩に及ぶまで、皆其の妙を得、朱を施し粉を傳け、金を鏤め玉を佩び飾を以て工と爲すに在らず。余嘗て收宮女圖を見しが文矩の筆なり。玉笛を腰帯の中に置き、目は指爪を觀、情意凝峙すれば其の思ふ所あるを知る。又文矩が畫きし高僧試筆圖を錢唐の人家に見しが、一僧、臂

を擡げ傘を揮ひ旁觀の數十人咨嗟す。噴々の態其の聲を聞くが如し。眞に奇筆なり。

董源の夏山圖は今、史崇文の家に在り。天真爛熳、拍塞滿軸、虛歇烘銷の意を爲さずして、幽深古潤、人の神情をして爽朗ならしむ。古人の山陰道中を行くや應接暇あらざりき。豈に意はんや數尺の敗素、亦能く是の若きあらんとは。

顧德謙の蕭翼賺蘭亭圖は宜興の岳氏に在り。老僧が藏する所を自負する意を作り、口目見るべし。後に米元暉、畢少董諸公の跋あり。少董は畢長史なり。跋に云ふ、「此の畫能く朱砂石粉を用ひ、而して筆力雄健、本朝の諸人皆及ばざる所。比丘の塵柄指掌、盛に蘭亭の美を稱するに非ざれば、則ち力辭するに無を以てす。蕭君、手を袖にして營度し、其の意を悉縮し必ず之を得んと欲す。皆是妙處。畫は必ず古を貴ぶ、其の説此の如し」と。又山西の童藻の跋に云ふ、「榻に對する一僧は斬色掬すべし。旁立の一僧も亦復悦ばざる意あり。僧の物果して取り難き哉」と。

唐人の畫きし李八百が妹の洗黃庭經圖は曾て司德用の家に於て一本を見しに、萬山中に一白衣の婦人、地に踞し溪に臨み、一本經を洗へり。經の毫光の天を燭すは、殊に其の意を知らざるなり。

胡瓌の畫きし番部の人馬は狼毫を用ひて筆を制し、鬣尾を疎渲し、緊細にして力あり。穹廡の

什物に至りては各其の妙を盡す。司徒用の家の暗鷹圖は眞に妙品なり。

阮郿の畫きし人物士女は極めて工みに且つ秀美なれば見る者愛玩せり。錢唐の人家に、賢妃盟手圖あり。尤も佳絶なり。

五代の婦人童氏の畫きし六隱圖は宣和畫譜に見え、今、山陰の王子才監薄の家に藏す。乃ち范蠡より張志和等に至る六人、舟に乗りて隱居するを畫く。山水、樹石、人物、豆許の如く、亦甚だ愛すべし。

黄筌の畫きし枯木は筆に信せて塗抹す。竹を畫くや丁を斬り鐵を截る如し。京に至りて二幅を見るに信に天下の奇筆なり。

衛賢は五代の人、界畫を作るに觀るべし。余嘗て其の盤車水磨圖を收めしが佳甚だし。又王子慶の驢鳴圖を見しに亦佳なれども、但樹木古拙にして皴法老いす。

胡翼は工みに人物を畫く。關同は山水を畫き、人物は其の長ずる所に非ざれば多く翼をして之を爲らしむ。

僧貫休が羅漢、高僧を畫くや世俗の貌に類せず。

郭乾暉は鷹鳥を畫き名を時に得たり。鍾隱も亦重名を負ひしが、自ら謂へらく及ばすと。乃ち

姓名を變じ、傭を郭に受け、年を経て其の筆意を得、去ることを求め、再拜して所以を陳ぶ。郭之を憐れみ、盡く以て傳授せしかば故に與に名を齊しくせり。古人の心を用ひて獨り苦しむこと此の如し。

郝澄が馬を畫く甚だ俗なり。嘗て人馬圖を見るに一工人の爲る所たるに過ぎず殊に古意なし。上に宣和の題印あり。又曾て滾塵馬圖を見るに後に篆文あり、金陵郝澄と曰ひ極めて妙なり。知る是兩手なるを。又濯馬圖を見るに亦俗なりしかば、始めて悟る滾塵馬は是無人の筆なるが、後人妄に篆文を加へて、以て重きを取り、反て畫を累はすを知らざること。

陸瑾は江南の人にして、捕魚圖を畫く、大抵王右丞を宗とし嫵媚は之に過ぎたり。又溪山風雨圖を見るに尤も佳なり。

厲歸貞は五代の人、牛を畫くこと甚だ妙なり。嘗て牧牛圖の大幅を見るに遠山清潤にして、人牛間適なり。後に八分ありて羽士厲歸貞筆と書せり。舊喬仲山の家に藏せしが今は何處に在るを知らず。

張符は牛を畫きて名を唐に得たり。曾て渡水牛一卷を見るに甚だ平なり。當さに戴嵩の下に在るべし。符は自ら煙波子と號せり。

曾仲玄の三官及び五方如來像は余曾て之を見たり。江南王氏の家に白衣觀音像ありと聞く。未だ見ず。大抵曾は吳生を師とすれども其の法を得ず。晩に自ら細筆畫を作り以て自ら別に一家を爲したりしが、支仲元の下に在り。

孫曼卿の松石問禪圖は錢唐の人家に在り。一松清潤、一僧甚だ閑雅、一士人、問答尊禮を作り、筆法精妙なり。古へ稱して孫吳生とせしが、名は虚しく得ざるなり。

僧傳古の畫龍は體勢勝ち、董羽が作りし水は甚だ速ばず、僕平生龍畫に於て最も多く心を留めて省覽せしが葉公の迹復見るべからず。祕閣の曹弗興が龍首、傳に於てこれあり。張僧繇、吳道子輩が作る所世に傳はらず。唐畫は曾て錢氏の所藏を見しが、十二幅の絹素に一首一臂を作れり。五代傳古の龍、約そ看ること十四五本に至り、亦曾て三十本を收過せしが大抵蜿蜒升降の態を得れども、而も未だ書法に拘はるを免れず。且つ馬圖を看るには神駿を識るを要し、龍圖には變化を識るを要す。故に龍と馬を畫くは最も難し。蓋し一に變化を主とし、出沒必ず戯に流るれば畫法に於て甚だ虧く。畫法に拘はるときは則ち又變化の意に乏し。故に龍畫は尤も難し。董羽は専門の學、亦形似に拘はらず。元章云ふ、董羽の龍は魚に似たり、傳古の龍は蜈蚣に似たりと。眞に知言なる哉。嘗て董源の龍數本を見しに皆清奇にして愛すべし。源の長はまさに是に在

らざれば、姑く置きて論ずるなし、近世の陳容公儲ちんようこうすゐはもと儒家者流なるが、龍を畫きて深く變化の意を得、墨を潑して雲を成し、水をひきて霧を成し、醉餘大叫、巾を脱し墨を濡し、手に信せて塗抹し、然して後以て之を成す。昇る者、降る者、俯して嘘かんと欲する者、怒りて視る者、踞して石に爪する者、相向ふ者、鬪ふ者、雲に乗り霧に躍り沙に戦ひ水より出づる者、珠を以て戯れをなして争ふ者、或は全體發見し、或は一臂一首隱約して名狀すべからざる者皆意を經ずして而して其の神妙を得たり。豈に曾中自ら天に得たる者あるか。

五代の袁義、宋の徐白は善く魚を畫く。其の迹を觀るに及びては乃ち几間の物に過ぎざるのみ。人をして徒らに美膾の興を起さしむ。獨り文臣劉宋りゅうそうが水中の魚を畫くや風萍、水荇と雖も之を觀れば活動し、鱗尾、性情、游潛、廻泳に至るまで皆其の妙を得たり。平生嘗て其の畫を觀しが近ごろ落花遊魚圖を見るに、紅桃一枝、飛花數片、赤鯉輕波に漾ひて落英を吹く。深く詩人の意を得たり。

僧運能は五代の人、善く佛像を畫く。

宋 畫

武宗元は宋の吳生なり。人物を畫くや行筆流水の如く神采活動す。嘗て朝元仙仗圖を見しが五方帝君を作り、部從服御、眉目顧盼、一に生けるが如し。前輩甚だ之を稱賞す。

營丘の李成は世儒を業とし胸次磊落にして大志あり。意を山水に寓し凡そ煙雲の變滅、水石の幽閒、平遠險易の形、風雨晦冥の態、曲さに其の妙を盡さざるなし。議者以て古今第一と爲す。傳ふる者世に多しと雖も眞なる者は極めて少なり。元章、平生只二本を見るのみなりしかば、無李論を作らんと欲するに至れり。蓋し成が平生畫く所はたゞ自ら娛しむのみ。既に勢にて逼るべからず、利にて取るべからざれば、宜なり世に傳ふる者多からざること。宣和御府の所藏一百九十五卷、眞僞果して能く辨ぜんや。翟院深ていしんの臨摹彷彿として眞を亂すも、若し神氣を論ずるときは則ち霄壤の分なり。宋復古、李公年、王詵、陳用志、皆之を宗師として其の遺志を得たり。亦一世に名あるに足る。郭熙は其の弟子中の最も著れたる者なり。

范寛、名は中正、其の豁達大度なるを以て、人、故に寛を以て之を名く。山水を畫くに、初めは李成を師とせしが、既にして乃ち嘆じて曰く、「其の人を師とせんよりは、これを造化を師とするに若かず」と。乃ち舊習を脱す。秦中に遊び、徧ねく奇勝を觀、落筆雄偉老硬にして眞に山の骨法を得たり。宋世にて山水の唐世に超越したる者、李成、董源、范寛の三人のみ。嘗て之を

評すらく董源は山の神氣を得、李成は山の體貌を得、范寛は山の骨法を得たりと。故に三家古今に照耀して百代の師法となる。寛尤も雪山に長ず。之を見て人をして凛々たらしむ。其の徒、黄懷玉、紀眞、商訓然。黄はこれを工に失ひ、紀はこれを似に失ひ、商はこれを拙に失へども、各其の一體を得たり。懷玉が刻意して其の雪山を臨摹する若き、得意の處に遇ふときは、淺深未だ斷じ易からず。

郭熙は河陽の人、李成を宗とし、善く煙雲出沒、峰巒隱顯の態を得たり。嘗て畫山を論じて曰く、「春山は淡冶にして笑ふ如く、夏山は蒼翠にして滴る如く、秋山は明淨にして沐みふ如く、冬山は慘淡にして睡る如し」。其の議論を觀て其の畫を知るべし。僕平生眞蹟を見ること約五十本。然れども絶佳の者は一二十軸に過ぎざるのみ。然れども山頂の峻險なる學者苟しくも其の意を失ふときは、竟に匾薄を成し雲深く林密き態なからん。後世、楊士賢、顧諒、皆これを學ぶ。

許道寧は初め藥を長安市中に賣り、山水を畫きて以て衆を集めたりき。故に蚤年さうねんの畫俗惡なること太甚だし。中年名を成すに至り、稍自ら檢束し細微の處に至りては殆んど妙理に入る。世に傳ふるもの甚だ多けれど、佳本は極めて少なり。峯頭の直皴は、これ其の得意の筆ならず。

王詵字は晉卿、李成が山水を學び清潤にして愛すべし。又著色山水を作り、唐の李將軍を師と

し、今ならず古ならずして自ら一家を成す。内臣馮瑾、其の筆墨を慕ひ臨倣して眞を亂すも、高宗竟に題して王詵に作る。觀る者察せざるべからず。然れども余能く望みて之を知る。

李伯時は、彩畫人物第一にして、専ら吳生を師とし、前古に照映する者なり。馬を畫くに韓幹を師とし、著色を爲さず、獨り澄心紙を用ひて之を爲せども、たゞ古畫を臨摹するには絹素著色を用ふ。筆法は雲行き水流れて起倒あるが如し。天王佛像を作るには全く吳生に法る。宋人喬仲常専ら伯時を師とし、彷彿として眞を亂す。南渡に至り、吳興の僧梵隆、亦伯時を師とせしが、たゞ人物多く出水紋を作り、稍神氣に乏しく、畫馬の若きは則ち全く能はず。伯時が暮年に畫を作るや蒼古にして字も亦老成なり。余嘗て徐神翁の像を見るに、筆墨草々なれども神氣炯然たり。上に二絶句あり。亦老筆にして書する所甚だ佳なり。また韓幹が三馬を摹するを見るに、神駿、縑素に突出す。今は杭州の人家に在り。韓をして復び生れしむるも亦た恐らくは過ぐる能はざらん。

王端の人物を畫くや古拙にして神氣無し。

石恪の畫は戯れに人物を筆するに、たゞ面部手足のみ畫法を用ひ、衣紋は麓筆にて之を成す。武岳は長沙の人、工みに人物を畫き、尤も天神、星像に長じ、用筆純熟なり。其の子洞清、能

く其の學を世にし、父に過ぐる遠きこと甚だし。凡そ世間の星像、天神、藥王等の像、傳流甚だ多く、神妙にして俗ならざること大抵武宗元と相上下し而して神采これに勝る。宗元の朝元仙仗圖は昔、張君錫の家に藏せしが、今は杭人崔氏に歸せり。一疋絹を儘して五帝の元に朝するを作る。人物仙仗、背項相倚ること大抵草書を寫す如く然り。亦奇物なり。

王士元は善く山水屋木を畫く。宣和畫譜にはたゞ山水部に於て山閣圖一卷を收め、其の諸家の妙を兼有し、人物は周昉を師とし、山水は關同を師とし、屋木は郭忠恕を師とし、凡そ筆を下す所、皆精微を極むと稱するに至るも、却つて宮室叙論中に於て之を貶して、王士元の筆の如きは皂隸を以てこれ目すべしと云へり。議論の相反する者毎に此の如し。

高克明の山水は、工みなりと雖も、畫人の習あるを免れずして深高厚古の風なし。

趙幹が山水を畫くや多く江南の景を作り風致俗ならず。杭人其の秋涉圖を收めしに上に宣和の題印ありて佳なること甚だし。

翟院深は李成を學びて山水を畫き、臨摹すること眞に逼れども自ら作るものは多く佳ならず。世に有る所の成の畫は多く此の人之を爲る。

王齊翰は佛像、神仙、山水を畫く、筆法佳なりと雖も近俗を免れず。若し細者に入れなば、固

より勝る。

易元吉は徐熙の後一人のみ、花鳥を畫くや生ける如し。人但獐猿を以てこれを名く。

燕文貴の山水を作るや細碎にして清潤愛すべし。然れども其の氣骨を取れば有る無きなり。

斐文院は畫牛に工みなるをもつて聲あり。然れども形似はこれあれども古意は足らず。

李伯時が摹したる李將軍海岸圖は、昭道（小李將軍）の法を摹すと雖も、筆意、水痕、林叢の處に至りては其の習を脱する能はず。此の卷、京師の人家に在り。

孫太古の湖灘水石圖は浙の石民瞻の家に在り。雙幅長軸、中に一石を畫く、高さ數尺、湍流激注、飛濤、雪を走らす。之を聽けば自ら聲あるを覺え、筆法甚だ老いたり。黃筌も過ぐる能はず。

徽宗は性、畫を嗜み、花鳥、山石、人物を作るに、妙品に入り、墨花、墨石を作るに間神品に入る者あり。歴代の帝王の能畫、徽宗に至りて意を盡せりと謂ふべし。當時、畫學を設建し、諸生の試藝は取程文の如く、高下を等りて進身の階を爲す。故に一時の技藝皆其の妙に臻る。嘗て學人に命じて孔雀升墩障屏を畫かしめしが大に旨に稱はず、復び餘子に命じて次第に呈進せしむ。工を極めて力を盡すも亦用ふるを得ざる者あり。乃ち相與に闕に詣りて謂ふ所の旨を陳請す。曰く凡そ孔雀の墩に升る、必ず左脚を先にするに、卿等が圖く所俱に右脚を先にせりと。之を驗す

るに信に然り。群工遂に服す。其の格物の精しきことおほむね此に類す。當時、承平の盛時、四方より珍木、異石、奇花、佳果を貢獻すること盛日なし。徽宗乃ち冊を作りて圖寫し、一板毎に二頁。十五板を一冊と作し、名て宣和睿覽集と曰ひ、累ねて數百に至り千餘冊に及ぶ。度るに其の萬幾の餘、なんぞ暇を得ること此に至らん。要するに是當時畫院の諸人其の作に倣倣し、たゞこれを題印するのみ。然れども徽宗の親ら作る者、余自ら望みて之を識るべし。

鄆王は徽宗の第二子なり。能く花鳥を畫きて聖藝に克肖し、墨花は能品に入る。嘗て一卷を見るに、後に年月日、臣某畫進呈と題せり。徽宗、其の後に御批して曰く、『卿が近畫を覽るに稍進めるを覺ゆるに似たり。但用墨の粗生動を缺くのみ。後作は當さに之を謹しむべし』と。此に知る一時、諸王の心を畫に留むる者、皆此の如きことを。

張敦禮は浮梁の人、善く人物を畫き、六朝の筆意を師とす。哲宗の時なり。嘗て其の畫を論ずるを見るに、曰く、『畫の藝たる小なりと雖も人をして善惡を鑒別し、人の觀聽を聳やかすに至りては補ひたること豈衆工に儕すべけんや』と。敦禮が人物を畫くや貴賤善惡容貌見るべく筆法緊細にして、神彩生ける如し。江南にて陳元連鎖樹諫圖を見しに、其の忠義の氣、縑素に突出す。京師に在りて、阮孚蠟屐圖を見るに、人物、樹石は並に顧、陸を倣ひ、後に敦禮が受くる所の追

贈大師の誥命あり。是其の家藏の物にして子孫就きて誥命を以て其の後に附す。眞に奇品なり。文與可が竹眞なる者甚だ少なり。平生たゞ五本を見、偽れる者三十本。往に張受益が古齋泥壁屏上の倒垂枝を見るに、上に熙寧二年己酉冬至日巴郡文與可戲墨と題す。奇作なり。後に絹畫三本を見るに、一に此の題の如く筆墨皆相似たり。天地の間未だ見ざる者尙多からん。豈に與可、一日の間にして、能く此の數本を作らんや。然れども眞偽一見すれば自ら之を辨すべし。

東坡先生は文章翰墨千古に照耀す。復能く心を墨戲に留め、墨竹を作りて文與可を師とし、枯木、奇石、時に新意を出す。僕平生其の黃州に謫せらるゝ時、路途に於て民家の雞栖豕牢の間に叢竹木石あり、因て其の狀を圖くを見るに、竹葉を作るに紋縷亦細なり。祕監に在るに及びて拳石老檜、巨壑海松の二幅を見るに、奇怪なること甚だし。墨竹は凡そ十四卷を見しが、大抵意を寫して形似を求めず。僕會て枯木竹石圖を收めしに上に元章が一詩あり。今、道士黃可玉の有する所と爲る。亦奇品なり。

米芾は天資高邁にして書法、神に入る。宣和(徽宗)畫學を立つるや擢んでられて博士と爲る。初めて徽宗に見ゆるとき、畫く所の楚山清曉圖を進め、大に旨に稱ひ、復び命ぜられて、周官篇を書せしが、書し畢りて筆を地に擲ち、大言して曰く、二王(王羲之、王獻之)の惡體を一洗し

て、皇宋の萬古に照耀すと。徽宗潛に屏風の後に立ちて之を聞き、覺えず歩いて出で縱觀して稱賞す。元章再拜して、用ふる所の端硯を求索し、因て就きて賜はる。元章喜び拜して、之を懷中に置くに、墨汁、朝服に淋漓たり。帝大に笑ひて罷む。其の豪放なる、おほむね此のごとし。畫を作るや喜びて古賢像 寫す。山水は其の源、董源より出で、天真發露し、怪々奇々。枯木松石は時に其の新意を出す。然れども世に傳ふるもの多からず。其の子友仁、字は元暉、亦家學を傳ふ。山水を作る清致掬すべし。亦略其の尊人の爲す所を變じて一家の法を成し、烟雲の變滅、林泉の點綴、生意窮り無し。平生亦珍玩し、曾て易く人に予へず。當時、翟耆年、詩ありて云ふ、善畫無根樹、能描樣懂雲、如今身貴重、不肯與人間。と。世の爲に貴重せらるゝこと此の如し。

元章常に稱す、華亭の李甲字は景元、翎毛を作るに天趣あり、樹木佳ならずと。僕屢其の畫を見るに、樹木甚だ拙なるが禽鳥は佳處多し。

宋の宗室、千里、希遠の如き皆丹青の妙を得たり。大年が小景、墨雁、雜禽の如き、又尋常宗室の筆墨の外に出づる者。濮王宗漢の墨雁は神品に入るべし。

宋迪字は復古、李成を師とし、精なること甚だし。士大夫中畫最も佳にして、李公年が下に在

らず其猶子子房、亦家法を得たり。

劉涇字は巨濟、元章と同じく書畫の友と爲る。枯木を作るに奇思あり。

周怡は畫院の人、宣和の末、承應して唐畫を摹倣するに觀るべきあり。

崔白が蘆雁の類は清致と雖も、余平生これを見るを喜ばざるが、獨り一大軸あり、絹の濶さ一丈許り長さ二丈許り中に濃墨にて八大雁を作り、飛鳴宿食の態を盡す。東坡先生、大字にて詩を題して曰く、扶桑之繭如_三登_二臺_一、天女織_二綃_一雲漢上、往來不_レ遺_二鳳_一銜_レ梭、誰能鼓_レ臂投_三三丈_一、云云。眞に白が得意の筆なり。

李伯時の十六小馬圖は京師に至りしとき、始めて之を見しが、紙素數寸中に山林を作り、十六小馬水を飲み草を齧み、天趣を其の間に樂しみ、神駿愛すべし。伯時、小字にて其の後に題せり。今、郝大參の家_二に在り_一。

徽宗が自ら畫きし夢遊_二化城_一圖、人物は小指を半ばする如く數千人を累ね、城郭宮室、摩幢鼓樂、仙嬪眞宰、霄漢雲霞、禽畜龍馬、凡そ天地の間有る所の物、色々具備し、甚だ工みなりと爲す。之を觀るときは、人をして神_二八極_一に遊ぶの想を起し、復人間の世あるを知らざらしむ。奇物なり。今、嘉興の陳氏に在り。又李昭道の摘瓜圖を臨せるを見る。曩に京師の人の處に在りき。

明皇(唐の玄宗)が三駿照夜白馬に騎り、棧道の飛仙嶺を出づるに乍_二ち小橋を見、馬驚きて進まず。遠地に二人、瓜を摘み、後に數騎ありて漸く至るを畫く。奇迹なり。

程坦は元章の時の人にて雜畫を善くし往々之を見しが、張受益が收めし松竹幃の三大幅は頗る佳なるも、人物の如きは甚だ俗なり。城南の李氏が收めし鍾馗小妹の二幅は甚だ惡し。元章謂ふ、程坦能く茶坊酒肆の壁を塗るといふ者、此の論、眞に是なり。

花光長老、墨暈を以て梅花を作ること影の如し。然れども別に一家を成す。まさに所謂る寫意といふ者なり。世に傳ふるもの多からず。僕平生たゞ四五本を見るのみ。子昂、其の枝條を學び、花は別法を用ふ。

宋の南渡の士人多く畫を善くする者あり。朱敦儒希眞、畢良史少董、江參道一貫の如き、皆能く山水窠石を畫く。畫院の諸人の名を得る者のごとき、李唐、周會、馬賁のごときより、下、馬遠、夏圭、李迪、李安忠、樓觀、梁楷の徒に至る。僕、李唐に於て、やゝ賞閱を加ふるも其餘はまた盡く別つ能はざるなり。

畢少董は能く山水を畫き宋希眞の下に在らず。僕嘗て見たり。故に表異して以て後人に語ぐ。馬和之は人物を作ること甚だ佳にして行筆飄逸たり。時人目して小吳生と爲す。更に能く俗習

を脱去し、意を高古に留むるときは、人未だ到り易からざるなり。

池州の畫工、九華秋浦圖を作る。元章云ふ、甚だ清趣あり、董源を師とすと。僕平生凡そ見るもの七八本あり。其の工緻なるもの甚だ多し。信に元章が説妄ならず。

楊補之が墨梅甚だ清絶、水仙も亦奇なり。自ら逃禪老人と號す。

湯叔雅は江右の人、墨梅甚だ佳に大抵補之を宗とし、別に新意を出す。水仙、蘭も亦佳なり。

趙孟堅子固が墨蘭最も其の妙を得。其の葉は鐵の如く花莖亦佳なり。石を作るに筆を用ひて輕拂し、飛白の狀の如し。前人に此の作なきなり。梅、竹、水仙、松枝の墨戲を畫く、皆妙品に入る。水仙を圖く、尤も高しと爲す。子昂専ら其の蘭を師とす。覽る者當さに自ら其の高下を別つべし。近世、牧谿の僧法常、墨竹を作るも麓惡なること比なし。

廉布字は宣仲、枯木、藜竹、奇石を畫く、清致にして俗ならず。本東坡を學び、青、藍より出で、自ら射澤老人と號す。松柏を畫く亦奇なり。杭州龍井寺の版壁に、松石、枯木を畫きしが、眞に得意の筆なり。後に王清叔あり、亦枯木、竹石を畫き、臨倣すること眞に逼れども、但筆墨麓惡にして生意少きのみ。

常州太平寺佛殿の後壁に徐友の畫水あり。清濟貫河と名く。中に一筆あり、其の端末を尋ぬる

に長さ四十丈。觀る者之を奇とす。友の妙、豈に是に在らんや。筆法既老い、波瀾起伏し、其の水勢を得、相對して活動し、愈看て愈奇なり。兵火の間寺屋盡く焚けしが、而も此の殿、巋然として獨り存せり。豈に水の能く之を厭ふか。

王庭筠字は子端、枯木、竹石、山水を畫き、往々にして之を見る。獨り京口の石民瞻が家なる幽竹枯槎圖、武陵の劉進甫が家なる山林秋晚圖は、上、古人に逼り、胸次、元章の下に在らず。

金人楊祕監は山水を畫くに、全く李成を師とす。

任詢字は君謨、金國の人、草書は能品に入る。山水を畫く亦佳なるも、王子端の下に在り。

金の顯宗は章宗の父なり。墨竹を畫きて俗ならず。德宗毎に其の籤に題す。

金人の畫馬、極めて觀るべきあれども、惜むらくは盡く其の姓名を知る能はず。

近世、龔聖予先生、名は閑、淮陰の人、身の長八尺、碩大にして美髯。書を讀み文をつくるに、能く一家の法を成す。馬を畫くに専ら曹霸を師とし、神駿の意を得るも但用筆頗る麓なり。此を足らずと爲す。人物を畫くに、亦曹、韓を師とし、山水を畫くに米元暉を師とし、梅、菊、花卉、雜は古を師とし、卷を作る後、必ず詩或は贊、跋を題するに、皆新奇なり。嘗て自ら瘦馬を畫き、詩を題して曰く、一從雲霧降天關、空進先朝十二閑、今日有誰憐瘦骨、夕陽沙岸影如山と。

江南の畫工陳琳仲美、其の先は本畫院の待詔なり。琳能く古を師とし、凡そ山水、花卉、禽鳥、皆其の妙を稱す。臨摹を畫くを見るに古人に彷彿たり。子昂相與に講明し資益する所多し。故に畫俗ならず。宋の南度せしより二百年、工人に此の手なきなり。

外國の畫は、高昌國の畫、金銀箔子及び朱墨を用ひ點綴すること雨の如く、銷洒して紙上に在り。翎毛を畫くこと中國の如し。花草も亦佳なり。

高麗、觀音像を畫くこと甚だ工みなり。其の源は、唐の尉遲乙僧の筆意より出で、流れて織麗に至れり。

畫禪室隨筆

董 其 昌（明）

畫 訣

士人の畫を作るには、當さに草隸奇字の法を以て之を爲すべし。樹は屈鐵の如く山は畫沙に似、甜俗の蹊徑を絶去すれば乃ち士氣と爲る。爾らさればたとひ儼然として格に及ぶも、已に畫師の魔界に落ちて復掇藥すべからず。若し能く繩束中より解脱すれば、すなはち是透網鱗ならん。

畫家の六法、一に氣韻生動、氣韻は學ぶべからず。此生れて之を知り自ら天授あり。然れども亦學び得る處もあり。萬卷の書を読み萬里の路を行き、胸中に塵濁を脱去するときは、自然に丘壑内營して、たちどころに鄩鄂を成し、手に随つて寫出するも皆山水の傳神とならん。

李成は墨を惜むこと金の如く、王洽は墨瀋を瀋して畫を成す。夫畫を學ぶ者つねに墨を惜み、墨を瀋するの四字をおもはゞ、六法、三品において、思半に過ぎん。

古人の畫を論ずるに云へるあり、筆を下せば、すなはち凹凸の形ありと。此れ最も懸解なり。吾、此を以て高く歴代より出づる處を悟る。至る能はずと雖も、庶幾はくは之に效はん。其の百の一を得ば、すなはち自ら老いて以て丘壑の間に遊ぶに足らん。

「氣は地表に霽れ雲天末に斂る。洞庭始めて波たち、木葉微しく脱つ。春草碧色、春水綠波、君を南浦に送る。傷み之をいかんせん。四更山月を吐き、殘夜水樓に明かなり。海風吹きて斷ず、江月照らして還た空し」宋の畫院、各試目あり。思陵嘗て自ら新意を出して以て畫師を品せしが、余は此の數則を以て、名手を徴して小景を圖かんと欲す。然れども陵少(甫杜)人なく、謫仙(李白)死す。文(文徵明)沈(沈周)の後、廣陵散絶ゆ。奈何せん。

潘子が輩は余の畫を學び、余になぞらふれば更に工なり。然れども皴法三昧、與に語るべからざるなり。畫に六法あり、其の氣韻の若きは必ず生知に在り。轉た工なれば轉た遠し。

畫中の山水、位致、皴法、皆おのゝ門庭ありて相通すべからず。たゞ樹木は則ち然らず。李成、董源、范寬、郭熙、趙大年、趙千里、馬、夏、李唐、上は荆(荆浩)關(關同)より、下は黃子久(黃公望)吳仲圭(吳鎮)が輩におよぶと雖も、皆通用すべきなり。あるひと曰く、須らく自ら一家を成すべしと。此殊に然らず。柳は則ち趙千里、松は則ち馬和之、枯樹は則ち李成の如き、

これ千古不易、復び之を變ずと雖も本源を離れず。豈に古法をすて、獨創する者あらんや。倪雲林も亦郭熙、李成より出で、稍柔雋を加ふるのみ。趙文敏(趙子昂)の如きは、則ち極めて此の意を得たり。蓋し古人の美を樹木に萃むるは、石上に力を着くるに在らず、而して石自ら秀潤なり。今、重ねて古人の樹木を臨すること一冊、以て奚囊と爲さんとほつす。

古人の畫は一邊より生じ去らず。今則ち此の意を失ふ。故に八面玲瓏の巧なし。但能く分ち、能く合せ、而して皴法以て之を發するに足るは、是了手の時の事なり。其の次は須らく虛實を明かにすべし。虛實とは、各段中用筆の詳略なり。詳處あれば必ず略處あるを要し、實虛互に用ふ。疎なれば則ち深遠ならず、密なれば則ち風韻ならず。但虛實を審にし、意を以て之を取るときは、畫自ら奇ならん。

凡そ山水を畫くには須らく分合を明にすべし。分筆は乃ち大綱宗なり。一幅の分あり一段の分あり此において了然たらば、則ち畫道半に過ぎん。

樹頭は轉ずるを要す、而も枝は繁くすべからず。枝頭は斂むるを要す、放つべからず。樹梢は放つを要す、緊しくすべからず。

樹を畫く法は須らく専ら轉摺を以て主と爲すべし。一動筆毎に、すなはち轉折の處を想ふこと、

寫字の轉筆において力を用ふるが如くし、更に往くとして收めざるべからず。樹に四肢ありとは、四面皆枝を作り葉を著くべきを謂ふ。但一尺の樹を畫くには、更に半寸の直あらしむべからず。須らく筆々轉じ去るべし。此秘訣なり。

畫は須らく先づ樹木を工にすべし、但四面に枝あるを難しと爲すのみ。山は必ずしも多からず。簡を以て貴しと爲す。

雲林の畫を作るや、側筆を用ふ、輕あり重あり、圓筆を用ひず。其の佳なる處は筆法の秀峭に在り。宋人の院體は、皆圓皴を用ひしが、北苑(董源)獨り稍縱ほしまなり。故に一小變を爲す。倪雲林、黃子久、王叔明は皆北苑より起祖す。故に皆側筆あり。雲林は其の尤も著しき者なり。

北苑の小樹を畫くや、先づ樹枝及び根を作らず、たゞ筆を以て點じて形を成す。山を畫くには即ち樹を畫くの皴を用ふ。これ人の知らざる所にして乃ち訣法なり。

北苑の雜樹を畫くや、たゞ根を露し而して葉を點す。高下肥瘦は、其の成形を取るのみ。これ即ち米畫の祖にして最も高雅と爲す。斤々たる細巧に在らず。

人物を畫くには須らく顧盼こへん語言し、花果風を迎へて露を帶び、禽飛び獸走り、精神脫眞し、山水林泉、清閑幽曠、屋廬深遠、橋渡往來、山脚は水に入りて澄明に、水源の來歴は分曉なるべし。

此の數端あらば、即ち名を知らざるも、定めし是高手ならん。

董北苑の樹を畫くや多く小樹を作らざる者あり。秋山行旅の如き是なり。又小樹を作るに、たゞ遠く之を望むに、樹に似たるも其の實は點綴によりて以て形を成す者あり。余謂ふ、此即ち米氏が落茄の源委なりと。蓋し小樹は最も淋漓約略を要し、枝柯に簡にして、形影に繁なり。文君の眉、黛色と相參合する如きを欲するは、則ち是高手なり。

古人云ふ、筆有り墨有りと。筆墨の二字、人多く識らず。畫豈に筆墨無き者あらんや。たゞ輪廓のみありて皴法なき、即ち之を筆無しと謂ひ、皴法有りて、輕重、向背、明晦を分たざるは、即ち之を墨無しと謂ふ。古人云ふ、石は三面を分つと。此の語は是筆にして是亦墨なり。之を參すべし。

畫家、古人を以て師と爲すも、すでに自ら上乘ならば、此より進みて、當さに天地を以て師を爲すべし。毎朝起きて雲氣の變幻を見るに、はなはだ畫中の山に近し。山行の時奇樹を見れば、須らく四面より之を取るべし。樹を左看して畫に入らざるも、而も右看して畫に入る者あり。前後も亦爾り。看得て熟せば自然に神を傳へん。神を傳ふには必ず形を以てす。形と心手と相湊り、而して相忘るゝは神の托する所なり。樹豈に畫に入らざる者あらんや。たゞ當に之を生納せいさう中に收

むべし。茂密にして繁ならず、峭秀にして蹇ならずんば、即ち是一家の眷屬のみ。

樹木を畫くに各分別あり。瀟湘圖を畫くが如きは、意、荒遠滅没に在れば、即ち當さに大樹及び近景、叢木を作るべし。園亭の景の如きは、楊柳、梧竹、及び古檜、青松を作るべし。若し園亭の樹木を以て之を山居に移せば、すなはち稱はず。重山、複嶂の若きは樹木又別なり。當さに直枝、直幹、多く攢點を用ひて彼此相藉り、之を望めば模糊鬱葱として林に入りて猿啼虎嘯ある者に似べくして乃ち稱はん。春夏秋冬、風晴雨雪の如きに至りては又言に在らざるなり。

枯樹は最も少くべからず。時に茂林中においてまゝ出すときは乃ち奇古なり。茂樹は惟檜柏楊柳、椿槐のみ鬱森なるを要す。其の妙處は樹頭と四面と參差し、一出、一入、一肥、一瘦の處に在り。古人木炭を以て圈を畫き、圈に隨ひて之を點するは正に此が爲なり。

柳は、宋人には高垂柳多く又點葉柳あり。垂柳は畫き難からず。只枝頭を分ちて勢を得るを要するのみ。柳葉を點する妙は、樹頭圓鋪の處に在りて只汁綠を以て漬出し、又森蕭として風を迎へて搖颺する意あるを要す。其の枝は須らく半明半暗なるべし。又春二月の柳は、未だ條を垂れざるも秋九月の柳は、已に衰颯すればともに混すべからず。設色も亦須らく此の意を體すべきなり。

山の輪廓先づ定まりて然して後に之を皴す。今人は碎處より積みて大山と爲すも、これ最もこれ病なり。古人の大軸を運するや、只三四の大分合のみ。章を成す所以なり。其中細碎の處多しと雖も之を要するに勢を取るを主と爲す。吾に元人が米(米芾)高(高克恭)二家の山を論ずる書あり。正に先づ吾が意を得たり。

畫樹の竅はたゞ多曲に在るのみ。一枝、一節と雖も直くすべき者あることなく、其の向背俯仰は、全く曲中において之を取る。あるひと曰く、然らば則ち諸家に直樹あらざるかと。曰く、樹直しと雖も而も枝を生じ節を發する處、必ずしもすべて直からざるなり。董北の苑樹は勁挺の狀をなすも、たゞ曲處の簡なるのみ。李營丘は則ち千屈萬曲して復直筆なし。

畫家の妙は全く烟雲變滅の中に在り。米虎兒(米友仁)謂ふ、「王維の畫は之を見ること最も多きが、皆刻畫する如く學ぶに足らず。たゞ雲山を以て墨戲と爲すのみ」と。此の語は過正に似たりと雖も、然れども山水中、當さに意を烟雲に著くべし、鈎染を用ふべからず。當さに墨を以て漬出し、氣蒸冉冉として墮ちんと欲するが如くならしむべし。乃ち生動の韻と稱すべし。

趙大年が平遠を畫くや、はなはだ右丞に似、秀潤天成にして眞に宋の士夫畫なり。此の一派は又傳はりて倪雲林と爲る。雲林は工緻敵せざるも、而も荒卒蒼古勝る。今、平遠及び扇頭小景を

作るに、一に此の二人を以て宗と爲す。人をして之を玩びて窮まらず、味外に味あらしめて可なり。

平遠を畫くには、趙大年を師とし、重山疊嶂には、江貫道を師とし、皴法には董源の麻皮皴及び瀟湘圖の點子皴を用ひ、樹には北苑、子昂二家の法を用ひ、石法には大李將軍の秋江待渡圖、及び郭忠恕の雪景を用ふ。李成が畫法に、小幀水墨及び着色青綠あり。俱に宜しく之を宗とすべし。其の大成を集めて、自ら機軸を出し、再び四五年なるときは、文(文徵明)沈(沈周)二君、吾が吳に獨歩する能はざらん。

畫を作るには、凡そ山は俱に凹凸の形あるを要す。先づ山の外勢形像を鈎し、其中則ち直皴を用ふるは、此子久の法なり。

畫と字と各門庭あり。字は生なるべく畫は熟なるべくならず。字は須らく熟後に生なるべく、畫は須らく生外に熟なるべく。

畫 源

吾が家に董源の龍宿郊民圖あり。取る所何の義なるを知らざるも、おほむね筆壺ほんぐして師を迎ふ

る意なり、蓋し宋の藝祖が江南を下し、時、進御する所の者。畫は甚だ奇なるも、名は則ち詔ふ。董北苑の蜀江圖、瀟湘圖は皆吾が家に在れども、筆法、二手に出づる如し。又藏する所の北苑の畫數幀、復同じき者なし。畫中の龍と稱すべし。

張擇端の清明上河圖は皆南宋の時汴京の景物を追慕せしものにして、西方美人の思あり。筆法の繊細なる亦李昭道に近きも、惜むらくは骨力乏し。

王叔明は趙吳興が甥にして、其の畫は皆唐宋の高品を摹す。董、巨、李、范、王維が若き、備さに能く之に似たり。若し刻畫の工においては、元季當に第一と爲すべし。

高彥敬尙書(高克恭)の畫は逸品の列に在り。米氏父子を學ぶと雖も乃ち遠く吾が家の北苑を宗とし、而して格を降して墨戲を爲す者なり。

倪迂は勝國の時に在りて、詩畫を以て世に名あり。其の自ら標置すること、黄公望、王叔明の間に在らず。自ら云ふ「我が此の畫、深く荆、關の遺意を得たり。王蒙輩の能く夢見する所にあらず」と。然れども其の品を定むれば、當に逸格と稱すべし。蓋し米襄陽、趙大年が一派のみ。黄、王においては、眞に伯仲にして、虚うそしからざるなり。

畫譜には司馬君實(司馬光)を載せず。予曾て其の畫を見るに大に營丘に類す。小米(米友仁)が

一幀を作りて之に配するあり。宋人の題款甚だ多し。因て思ふ、古人は自ら其の技倆を盡すべからずと。

元季の四大家は黄公望を以て冠と爲す、而して王蒙、倪瓚、吳仲圭、これと對壘す。此の數公、畫を評し、つひに高彦敬を以て趙文敏に配せしが、恐らくは偶に非ざらん。

余は北苑の一卷を藏す。之を諦審するに、二妹及び瑟を鼓し笙を吹く者あり、漁人の網を布き魚を漉する者あり、乃ち瀟湘圖なり。蓋し洞庭樂を張るの地、瀟湘帝子遊ぶの二語を取るの境を爲す。余も亦嘗て瀟湘に遊びしが、道上山川の奇秀、おほむね此の圖の如し。而して是の時方に李伯時が瀟湘卷を見て、會ち之に效ひて一小幀を作りぬ。今、北苑を見て乃ち伯時は名宗と雖も、乏しき所は蒼莽の氣なることを知る。

石田(沈周)の春山欲雨圖卷はさきに王元美の家に藏せしが、今、余が處に歸せり。春郊牧馬圖、或は曰く、趙王孫子昂と。或は云ふ、仲穆(趙雍、子昂の子)と。余定めて以て五代人の筆と爲す。

王右丞が畫は余構李の項氏より、釣雪圖を見るに、盈尺にして絶だ皴法なし。石田が所謂る筆意凌競人局脊といふ者。最後に小幀を得たり、乃ち趙吳興の藏せし所にして、頗る營丘(李成)

に類し、而して高簡は之に過ぐ。又長安の揚高郵が所において山居圖を得しが、則ち筆法は大年(趙令穰)に類し、宣和(徽宗)の危樓暮人千里、欹枕秋風雁一聲と題する者あり。然れども馮祭酒が江山雪霽圖の右丞の妙趣を具有するに如かず。予曾て借觀して歳を終りしが、今漁父の桃源を出づるが如し。

倪雲林は平生人物を畫かざりしが、たゞ龍門僧の一幀のみ之有り。亦圖書を用ふるまれなりしが、たゞ荆蠻民といふ一印ある者、其の畫、遂に荆蠻民と名け、今は余が家に藏せり。雲に華溪あり、勝國の時、人多く華溪漁隱を寫ししが、蓋し是趙承旨(趙子昂)之を倡へしなり。王叔明(王蒙)は是趙家の甥なれば、故に亦數幀を作りしも、今皆余が藏する所と爲れり。余つねに山を雪上とらじやうに買ひて桃源の人と作り、以て畫識に應ぜんと欲す。

丁酉三月十五日、余は仲醇と、吳門の韓宗伯が家に在りき。其の子、古周携へて余に顔書自身告、徐季海書、朱巨川告を示す。即ち海岳が書に載する所にして、皆これ雙璧なり。又趙千里の三生圖、周文矩の文會圖、李龍眠の白蓮社圖あり。たゞ顧愷之が右軍家園の景を作りしは、たゞ酒肆上の人のみ。

項又新の家に趙千里の四大幀あり、千里の二字を金書す。余、仲醇と之を諦審するに、乃ち顔

秋月の筆なり。

黄子久の畫は、余の見る所を以てすれば三十幀を下らざれど、之を要するに浮髯暖翠を第一となす。恨むらくは景の碎なるのみ。

趙文敏の洞庭兩山二十幀、各題するに騷語四句を以てし、全く董源を學ぶ。余が家の藏する所と爲る。

郭忠恕の越王宮殿はさきに嚴分宜の物と爲り、後に籍没せられしが、朱節庵國公、折俸を以て之を得、流傳して余が處に至れり。其の長さ三尺餘、みな沒骨の山なり。余細檢するに乃ち錢璆が越王宮を畫きたるにて勾踐には非ざるなり。

李成の晴巒蕭寺は文三橋これを項子京より售ひしが、大青綠は全く王維に法る。今は余が處に歸せり、細かに之を視るに、名は董羽なり。

吳琚は晉陵の人なり、書を米南宮(米芾)に學び、以て眞を奪ふ。今、北固の天下第一江山といふ題榜はこれ其の跡なり。著す所に雲壑集あり。余は京師に在つて、宋人の挂幀を見、絶だ南宮に類せしが、たゞ雲壑の印ありしかば、遂に定めて琚の筆と爲し、尾に題する數行は、琚をして泯没せざらしめき。

仲醇ははなはだ瓚(倪瓚)の畫を好み、おもへらく、子久(黄公望)山樵(王蒙)の上に在りと。

余は爲に雲林が山景一幀を寫して之に歸し、題して云ふ、仲醇悠々忽々、形骸を土木にすること稽叔夜(嵇康)に似たり。近代たゞ懶瓚のみ其の半を得たり云々。まさに是韻を識る人、了に得べからず。

余、長安に在りし時、仲醇に書を寄せて云ふ、學ばんと欲する者は、荆、關、董、巨、李成なり。此の五家の畫は、尤も眞蹟少し。南方の宋畫は賞鑒するに堪えず。兄等爲に之を訪ひ、一銘心記の宋人の如き者を作れ。弟が書成るを俟ちて、ともに一本を合せん。即ち收藏する能はざるも、聊か以て意に適し、海岳をして畫史を獨行せしめじ。

京師の楊太和の家に藏する所の晉唐以來の名蹟は甚だ佳なり。余借觀するに、右丞の畫一幀あり。宋の徽廟、左方に御題す、筆勢飄舉、眞に奇物なり。宣和畫譜を檢するにこれを山居圖と爲す。其の圖中の松針と石脉を察するに、宋以後の人の法なければ、定めて摩詰たること疑なし。さきに相傳へて大李將軍とせしが、しかも拈出して輞川(王維)と爲す者は余より始まる。

余の家に藏する所の北苑の畫に瀟湘圖、商人圖、秋山行旅圖あり。又二圖あり。其の名を著はさず。一は白下の徐國公の家より之を購ひ、一は則ち金吾鄭君、余といにしへに博きが、北苑を

堂中に懸け、兼ぬるに倪黃の諸蹟を以てせしに、また北苑に眼を著くる者なかりき。まさに自ら元人の來處を知らざるなり。

李伯時の西園雅集圖には兩本あり、一は元豐の間、王晉卿都尉の第に作り、一は元祐の初、安定郡王趙德麟の邸に作る。余、長安より團扇上の者を買ひ得たり。米襄陽の細楷あるも何れの本なるかを知らず。又別に仇英の摹する所にして文休承が後に跋せる者を見ぬ。

余、龔氏の江貫道の江山不盡圖を買ひしが、董(董源)巨(巨然)に法る、これ絹素にして、其の卷約ね二三丈あり。後に周密と林希逸の跋あり。貫道、茶癖を負ふ。葉少蘊つねに之を薦めき、故に周の跋に云ふ、「恨むらくは石林を乞ひて見しめざりしを」と。

文人の畫は王右丞(王維)より始まる。其の後は董源、僧巨然、李成、范寬、嫡子となる。李龍眠、王晉卿、米南宮及び虎兒(米友人)皆な董、巨より得來り直ちに元の四大家黃子久、王叔明、倪元鎮、吳仲圭に至るまで、皆な其の正傳にして、吾が朝の文、沈は、則ち又遙に衣鉢を接す。馬、夏及び李唐、劉松年の如きは、またこれ大李將軍(李思訓)の派にして、吾が曹の學び易きに非ざるなり。

・禪家に南北の二宗あり、唐の時始めて分れたり。畫の南北の二宗も亦唐の時に分れしが、たゞ其の人は南北に非ざるのみ。北宗は則ち李思訓父子が着色の山、流傳して宋の趙幹、趙伯駒、伯驥となり、以て馬、夏の輩に至れり。南宗は則ち王摩詰始めて渲淡を用ひ、鉤斫の法を一變す。其の傳、張璪、荆、關、郭忠恕、董、巨、米家父子となり、以て元の四大家に至ること亦六祖の後、馬駒、雲門、臨濟の兒孫の盛なるが如し。而して北宗微ふ。之を要するに、摩詰が所謂る雲峰石迹、迥に天機を出し、筆意縱横造化に參する者なり。東坡は吳道子、王維が畫壁を贊して亦云ふ、「吾、維也に于て間然なし」と、知言なる哉。

元季の諸君子の畫はたゞ兩派のみ。一は董源となり、一は李成となる。成の畫に郭河陽ありて之が佐となること、またなほ源の畫に僧巨然ありて之に副たるがごとし。然れども黃、倪、吳、王の四大家は、皆董、巨を以て家を起し名を成し、今に至るまで海内に隻行せり。李、郭を學ぶ者に至りては、朱澤民、唐子華、姚彥卿が輩、ともに前人の蹊徑の壓する所となり自ら堂戸を立つる能はず。此南宗の子孫、臨濟のみ獨り盛なるが如し。當に亦祖法を紹隆すべき者、精靈男子あらんか。

畫に筆迹なしとは、其の墨淡くして、模糊として分曉なきを謂ふに非ず。まさに書を善くする者の筆鋒を藏するが如く、錐にて砂に畫き、印にて泥に印するが如きのみ。書の鋒を藏するは、

筆を執りて沈著痛快なるに在り。人能く善書執筆の法を知らば、則ち能く名畫の筆迹なき説を知らん。故に古人にては大令の如き、今人にては米元章、趙子昂の如き、書を善くすれば必ず能く書を善くし、畫を善くすれば必ず能く書を善くする、其の實は一事のみ。

余嘗て謂ふ、右軍父子の書は齊、梁に至りて風流頓に盡きしが、唐初、虞、褚輩、其の法を變ぜしよりすなはち合せずして合す。右軍父子、殆んど復び生れし如しと。此の言大に意會すべし。蓋し臨摹最も易くして神氣傳へ難き故なり。巨然、北苑(董源)を學び、黃子久、北苑を學び、倪迂、北苑を學ぶ。一の北苑を學ぶのみ。而も各々相似ず。俗人をして之を爲さしむれば臨本と同じからん。若し爾らば、何ぞ能く世に傳はらん。子昂の畫は圓筆と雖も其の北苑を學ぶときは亦爾らず。

雲林の山は、皆側邊に依りて勢を起し、兩邊の合成を用ひず。これ人の曉らざる所なり。近來俗子、筆を點じて便ち自ら米家の山と稱するも深く笑ふべきなり。元暉(米友仁)が千古に睥睨すること、右丞に譲らず、容易に湊泊して後人の短を護る逕路を開くべけんや。

荆浩は河南の人、自ら洪谷子と號す。博雅にして古を好み、山水専門を以て頗る趨向を得たり。善く雲中の山頂を爲る、四面峻厚なり。自ら山水訣一卷を撰ぶ。人に語りて曰く「道子が山水を

畫くや筆ありて墨なし、項容は墨ありて筆なし」と。浩、二子の長ずる所を兼ねたり。故に關同は北面して之に事ふ。世、荆浩の山水を論じて、唐末の冠と爲す。蓋し筆ありて墨なき者、落筆の蹊逕を見て而して自然少し。墨ありて筆なき者は斧鑿の痕を去りて、而して變態多し。

米家の山、之を士夫畫と謂ふ。元人の畫論一卷ありて、専ら米海岳(米芾)高房山(高克恭)の異同を論ず。余頗る其の語に慨するあり。

迂翁(倪瓚)の畫は勝國の時に在りて、逸品と稱すべし。昔人は逸品を以て神品の上に置きしが、歴代たゞ張志和、盧鴻のみ愧色なかるべし。宋人中、米襄陽(米芾)蹊逕の外に在り。餘は皆陶鑄より來る。元の能くする者多しと雖も、然れども宋法を承稟してや、蕭散を加ふるのみ。吳仲圭は大に神氣あり、黃子久は特に風格に妙にして、王叔明は前規を奄有す。而して三家皆縱横の習氣あるも、獨り雲林のみ古淡天然にして米癡の後一人なり。

趙榮祿の枯樹は郭熙、李成に法るも、知らず實に飛白結字中より來るを。文君眉峰の點黛、知らず董雙峨の遠山衲帶より來るを。此を知らば、畫法を省せん。

古人は遠し。曹不興、吳道子は、近世の人のみ、猶復一筆を見ず。況んや顧、陸の徒、其得て之を見るべけんや。是の故に畫を論ずるや、當さに目に見る者を以て準と爲すべし。若し遠く古

人を指して、此れ顧なり、此れ陸なりと曰はゞ、獨り人を欺くのみならず實に自ら欺くなり。故に山水を言へば、則ち當さに李成、范寛を以てすべく、花果は則ち趙昌、王友、花竹翎毛は則ち徐熙、黄筌、崔順之、馬は則ち韓幹、伯時、牛は則ち厲、范の二道士、仙佛は則ち孫太古、神怪は則ち石恪、猫犬は則ち何尊師、周炤。此の數家を得ば已に奇妙と稱せん。士大夫の家、或は其の妙迹を收むる者あらば、すなはち已に千金ならん、何ぞ必ずしも遠く太古の上、耳目に及ばざる所を求めんや。

范寛の山川は渾厚にして河朔の氣象あり。瑞雪、山に滿ち、動もすれば千里の遠きあり。寒林孤秀、挺然として自立し、物態嚴凝す。儼然たる三冬目に在り。

營丘(李成)の山水を作るや、危峰奮起し、蔚然天成、喬木、磴に倚り、下自ら陰を成し、軒暢閒雅、悠然として遠眺すれば、道路深窈、儼として深居の若し。墨を用ふること頗るこまやかに而して皴斲分曉なり。凝坐して之を觀れば雲烟忽ち生じ、澄江萬里、神變萬狀たり。予嘗て一雙幅を見しが、之に對する毎に身の千巖萬壑の中に在るを知らず。趙集賢(趙子昂)の畫は元人の冠冕たりしが、獨り高彦敬を推重すること後生の名宿に事ふるが如し。而して倪迂、黄子久の畫に題して云ふ、「夢に房山(高彦敬)を見る能はずと雖も特に筆思あり」と。則ち高尚書の品は幾ど

吳興(趙子昂)と埒し。高は乃ち一生、米を學びしが及ばざるありて過ぐるなきなり。

張伯雨、元鎮(倪瓚)の畫に題して云ふ、「畫史縱横の習氣なし」と。余の家に六幘あり。又其の自ら獅子圖に題して云ふ、「予、趙君美長と商確して獅子圖を作る、眞に荆、關の遺意を得たり。

王蒙輩の能く夢見する所に非ざるなり」と。其の高く自ら標置することかくの如し。又顧謹中は倪の畫に題して云ふ、「初め董源を以て宗と爲し、晩年に及びて畫益精詣せしが而も書法漫なり」と。蓋し倪迂の書は、はなはだ、工緻なるも晩季には乃ち之を失ひしなり。而して精を畫に聚め、古法を一變して天真幽淡を以て要とせり。要するに亦所謂漸く老い漸く熟する者にして、若し北苑(董源)より基を築かざれば、容易に到らざるのみ。縱横の習氣は即ち黄子久すら未だ斷つ能はず。幽淡の兩言は即ち趙吳興(趙子昂)すら猶迂翁(倪雲林)に遜る。其の胸次自ら別なればなり。

趙大年(趙令穰)の平遠は湖天渺茫の景を寫すに極めて俗ならず。然れども多皴に耐えず。維(王維)を學ぶと云ふと雖も而も維の畫には正に細皴の者あり。乃ち重山疊嶂において之あり。趙は未だ其の法を盡す能はざるなり。

李昭道の一派は趙伯駒、伯駒となり、精工の極また士氣あり。後人々に仿ふ者、其の工は得るも、其の雅を得ず。元の丁野夫、錢舜學の若き是のみ。蓋し五百年にして仇實父(仇英)あり。む

かし文太史（文徵明）はしばしば相推服せり。太史、此の一家の畫において、仇氏に遜らざる能はず。故に賞譽を以て價を増すに非ざるなり。實父が畫を作る時、耳に鼓吹闐餅の聲を聞かず、隔壁釵釧戒の如し。顧ふに其の術また苦に近し。行年五十、方めて此の一派の畫の殊に習ふべからざるを知れり。之を禪定にたとふるに、却を積みてはじめて菩薩を成すものにて、董、巨、米三家が、一超にしてたゞちに如來地に入るべきが如きに非ざるなり。

元季の四大家、浙人、其の三に居る。王叔明は湖州の人、黃子久は衢州の人、吳仲圭は錢唐の人なるが、たゞ倪元鎮のみ無錫の人なり。江山の靈氣、盛衰もと時ありて、國朝の名手僅僅たり。戴進は武進の人、已に浙派の目あり。知らず趙吳興も亦浙人なるを。浙派は日に漸滅に就くが若く、當に祇邪俗頼の者を以て、盡く之を彼の中に系くべからざるなり。

昔人、大年の畫を評して謂ふ、「胸中萬卷の書を得ば更に奇なり」と。又大年、宋室を以て遠遊するを得ず。陵に朝して回る毎に、胸中の丘壑を寫すを得たり。萬里の路を行かず、萬卷の書を讀まずして、畫祖と作らんと欲するも、其得べけんや。此吾が曹に在りて之を勉めん。庸史に望むなし。

畫の道は所謂る宇宙の手に在る者にして、眼前、生機に非ざるなし。故に其の人、往々多くい

のちながし、刻畫細謹、造物の役となる者の如きに至りては、乃ち能くいのちを損ず。蓋し生機なればなり。黃子久、沈石田、文徵仲はみな大壘、仇英は短命、趙吳興はたゞ六十餘。仇と趙と、品格同じからずと雖も皆習者の流にして、畫を以て寄と爲し畫を以て樂みと爲す者に非ざるなり。畫に寄樂するは黃公望始めて此の門庭を開きたり。

餘少くして子久の山水を學び、中ごろまた去りて宋人の畫をなし、も、今ま、一に子久に倣ひ、亦や、之に近し。

日に樹一二株、石山、土坡を臨し、意に隨ひて皴染し、五十の後大成せしが、猶未だ人物、舟車、屋宇を作る能はざれば以て一恨と爲す。喜ぶらくは元鎮が前に在るありて、我が爲に短を護ることを。しからざれば百喙だも解くなきなり。

董北苑瀟湘圖 江貫道江居圖 趙大年夏山圖 黃大癡富春山圖 董北苑征商圖 雲山圖 秋山行旅圖 郭忠恕輞川招隱圖 范寬雪山圖 輞川山居圖 趙子昂洞庭二圖 高山流水圖 李營丘著色山圖 米元章雲山圖 巨然山水圖 李將軍蜀江圖 大李將軍秋江待渡圖 宋元人冊葉十八幅 右俱吾齋、神交の師友にして、如く所ある毎に、携へて以て自ら隨ふ。即ち米家の書畫船、美むに足らざるなり。

自畫に題す

米畫に倣ひて題す

米元章の畫を作るや一に畫家の謬習を正す。其の高く自ら標置するを觀るに、謂ふ一點、吳生（吳道子）が習氣なしと。又云ふ、王維が跡、殆ど刻畫する如し。眞に一笑すべしと。蓋し唐人の畫法、宋に至りて乃ち暢び、米に至りて又一變するのみ。余はもと米畫を學ばず、恐らくは流れに率易に入らんことを、茲に一たび戯れに之に仿ふも、猶敢て董、巨の意を失はず。善く下惠（柳下惠）を學ぶは、頗る當る能はざるなり。

烟江疊嶂圖に倣ふ

右は東坡先生が王晉卿の畫に題するもの。晉卿にまた和歌あり、語特に奇麗なれば、東坡は爲に再び之に和せり。おもふに當時、晉卿は必ず自ら二三本を畫きたるにて、獨り王定國の藏たるのみならずらんも、今皆は傳はらず。またく摹本の人間に在るなし。王元美の自ら題する所の家藏烟江圖と雖も、亦自ら以て詩意を取るなしと爲し、眞に非ざるを知れり。余は嘉禾の項氏よ

り、晉卿の瀛山圖を見たるに、筆法は李營丘に似、而して設色は思訓に似て、畫史の習氣を脱去す。惜むらくは項氏本は火を戒めずして、すでに天上に歸し、晉卿の跡は遂に廣陵散に同じきことを。今爲に其の意を想像して、烟江疊嶂圖を作る。時に秋なり。すなはち秋景を臨す。所謂る「春風搖江天漠漠」等の語においては、存して論ぜず。

米家の雲山に倣ひて題す

董北苑、僧巨然はすべて黒を以て雲氣を流し、吐吞變滅の勢あり。米氏父子は、董、巨の法を宗とし、稍眞を刪る。皴複獨り雲を畫き、なほ李將軍の拘筆を用ふ。伯駒、伯驢の輩の如きは、自から一家を成さんと欲するも得ず。人の棄取にしたがふ故なり。此の圖を爲るに因りて之に及ぶ。

畫に題して徐道寅に贈る

余嘗て見る、勝國の時、房山（高克恭）鴨波（趙子昂）を推して、四家の右に居きしを。而して吳興（子昂）は房山の畫に遇ふ毎に、すなはち題品して勝語を作し、讓伏して置かざる者のごとし。

おもふに近代の賞鑒家、或は然りと謂はざるも、此れ未だ高尚書の眞跡を見ざるに由る。今年六月、吳門に在りて其の巨軸を得たり。雲烟變滅、神氣生動、果して子久、山樵の能く夢に見る所に非ず。道寅と別れをなすに因りて、之を容安草堂に訪ひしに、精素を出して畫を求めしかば畫きて此の圖を成せり。即ち高家の法なり。觀る者房山が規を百の一に意想すべきか。

畫に題して陳眉公に贈る

予の長沙に遊ぶや、往返五千里、江山映發して塵土を蕩滌すと雖も、而も落日空林、長風駭浪、行路の艱を感じ、垂堂の戒を犯す者しばくなり。古は風に出でず雨に出でず、三十年雨具を著へざる者あり。彼何人ぞや。是より先、予の橋李に遊ぶや、爲に岷山讀書小景を圖きしが、ついで人の爲に奪ひ去られぬ。是に及び、重ねて巨然の筆意に仿ひ、以て予が慕を志す。余またまさに衣を倒にして之に従ひ、波臣の老たらざらんとするなり。

董北苑の畫に題す

朔旦 金閨門に至る。客、北苑の畫を以て予に授く。雲烟變滅、草水鬱葱、眞に駭心動目の觀

なり。乃ち知る米氏父子、深く其の意を得たるを。余が家に虎兒(米友仁)の大姚村圖あり、まさにまた相類せり。北苑を師とせずんば、なんぞ能く夢に南宮(米元章)を見んや。

惠崇に倣ひて題す

惠崇、巨然は、皆高僧の畫禪に逃るゝ者なり。惠は艶冶を以てし、巨然は平澹に、おのゝく入る所あり。而して巨然超えたり。惠崇に倣ふに因りて之に及ぶ。

畫に題す

「老鶴楷に眠りて初めて露下り、高梧地に満ちて忽ち霜黄なり」余曾て此の景を作りて、以て仲醇に貽りしが、清臣復び余を強ひて之を爲らしむ。前幅とや、一籌を勝すを覺ゆ。

自畫の小景に題す

趙令穰、伯駒、承旨(趙子昂)の三家を合併すれば、妍と雖も砥ならず。董源、巨然、米芾、高克恭の四家を合併すれば、縦と雖も法あり。兩家の法門は鳥の雙翼の如し。吾將に此に老いと

す。

又

陳道醇、宋刻の書苑を有し、携へて烟雨樓に至る。予、讀次、すなはち畫法を省するあり。爲に癡翁(黃子久)が筆意を寫す。

又

此の畫、余、大癡に倣ふ。余も亦癡絶なきを得んや否や。

巨然が畫を臨して右に題す

上元後三日、友人、巨然が松陰論古圖を以て余に售る者あり。余、之を畫禪室に懸け、合樂して以て同じく觀る者を享し、また燭をとりて二圖を掃し、厥の明、以て客に示す。客曰く「君は巨公の禪に參し一宿して覺るに幾し」と。

三趙の畫に倣ひて右に題す

余の家に趙伯駒の春山讀書圖、趙大年の江鄉清夏圖あり。今年長至、項晦甫より子昂の鵲華秋色卷を貽らる。余兼ねて三趙の筆意を採りて、此の圖を爲る。然れども趙吳興(趙子昂)はすでに二子を兼ねたり。余が學ぶ所、則ち吳興を多しとなすなり。

張清臣が集めし扇面冊に題す

余の畫く所の扇頭小景は無慮百數、皆一時酬應の筆なり。趙子が輩、また仿ひて之を爲る者あり、往々にして眞を亂す。清臣が此の冊、結集多種なるが、皆余が手に出で且つ或は善者の機ありて、吟賞に供するに足れり。人々此の如く眼を具すれば、余、辨ぜざるべし。

鶴林春社圖に題して唐公有に贈る

家に獨鶴あり、忽ち如く所に迷ふ。人失ひ人得たり、已に楚弓に類す。自ら去り自ら來る、梁燕を期するなし。すでに乃ち唐公の籬を干し、また羽人の跡を躡む。翮を整へ駕を返し、吮を引

きて長鳴する、深く別を惜む情に似、聊か歸るを思ふ曲を作る。あゝ雀羅闥若として鷗盟眇然たり。おもふに此の仙禽は眞に吾が徳友なり。驚蓬超忽、なほ支遁の交を聯ね、珠樹玲瓏、浮丘の路を逐はず。合するに冥數ありと云ふと雖も、また遐心なきに由る。此より以て暫く萬里に遊びて等しく雞群に狎れ、守りて千齡を養ひて鳥散に虞りなかるべき者。黄庭の報を志さんとして遂に青田の眞を寫す。すなはち短章をつづり、もつて嘉話を存す。

横雲秋霽圖に題して朱敬韜に與ふ

此は倪高士(倪雲林)の筆に仿ひしなり。雲林の畫法はおほむね樹木は營丘に似、寒林山石は關同を宗としまじふるに北苑を以てし、而して各變局あり。古人を學びて變する能はざれば、すなはち是籬堵間の物にして、之を去ることた遠し。すなはち絶似に由る。横雲山は吾が郡の名勝にして、もと陸士龍(陸機)の故居なり。今、敬韜、草舎を其のふもとに構ふ。敬韜は韻致あり書畫はみな倪高士に類す。故に余は倪の法を用ひ、圖を作りて之に贈る。

小赤壁を書し併せて題す

吾が郡の九峯の間、小赤壁あり。余、このごろ齊安を過ぎて赤壁に至るに、其の高き僅に數仞にして廣さ兩亭を容るゝのみ。吾が郡の赤壁は、乃ち之に三四倍なれども、山靈負屈、爲に嘲を解くことなし。昔は齊安の名人、鹵莽なることは是の如し。よつて赤壁を畫き、一に向來の謬を正す。然れども予は是を以て并せて吾が郡に小崑山あるかを疑ふ。未だ知らず抵鵲山路を去ること幾許ぞ。余をして鑿空に之に遊ぶを得せしめば、或は亦小赤壁の如きは多く遜るを須ひざらん。

雲海三神山圖

李思訓は海外の山を寫し、董源は江南の山を寫し、米元暉は南徐の山を寫し、李唐は中州の山を寫し、馬遠、夏珪は錢塘の山を寫し、趙吳興は雲笈の山を寫し、黄子久は海虞の山を寫す。若しそれ方々壺、蓬閣は、必ず羽人の傳照あらん。余は意を以て之をつくる。未だ似たるや否やを知らず。

江山秋思圖

余、平原の程黃門と使事を以て江南を過ぎ、一日、輿を道上に閣するに、陂陀廻復し、峰巒孤

秀、下に平湖あり、碧澄萬頃、湖の外には、長江、山を呑み、征帆點點として鳥とともに没す。黄門曰く、此何の山ぞやと。余曰く其齊山かと。蓋し「江は秋影を涵す」の句を以て之を測りしが、果して然り。

雲林圖

元季の四大家は獨り倪雲林のみ品格尤も超ゆ。蚤年、董源を學び、晩に乃ち自ら簡淡を以て之をつくれり。余嘗て其の自ら獅子林圖に題せしを見るに、曰く、「此の卷、深く荆、關の遺意を得たり。王蒙諸人の夢にも見る所に非ざるなり」と。其の高く自ら標許すること此の如し。豈に意はんや三百年の後、余が且暮に之に遇ふあらんとは。

濠梁秋思圖

城隅綠水明、秋月海上青山隔暮雲。吾が郡、龍潭の夜泛、身は太白が詩中に在り。柴桑、濠濮間の想語を作さす。

烟江疊嶂圖

雲山は米元章に始まらず。蓋し唐時の王洽が澹墨より、すなはち己に其の意あり。董北苑好みて烟景を作り烟雲變没す。即ち米畫なり。余、米芾が瀟湘白雲圖において墨戲三昧を悟る。故に以て楚山を寫す。

天池石壁圖に題す

畫家は初め古人を以て師と爲し、後には造物を以て師となす。吾、黄子久の天池圖を見たるに皆贗本なりき。昨年、吳中の山に遊び、筇を石壁のふもとに策して、快心洞目し、狂叫して曰く、黄石公と。同游の者測られず。余曰く、今日、吾が師に逢ふのみと。

幽亭秀木圖

幽亭秀木は、古人嘗て圖を繪きしが世に其の意を解する者なし。余爲に註脚を下して曰く、「亭下に俗物なき之を幽と謂ひ、木、臃腫せず、霜を経て紅黄に變する者、之を秀と謂ふ。昌黎（韓

愈)云ふ、茂樹に坐して以て日を終ふと。當に嘉樹に作るべし。即ち四時みな宜し。霜松、雪竹、凝寒と雖も亦自ら對するに堪ふ。」

孤烟遠村圖

山下孤烟遠村、天邊獨樹高原と。右丞が畫道に工なるに非ずんば、此の語を得る能はず。米元暉なほ謂ふ、右丞が畫は、刻畫の如しと。故に余は米家の山を以て、其の詩を寫す。

叔明の畫に倣ひて題す

王叔明が畫は趙文敏の韻中より來る。故にはなはだ其の舅に似たり。又唐諸宋名家に汎濫し、而して董源、王維を以て宗とす。故に其の縱逸多姿なる、又往々にして文敏の規格の外に出づ。若し叔明をして専門に文敏を師とせしめば、未だ必ずしも文敏が爲に掩はれざるなり。叔明が筆意を畫くに因りて之に及ぶ。

畫に題して俞君實に贈る

俞君實將に武夷に遊ばんとし、余に此の圖を索む。もし好事者あらば、能く君實の爲に兩翼を生じ、すなはち以て之を贈らん。畫は余の腕に在り。子瞻が斷臂の如きに至らざるなり。

郭恕先の畫を臨し併せて題す

輞川招隱圖は郭恕先の筆となす。余は之を長安の周生より得しが、今年復び郭河陽の臨本を見るに、すなはち雪景を易えて設色の山と爲す。河陽の筆力はすでに自ら小減せり。いはんや余は野戰の師、何ぞ敢て趙幟を奪ふと言はんや。

寒林遠岫圖を寫し併せて題す

昔人、王右丞の畫を評して以爲へらく、雲峰石色、適として天機より出で、筆思縱横、造化に參すとなすも、余未だ之を見ざるなり。さきに京華に在りしとき、馮開之が、一圖を金陵に得たりと聞き、使をはしらし、書を緘して借觀す。既にして至るや、凡そ三薰三沐し、すなはち長驅して卷を開きしが、歳を経て開之復び還すをこと索めしかば、一に漁郎の桃花源を出で、再び往きて迷誤するが如く、悵惘すること之を久しうす。知らず何の時か重ねて路を得ん。因て想像し

て寒林遠岫圖をつくる。世に右丞が畫を見しものあらば或は河漢に至らざらん。

秋林圖に題す

秋景を畫く、たゞ楚客宋玉のみ最も工なり「寥慄たり遠行して山に登り、水に臨みて時に歸らんとするを送るがごとし」一語の秋に及ぶなし、而も狀き難き景、却て語外に在り。唐人、力を極めて摹寫するも、なほこれ子瞻（蘇東坡）が所謂る、「畫を寫し形似を論じて詩を作り、此詩を必ずする」のみ。韋蘇州（韋應物）が「落葉空山に滿ち、玉右丞が渡頭落日を餘す」は、やゝ響を嗣ぐに足る。秋林を畫くに因りて之に及ぶ。

仲方・雲卿の畫に跋す

傳稱す西蜀の黃筌の畫、衆體の妙を兼ね名は一時に走る。而して徐熙後れて出で水墨畫を作るに、神氣湧くが若く別に生意あり。筌は其の己を軋らんことを恐れてやゝ瑕疵あり。張僧繇の畫に至りては、閻立本以爲へらく、虚しく名を得たりと。もとより知る古今相傾くる、獨り文人のみ爾るのみならず。吾が郡の顧仲方（顧正誼）莫雲卿（莫是龍）の二君はみな山水畫にたくみなり。

仲方が専門の名家なること、蓋しすでに歳年ありしが、雲卿一たび出で、南北頓漸、遂に二宗に分てり。然れども雲卿は仲方が小景に題し、目するに神逸を以てすれば、乃ち仲方は余に向ひて、衽を雲卿が畫に斂めて置かず、其の詩詞を以て相標譽する者の如きあり。俯仰の間、二君の意氣の古人を薄くすべきを見るのみ。

畫に題して朱敬韜に贈る

宋廸侍郎、燕肅尙書、馬和之、米元暉は、皆禮部侍郎にして、此宋の時士大夫の畫を能くする者なり。元の時は唯趙文敏、高彥敬のみ。餘は皆山林に隠れて逸士と稱す。今世傳ふる所、戴（戴文進）沈（沈周）文（文徵明）仇（仇英）頗る勝國に近し。窮して後に工なるは獨り詩道のみならず。予は簪裾の爲に幟を樹つるに意ありしが、山に還りて以來、やゝ爛漫たる天真の丘壑の助を得るに似たる者あり。因て知る、時代の然らしむるにて宋世士大夫の、其の畫を昌ならしむるに似ざること。秋山圖を作るに因りて之を識す。

楚中畫に題して眉公に寄す

武陵公署旁午たり、日に宋人の事を檢し、因て圖を寫し而して系するに其の詩を以てす。武陵は五溪たり。馬伏波(馬援)が所謂五溪何ぞ毒淫なる。鳥飛びて度らず、獸敢て侵さざる者にして、今に至るまで笛聲悲怨せり。計るに余、故園を去ること五千里、頗る少遊をなすを憶ふ。何ぞ能く車の耳を生ずるを聽かんや。此の詩、此の畫、余が情において當るあるなり。

谿山別業の畫に題す

義陽より大石、天池に至るまで、山水の間探兩月を歴閱せしが、すべて未だ曾て畫を作らざりき。今日、目青初めて佳なり。梁谿より客あり、巨然が圖を携へて示しければ、興に乗じて此をつくれり。吳絹水の如きも、恨むらくは手溢りて稱はざるを。

自ら小幀を作り因て題す

倪、黃が合作、予が見し所の三幀、獨り楊太守の家藏を最と爲す。特に爲に之に倣ふ。

畫に題して君策に贈る

余既に君策の爲に畸墅の詩を作りしが復び此を作りて圖を補ふ。然れども畫中の剩水殘山、畸墅の勝を畫く能はざれば之を命じて廬山讀書圖と曰ふと云ふ。

山庄清夏圖に題す

小床、清夏、三商にして起ち、藏する所の法書、名畫を檢し、鑒閱一過、人間清曠の樂を極め、此の圖を作りて以て事を記す。

巨然の筆に倣ひしに題す

元正十九日は、余が攬揆の辰と爲す。海上の客、巨然が松亭雲岫圖を携へて示さる。眞に快心洞目の觀なり。戯れに爲に此に倣ふ。

松岡遠岫、何司理が爲に題す

右丞の田園樂に、「萋々春草秋綠落落長松夏寒」とあり。余、其の圖を採りて此の圖を爲り、士抑兄に贈る。亦聞く士抑、高臥して出でず、人外に超然たる意ありと。右丞が此の語に媿ぢさ

るのみ。

又晴嵐蕭寺に題す

此の圖、仲醇が爲に作りしが、今は士抑の手に入る。仲醇曰く、「弟子之を失ひ先生之を得たり、亦復何をか憾まん」と。余曰く、「陳仲子之を失ひ、何第五これを得たり。亦風流の勝會ならずや」と。因て數語を題して以て歲月を識す。

大癡の畫に倣ひて朱敬輶に贈る

詩は大癡の畫の前に在り、畫は大癡の詩の後に在り。恰も好し百四十年、身を翻し世に出で、怪を作すにはと。此沈啓南が自ら畫に題せしものなるが、余謬ちて之を書す。必ず見て大に之を笑ふ者あらん。壬子十月廿四日。

江山秋思圖

杜樊川(杜牧)の詩は時に畫に入るに堪えたり。「南陵水面漫に悠々、風緊しく雲繁く秋を變ぜん

とす、正に是客心孤迥の處、誰が家の紅袖か高樓に倚る」と。陸瑾、趙千里皆之を圖く。余の家に吳興(趙子昂)の小冊あり、故に此に臨す。

畫に題して何士抑に贈る

士抑兄は毎に余の爲に畫を作らざるを望むも、得る所の余の幅はすなはち贗なる者なり。余、行役を以て久しく此の道を廢したれば、笥中舊時點染せし三尺の山を以て武夷より之を寄す。

舊畫を評す

曹雲西の畫に題す

吾が郷の畫家は元の時に曹雲西、張以文、張子正の諸人あり。皆名筆なるも、曹を最も高しと爲し、黃子久、倪元鎮と頡頏してならびに重んぜらる。曹はもと馮勤、郭熙を師とす。此の幀は則ち巨然に倣ひ、尤も平時の作に異り、此を藏して以て故郷前輩の風流を存す。以文の畫はすなはちはなはだ大癡に肖たる者あり。予は之を長安に得ぬ。今こゝに合す。乃ち雙美なり。

沈石田の倪に臨せし畫に題す

石田先生は勝國諸賢の名蹟において摹寫せざるなし。またはなはだ相似、或は其の上に出づ。獨り倪迂が一種の淡墨は、自ら學び難しと謂ふ。蓋し先生の老筆密思、元鎮の淡の若く、疎の若き者において趣を異にすれども、獨り此の幀は蕭散秀潤、最も眞に逼れりと爲す。亦平生得意の筆なり。

沈啓南が畫冊に題す

寫生と山水と、兼ねて長ずること能はざれど、惟黃要叔(黄筌)のみは之を能くす。余が藏する所の勸書圖は李昇を學び、金盤鸚鵡は周昉を學び、みな奪藍の手あり。我が朝は即ち沈啓南一人のみ。此の冊は寫生更に勝り山水まゝ本色あり。然れども皆眞虎なり。

孫漢陽の畫一石巻に題す

唐の李德裕は天下の怪石を採りて之を平原別墅に聚め、後昆に遺誠して曰く、「平原の石を以て

輕々しく人にあたふる者あらば、佳子弟に非ざるなり」と。内なる一の醒酒石は、尤も之を珍愛し、酔へば則ちこれに踞す。今、漢陽の寶七石、少しも遜らざるに似たれども、しかも石疑はくはやゝ勝らん。唐詩に云ふ、「寒姿數片奇突兀、曾て秋江秋水の骨となる」と。又云ふ、「雪盡きて身還瘦せ、雲生じて勢ひ孤ならず」と。これ頗る以て石を狀するに足る。

顧仲方の山水冊に題す

米元章、畫を論じて曰く、「紙は千年にして神去り、絹は八百年にして神去る」と。篤論に非ざるなり。神は猶ほ火のごとし、火に新故なし、神何ぞ去來せん。おほむね世近ければ則ち形に托して以て傳はり、世遠ければ則ち聲に托して以て傳はるのみ。曹弗興、衛協の輩は妙迹永く絶え、獨り名のみ稱せられて今に至れり。則ち千載以上、耳にして之を目にせし者あり。薛稷の鶴、曹霸の馬、王宰の山水、もと國能を擅にせり。即ち國能を擅にせざるも、而も甫(杜甫)が詩歌の在るありて自ら千古に足る。紙素の壽、金石よりも壽しと謂ふと雖も可なり。神安ぞ去るを得んや。君の畫は初め馬文壁を學び、後に黃子久、王叔明、倪元鎮、吳仲圭に出入して肖似せざるなし。而して世尤も其の子久を爲す者を好む。

周山人の畫に題す

余少くして繪業を喜び、皆元の四大家に従ひて縁を結び、後に長安に入りて南北宋、五代以前の諸家と血戰すること正に禪僧作宣律師の如し。此の冊は構李の周逸之が勒する所にして、閣帖と共に傳へんと欲す。其の志たるや良に苦し。解脱禪は固より此を藉るなし。然れども學びて古人の門弟蹊逕を望見せんと欲せば、これ亦河を渡る寶筏なり。珍重珍重。

趙文敏が畫に題す

子昂嘗て創爲して即ち工なる者あり。畫卷に題して曰へるあり、「予嘗て馬を畫きしが未だ嘗て羊を畫かざりき。子中、余に強ひて此を爲らしむ、知らず合作するや否や」と。此の卷、特に精妙と爲す。故に氣韻は必ず生知に在りとは虚に非ざるを知る。

畫牡丹に題す

花品、衆香國中より來り、風に臨みて獨り笑ひ、姚、魏をして氣短ならしむるに足る。すなは

ち群芳競ひ妬むあるも、其亦自ら絶えん。

伯玉が畫冊に題す

勝國の時、畫道獨り越中に盛なり。趙吳興、黃鶴山樵、吳仲圭、黃子久の若き、其の尤も卓然たる者、今に至るまですなはち浙畫の目あり、山川に鈍滯する少からず。爾來またく矯めて吳裝を事とするは、亦文(文徵明)沈(沈周)の贗馥のみ。伯玉の此の冊は、行筆破墨、種種自ら超ゆ。刻俗の雅と謂ふべし。故に當に家に名あるべし。伯玉は寒士なれど、項氏兄弟に従ひて遊び、多く項子京が藏する所の名畫を見て遂に爾く得るあり。吾が友某某、特に之を好む。

濟川圖卷の後に題す

邑侯濟川沈公、循良を以つて江南の冠冕たり、鳴琴の暇、好みて文學知名の士を擧進す。是において某某、感徳殉知の意を以て郡中の名手に屬し、共に濟川圖を繪きて侯に贈る。余之を轉觀するに、唐人の賦する所、「南川杭稼花縣を侵し、西嶺の雲霞色堂に滿つ」といふ者に近し。而して青雀の波を凌ぎて海鷗と相狎るゝは、則ち清溪の政之に似たり。圖の濟川と名くるはこゝを

以てなり。余の若きは當に侯の召に應ずる時において、長風に乗り萬里の巨浪を破る語を寫して、
濟川の境とすべきなり。某之を志す。

孫漢陽の卷に題す

右、米元章が一帖を録す。此を觀れば米薛相易ふる事の誠に之あるを知る。鐵圍叢譚は、或は
訛を傳ふ。然れども余はまた宋光祿の家において、米元章の畫く所の研山を得しが、雲根雪浪、
直ちに混沌をうがてり。吾が郷の雪居先生、又圖きて卷と爲す、元章と爽を競ふべし。余將に米
畫を以て之に贈らんとす。たゞ東臯草堂前の一片の煙霞に易えんと欲す。便ち意足るなり。

漁樂圖に題す

宋時の名手、巨然、李、范諸公の如き、皆漁樂圖あり、これ煙波釣徒張志和に起る。蓋し顏魯
公は志和に詩を贈り、而して志和自ら畫を爲りしが、此唐の勝事なれば後人之を蒙し、多く意を
漁隱に寓せしのみ。元季尤も多し。蓋し四大家は皆江南葭菼の間に在りて漁釣の趣を習知せし故
なり。

南陵水面の詩意を畫きしに題す

江南の顧大中、嘗て南陵逃捕舫子の上において、杜樊川の詩意を畫く。時に大中未だ名を知ら
れず、人、加重するなし。後、過客の爲に竊み去られしかば乃ち共に嘆惋せり。予曾て文徵明が
此の詩意を畫きしを見たるに、題して曰く「吾家に趙榮祿が趙伯駒に倣ひし小幀畫ありて妙絶な
り。まゝ一たび之を摹し、殊に似ざるを愧づ」と。予また徵仲の筆を見ざるが、二趙を去ること
を知る。

畫に題す

七夕、舟を吳園に泊す。張慕江、畫を以て余に售る。梅花道人の大軸あり、巨然に倣ひ、水墨
淋漓、雲煙吞吐、巨然と復甲乙あらず。又高克恭の雲山秋霽と、謝伯誠の董源を學びし廬山觀瀑
圖と、皆奇筆なり。

莫秋水の畫に題す

莫廷韓、宋光祿の爲に此の圖を作ること巳卯の秋に在り。時に余同じく觀て、咄咄稱贊せしが、今已に二十年の事なり。仲文これを受し護惜することに甚し。蘇より松を過ぐるや、周檢襲藏備に至り轉じて它氏の手に入るゝに忍びざる、亦交誼なり。

朱雲來の畫に題す

敬輅、米虎兒(米元暉)が墨戲を作すや、高尚書(高克恭)に減ぜず。此を閱して吾が硯を焚かんと欲す。

雲林の畫に題す

雲林の畫、江東の人、有無を以て清俗を論ず。余が藏する所の秋林圖に詩あり、云ふ「雲開けて山高きを見、木落ちて風の勁きを知る。亭下人に逢はず、夕陽秋影に澹たり」と、其韻致の超絶、當に子久、山樵が上に在るべし。

畫を論ず

元の時、畫道最も盛なりしが、惟、董、巨のみ獨り行はれたり、此の外皆郭熙を宗とし、其名ある者、曹雲西、唐子華、姚彥卿、朱澤民輩出せしが、其の十、黄、倪の一に當る能はず。蓋し風尙然らしめ、亦趙文敏の提醒によりて、品格眼目皆正しきのみ、余は元季四家の畫を好まざる者にあらざるも、直に其の源委に溯りて之を董、巨に歸せしこと、また頗る詩人の爲めに眼を換へしなり、丁南羽以て畫道の一變と爲す。

藝苑卮言 (附錄)

王世貞 (明)

畫力は五百年なるべし、八百年に至りて神去り、千年にして絶ゆ。書力は八百年なるべし、千年に至りて神去り、千二百年にして絶ゆ。たゞ文章に於ては、萬古を更てとこしへに新なり。書畫は臨すべく摹すべきも文は臨摹に至れば則ち醜なり。書畫には體あり、文には體なし。書畫には用なく、文には用あり。體ある故に見易く、用ある故に窮りなし。

書道成りて後、揮灑する時は、心に入ること秒忽に過ぎず、畫學成りて後、盤礴する時は、心に入ること絲毫なる能はざるも、詩文總て成就するに至り、期に臨みて結撰するときは、必ず透りて心に入ること方寸。此を以て、書畫の士多く長年なること蓋し故あるを知る。年、桑榆に在らば、まさに須らく頼りて以て寂寞を文るべし。取りて生を資けず、聊か用ひて意に適す。既に就る頃、亦自ら斐然たらん。乃ち知る歐九は我を欺く者に非ざるを。少くして學びて成るなく、老いて才盡く。此を以て自ら欺するのみ。

書法も時代あり。魏晉は尙し、六朝の魏晉に及ばざる、猶宋元の六朝と唐とに及ばざるがごとし。畫は則ち然らず。魏晉の若き、六朝の若き、唐の若き、宋の若き、元の若き、人物、山水、花鳥、各自に佛と成り祖と作り、時代を以て限と爲さず。

張彦遠の歴代名畫記は詳備なりと謂ふべし。諸葛武侯父子、右軍(王羲之)大令(王獻之)世の知らざる所、功業、書名を以て之を掩ふ母らんや。彦遠云ふ、「上古の畫は、跡簡に、意澹にして雅正なり。顧、陸の流是なり。中古の畫は細密精緻にして臻麗なり。展、鄭の流是なり。近代の畫は燦爛にして備はらんことを求め、今人の畫は錯亂して旨なし、衆工の迹是なり」と。又云ふ、「顧、陸以降畫跡存する鮮く、之を悉言し難し。たゞ吳道玄の跡を觀るに、六法俱に全く萬象必ず盡し、神人、手を假し、造化を窮極すと謂ふべし」と。推尊すること至れりと謂ふべし。然れども宣和畫譜に、道玄の畫を載すること極めて多きも、皆神佛の像にして士女は十の一二に過ぎず、山水は遂に響を絶つ。

人物は形模を以て先と爲し、氣韻、其の表に超え、山水は氣韻を以て主と爲す。形模其の中に寓すればすなはち合作と爲る。若し形似に生氣なく、神彩に格を脱するに至るは皆病なり。

畫家稱す、「顧、陸、張、吳は、猶書の鍾、張、羲、獻あるがごとし。後又曹、衛、顧、陸と稱

するは、則ち書の鍾、皇、張、索のみ」と。按ずるに其の初、議亦盡きず。謝赫の畫品は、一品五人を以てす。而して陸探微、第一に居る。其の語に曰く、「理を窮め性を盡し、事、言象を絶ち、前を包ね後を孕み、古今に獨立す。また激揚して能く稱賛する所に非ず。たゞ價重の極か。上々品の外、它の寄言なし。故に第一等に屈標す」と。曹不興は第二なり。曰く、「不興の跡は殆んどまた傳はるなく、唯祕閣の内の一龍のみ、其の風骨を覩るに、名豈に虚しく成らんや」と。衛協は第三なり。曰く、「古畫の略、協に至りて始めて精しく、六法のうち、殆んど兼善と爲す。形跡を該備せずと雖も、頗る壯氣を得て群雄を凌跨す、曠代の絶筆なり」と。顧愷之に至りては、則ち之を三品の二に列して曰く「骨體精微、筆を妄に下さざれども、但跡は意に速ばず、聲、其の實に過ぐ」と。李嗣眞の續畫品には、則ち陸探微を以て上品中の第一に居き、張僧繇は上品下の第二、衛協は上品上の第一、曹不興は上品上の第四、顧愷之は上品上の第五、而して進む所、又多く曉るべからず。姚最は齊、陳以下の畫人を列して、張僧繇を第七に居く。然れども姚又云ふ、「顧公の美は獨り往策に擅なり。荀、衛、曹、張、之に方ぶれば蔑然たり。日月を負ふが如く、神明を得るに似、玉を抱きて徒に勤めたるを慨き、曲高くして唱を絶つを悲しむ。庭を分ち禮を抗する、未だ其の人を見ず。謝云ふ、聲、其の實を過ぐと。於邑を爲すべし」と。張懷瓘

云ふ、「顧公は運思精微にして、襟靈測り莫し。迹を翰墨に寄すと雖も其の神氣は飄然として烟霄の上に在り、圖畫の間を以て求むべからず。人を象るの美は、張は其の肉を得、陸は其の骨を得、顧は其の神を得て神妙なること方なし、顧を以て最と爲す。之を書に喩ふれば、則ち顧、陸は之を鍾、張に比し、僧繇は之を逸少に比し、俱に古今の獨絶と爲す。豈に品第を以て拘はるべけんや。謝氏の顧を黜けたる、未だ定鑒と爲さず」と。張彦遠は則ち云ふ、「顧愷之の迹は、緊勁聯綿、循環起忽、調格逸易、風移電疾。意は筆先に存し、筆盡きて意在り、神氣を全くする所以なり。陸探微は精利潤媚、新奇妙絶、名は宋代に高く時に等倫なし。張僧繇は點曳斫拂、衛夫人の筆陣圖に依り、一點一畫、別に是一功にして、鈎戟利劍森々然たり。吳道玄は古今獨歩にして、前に顧、陸を見ず後に來者なく、人假天造、英靈窮まらず。衆は皆盼際に密なれども、我は則ち其の點畫を離披し、衆は皆象似に謹しめども、我は則ち其の凡俗を脱落す、弧を彎き双を挺き、柱を直くし梁を構ふるに、界筆、直尺を假らずして、風鬚雲鬢、數尺飛動し、毛根は肉より出で、力の健なること餘あり。數仞の畫、或は臂より起り、或は足より先にし、巨壯詭恠膚脈連結すること、僧繇に過ぎたり」と。此に由りて之を言へば、典型は當に虎頭（顧愷之）を首とすべく、精神はもと道子を推し、衛協は調古く、探微は功新なり。四聖と謂ふべし。弗與が跡なほ隱顯し、

僧繇等まさに殆ど庶し。之を書に比すれば殆どなほ皇索の倫のごときのみ。

謝赫は愷之を第して三品の二に列し、李嗣眞は愷之を第して中品上の第五に列し、姚最は齊、陳以下の人を列して、張僧繇を第七、朱景玄は唐朝の名畫を録して曹霸を遺れ、二王の後に從ふを得ず、劉道醇は畫繼を著して、巨然僅に能品に居り、五代名畫補遺を著して、韓求、李祝、張圖、朱瑤の人物は並びて神品に居る。宋の王瓘、王翬、孫夢卿、趙光輔、高益、武宗元も亦之の如し。人もとより幸あり不幸あるが其の久しきに頼りて而して後に定まるのみ。王瓘は一時賞譽騰蹕して、吳生を繼ぐべきに似たれども、而も遺跡永く絶ゆ。まことに浩歎すべし。

氣象蕭疎、烟林清曠、毫鋒穎脫、墨法精微なるは、營丘（李成）の製なり。石體堅凝、雜木豐茂、臺閣古雅、人物幽閒なるは、關氏（關同）の風なり。峯巒渾厚、勢狀雄強、槍筆俱に勻しく、人屋俱に質なるは范氏の作なりと。此の語亦大略を得るに似たり。

南齊の謝赫曰く「畫に六法あり、一に曰く、氣韻生動、二に曰く、骨法用筆、三に曰く、應物寫形、四に曰く、隨類賦彩、五に曰く、經營位置、六に曰く、傳模移寫、骨法以下の五端は學びて能くすべきも、氣韻は必ず生知に在り」と。宋の劉道醇曰く、「畫に六要六長あり、氣韻に力を兼ぬること一要なり。格制俱に老ゆること二要なり。異を變じ理に合すること三要なり。彩繪の

澤あること四要なり。去來自然なること五要なり。師學、短を舍つること六要なり。麤鹵にして筆を求むること一長なり。僻澁にして才を求むること二長なり。細巧にして力を求むること三長なり。狂恠にして理を求むること四長なり。墨無くして染を求むること五長なり。平畫にして長を求むること六長なり。既に此の六要を明にし、又彼の六長を審にせば、自然に知悟せん」と。宋の郭若虛曰く「畫に三病あり、皆用筆に繋る。一に曰く板、腕弱く筆癡にして、全く取與を虧き、物を狀く平扁にして、圓渾なる能はざるを謂ふ。二に曰く刻、筆を運して中疑ひ、心手相戻り、畫に向ふ際、妄に圭角を生ずるを謂ふ。三に曰く詰、行かんと欲して行かず、當に散すべきに散ぜず、物の滯滞して流暢なる能はざるに似たるを謂ふ。未だ三病を窮めず、徒に一隅を擧ぐ。克く心を用ふる鮮ければ、必ず睡眊を煩はす」と。元の饒自然曰く「畫に十二忌あり、一に曰く、布置拍密、二に曰く、遠近分れず、三に曰く、山に氣脈なし、四に曰く、水に源流なし、五に曰く、境に夷險なし、六に曰く、路に出入なし、七に曰く、石は一面に止まる、八に曰く、樹は四枝を少く、九に曰く、人物僵儻、十に曰く、樓閣錯雜、十一に曰く、滄淡宜しきを失ふ、十二に曰く、點染に法なし。若し此の十二病悉く除かば、六法冀ふべきに庶し。」

語に曰く「畫石は飛白の如く、木は籀の如し」と。又云ふ「竹幹を畫くこと篆の如く、枝は草

の如く、葉は眞の如く、節は棘の如し」と。郭熙の唐棣樹、文與可の竹、溫日觀の葡萄、皆草法中より得來る。此畫と書と通ずる者なり。書體に至りては、篆隸は鶴頭、虎爪、倒薤、偃波、龍鳳、鱗龜、魚蟲、雲鳥、鵲鶴、牛鼠、猴雞、犬兔、科斗の屬の如く、法は錐にて沙を畫し、印にて泥に印し、折釵股、屋漏痕、高峯の墜石、百歳の枯藤、驚蛇の草に入るが如く、比擬は龍跳り虎臥し、海に戯れ天に遊び、美女、仙人、霞收まりて月上るが如し。韓退之が「高閑上人を送る序」、李陽氷が「李大夫に上る書」を覽るに及びて、則ち書は尤も畫と通ずる者なり。

張彦遠は、顧愷之、張僧繇の功臣なり。劉道醇、郭若虛は、則ち李成、范寬、關同の功臣なり。米元章、沈括は、則ち董源、巨然の功臣なり。道子は少しく元章に損じ、二李は微しく若虛に疵す。おのゝ知る所を算ぶと雖も意味なきにあらず。

人物は、顧、陸、展、鄭より、以て僧繇、道玄に至る一變なり。山水は大小李にて一變なり。荆、關、董、巨、又一變なり。李成、范寬、又一變なり。劉、李、馬、夏、又一變なり。大癡、黃鶴、又一變なり。趙子昂は宋に近き人にして人物を勝れりと爲す。沈啓南は元に近き人にして山水を尤なりと爲す。二子の古に於けるや體を具へて微なりと謂ふべし。大小米、高彦敬は、簡略を以て韻を取り、倪瓚は雅弱を以て姿を取る。宜しく逸品に登すべきも、未だ是當家ならず。

花鳥は徐熙を以て神と爲し、黃筌を妙と爲す。居采これに次ぎ、宣和帝又之に次ぐ。沈啓南の淺色水墨は實に徐熙より出で而して更に簡淡を加へ、神彩新なるが若し。道復に至りて、漸く色なし。

彦遠云ふ「古の嬾は臂織くして胸束ぬ」と。則ち周昉より後すこしく變ず。古の馬は喙尖くして腹細しと。則ち韓幹より後すこしく變ず。又云ふ「いにしへ山水を畫くに或は水、汎ぶべからず、或は人、山よりも大なるが、専ら其の長ずる所をあらはすに在りて、俗變を守らず」と。又沈存中云ふ「書畫の妙は、當に神を以て會すべく、形器を以て求むべきこと難し。家に摩詰の雪中芭蕉あり。これ乃ち心に得、手に應じ、意到りてすなはち成る。故に理に造り神に入り、適として天意を得たり」と。謝赫云ふ「衛協の畫は形跡を該備せずと雖も而も氣韻あり、群雄を凌跨す、曠代の絶筆なり」と。合せて之を觀るときは則ち吾が郡の陸、謝を營詆する者は、亦未だ其の心を服するに足らず。

王摩詰は霓裳按樂圖を閲して、其の第三疊第一拍たるを知り、沈存中は相國寺の畫を閲して高益奏樂圖に、琵琶の下絃を撥するは誤に非ずとし、吳正肅は畫猫の黒睛の綿の如く、丹花披哆にして、色燥くに因りて、其の正午を辨じ、宣和帝は畫孔雀を致へ、其の右脚先づ上るを摘みて誤

と爲す。是畫理と雖も而も畫趣に關するなし。

彦遠又云ふ「吳道子が仲由を畫くや、すなはち木劍を戴き、閻令公が昭君を畫くや、已に幃帽かぼうを著くるも、殊に知らず木劍は晉代に創まり、幃帽は國朝に興ることを。これを擧げて凡例すれば亦畫の一病なり。且つ幅巾の如きは、漢魏より傳はり羃離びきりは齊隋より起り、幃頭ぼくとうは周朝に始まり、巾子は武徳に創まる、胡服、靴衫くわさん、豈にたやすく古像に施すべけんや。衣冠、組綬、長く今人に用ふべからず。芒屨ぼうけうは塞北の宜しき所に非ず、牛車は嶺南の有る所に非ず。古今の物を詳辨し、土風のよろしきを商較し、事を指し形を繪かば時代驗すべし。其の或は長く南朝に生れて北朝の人物を見ず、塞北に習熟して江南の山川を識らず、江東に遊處して京洛の盛んなるを知らざる、此則ち繪畫の病に非ずや」と。按ずるに此の段の語、大に意あり。畫く者知らざるべからず。

郭若虛これに因りて云ふ「漢魏以前、始めて幅巾を戴き、晉宋の世、はじめて羃離を用ふ。後周は三尺の阜絹ふつじんを以て、後に向ひ髪を幃ぼくして、折上巾と名け、通じて之を幃頭と謂ひしが、武帝の時、裁ちて四角と成せり。後魏、隋朝の貴臣は、黃綾袍、烏紗帽、九環帶、六合靴。次は桐木黒漆を用ひて巾子と爲し、幃頭内につゝみ、前に二脚を繋ぎうしろに二脚を垂れ、貴賤之を服す。

唐の太宗、嘗て翼善冠を服し、貴臣は進賢冠を服す。則天の朝に至り、絲葛を以て幃頭巾子と爲し以て百官に賜ふ。開元の間、始めて易ふるに羅を以てし、又別に供奉官、内臣に圓頭宮様巾子を賜ひ、唐末は漆紗を用ひて之をつゝむ、乃ち今の幃頭なり。三代は皆欄衫を衣る。秦の始皇の時には紫緋紫袍を以て三等服と爲し、庶人は白を以てす。唐の高宗以後、百官は紫服しき金玉帶、深淺緋服しんせん金帶、綠服りよく銀帶、青服せいふく銀石帶、庶人は黃銅鐵帶、五品以上は魚を佩び後に龜と爲し、尋で復び魚と爲れり。又文官は一品以下、手中、算袋、刀子、礪石を帶ぶ。睿宗えいそうの朝、武官の五品以上は七事跣てふてふを帶び、開元の初、之を罷む。晉の處士馮翼ふうよく、布の大袖を衣、縁にめぐらすに阜を以てし、下に欄を加へ、前に二長帶をつなぐ。隋、唐の朝野之を服せり。三代以前は皆跣足なりしが、後人始めて木屐もくきを服せり。伊尹は草履を爲り、秦世は絲革を參用す。韓かんは唐の代宗の朝、凡そ宮人、左右に在る者は紅錦鞞こうきん鞞」と。此郭若虛が畫衣冠の制を異にするを論ずるなり。彼の三代以前、皆跣足なりと謂ふは非なり。冠履の制は軒轅けんえんより詳なり、何をか跣と言ふや。古へ、冠して幃ぼくせず、漢元の壯髮、幃を以て之を蒙り、王莽の頂禿いたきなる、始めて其の屋を加へ、袁紹始めて縑巾を製し、魏武わいぶ(曹操)裁ちて帛袂はくけいとなし、林宗りんそう(郭泰)角を折り、文若ぶんじやく(荀彧)岐を成す。南渡の永明、灑を改めて帽と爲す。白恰練布はくかれんは、王丞相より盛にして、以後は小

冠、博衣、晉末にわたる。晉氏の放曠なる、屐を賓筵に施せり。然れども露卯陰卯の異あり。婦人の髻紒は一ならず。元康以後盛に五兵を以て飾と爲し、かば、髪を束ぬること既に緩くして額に被るに至れり。余は卮言別錄二卷に於て詳に之を著す。若虛が論ずる所の如きは極めて挂漏多し。畫家察せざるべからず。今世、人主を畫くには、即ち翼善冠、黃袍、玉束帶にして、撻尾なく、涓人は則ち今の衫帽、貴官は漢冠を戴き、餘の士大夫は唐巾を戴き、また時代を論ぜざるなり。豈に直漢光（光武帝）東封に、觀る者に僧あり、梁武の郊祀に、從官の馬に乗るのみならんや。

凡そ三代、兩漢は皆馬車を用ひ、魏晉より梁陳に至るまでは皆牛車を用ひ、元魏の君臣は馬及び牛車に乗る者あり。唐は人主、妃后と雖も馬に乗るに非ざれば即ち步輦し、郊祀より外は車に乗らず。

按ずるに張彥遠が畫を論ずるに曰く「自然に失ひて後に神。神に失ひて後に妙。妙に失ひて後に精。精の病たるや、謹細を成す。自然を上品の上と爲し、神を上品の中と爲し、妙を上品の下と爲し、精を中品の上と爲し、謹細を中品の中と爲す」と、宋の鄧椿云ふ「昔より鑒賞家、品を分つこと三あり、曰く神、曰く妙、曰く能と。獨り唐の朱景眞は唐賢畫錄を撰し、三品の外、更

に逸品を増す。其の後、王休復は益州名畫記を作るや、乃ち逸を以て先と爲し、而して神、妙、能、之に次ぐ。景眞は、逸格は常法に拘はらず、用ひて賢愚を表すと云ふと雖も、然れども逸の高き、豈に三品の末に附するを得ん。未だ若かず復休が首として之を推すの當れると爲すに。其の意亦彥遠を祖述するに似たり。愚竊に謂へらく、彥遠の論は大約奇を好み未だ理に循はず」と。夫畫は神に至りて而して能事盡く、豈に自然ならざる者あらんや。若し毫髪も自然ならざるあらば則ち神に非ず。逸品に至りては、自ら應に三品の外に置くべし。豈に神品の表に居くべけんや但當に妙、能と優劣を議すべからざるのみ。宋の大小米、元の高、倪の雲山、眉山（蘇軾）の竹石は以て逸品に當つるに足る。

郭若虛云へるあり、「佛道、人物、士女、牛馬、近きは古に及ばず。山水、林石、花竹、禽魚、古へは近に及ばず。何を以て之を明かにする。陸探微、張僧繇、吳道玄及び閻立德、立本は皆純重雅正にして、性たる、天然に出づ。吳生の作は萬世の法たり。號して畫聖と曰ふ。張萱、周昉、韓幹、戴嵩は氣韻骨法、皆意表に出づ。後の學者、終に到る能はず。故に曰く、近は古に及ばずと。李成、關同、范寬、董源が跡、徐熙、黃荃、居采が蹤の如きは、前に師資を藉らず、後に復び踵を繼ぐなき者。借し二季、三王の輩をして復起たしめ、邊鸞、陳庶の倫をして再び生れしむ

るも、また將何を以て手を其の間に措かんや。故に曰く古は近に及ばず」と。此の語亦定論なり。然れども人物は吳生を以て聖と爲し、山水は營丘を以て神と爲す。此に由りて之を推せば、則ち仲宋は當に伯時を推すべく、元初は必ず子昂に讓る。蓋し二君敢て吳を凌ぎ李を踏まずと雖も、而も能く二家の長を兼攝する故なり。

吳、李以前の畫家は實にして近俗、荆關以後の畫家は、雅にして太虛。今雅道尙存して、實徳は即ち病む。

夏文彦が畫の三品を論ずるに曰く「氣韻の生動は天成に出で、人其の巧を窺ふなき者、之を神品と謂ふ。筆墨超絶、傳染宜しきを得、意趣餘ある者、之を妙品と謂ふ。其の形似を得而して規矩を失はざる者、之を能品と謂ふ」と。然らば則ち神品は、即ち自然。

文彦又云ふ「唐及び五代は絹素粗厚く、宋絹は輕細に、御題畫は眞僞相雜はる」と。余之を檢するに、合はざる者なし。

沈存中云ふ、董北苑は多く江南の眞山を寫して奇峭を爲さず。僧巨然是源が法を祖述して、皆妙理に臻る。大抵、源及び巨然の畫は、筆皆遠觀に宜し。其の用筆甚だ草々にして、近く之を視ればほとんど物象に類せざれども、遠く觀れば則ち景物粲然、幽情遠思、異境を觀るが如し。余

は二君の眞跡に於て多く觀る能はざるも、沈啓南が筆を閱する毎に、竊に其の妙を思ふなり。此の老、たゞ隆準のみならず。亦時々、藍より出づ。

畫家が大小李將軍と稱するは昭道、思訓を謂ふなり。畫格本大李を重するも、而も舉世たゞ小李將軍あるを知るのみにして其の説を得ざりしが、吾嘗て徐封が所に於て、小李が海天落照圖を見たるに眞に是妙品なりき。後、一たび權門に辱められ、再び内府に入りしが、聞く已に燬に就くと。大抵五代以前は山を畫く者少し。二李が輩は精工を極むと雖も、すこしく板細に傷らる。

右丞(王維)始めて能く景外の趣を發し而も猶未だ盡きざりしが、關同、董源、巨然が輩に至りて、はじめて眞趣を以て之を出し、氣概雄遠、墨暈神奇、李營丘成に至りて絶えぬ。營丘には雅癖あり、畫の世に存する者絶だ少なり。范寬之に繼ぎ、奔突として勝をひとしくす。此の外、高克明、郭熙が輩の如きは亦自ら卓然たり。南渡以前は獨り李公麟伯時を重んず。伯時の白描人物は、遠く顧、吳を師とし、牛馬は、韓、戴を斟酌し、王、李に出入す。董、李が未だ及ばざる所に似たり。

あまねく古人の論を綜ぶるときは、則ち畫家は顧、陸を以て聖と爲し、而して道子を以て神と爲す。吳生既に起れば、則ち前に張、閻あり後に昉、幹あるも、皆當に舍を辟くべし。然れども

昭代を以て之を格するに、數子にして在れば、顧、陸は連城たるを失はざれども、吳生は少しく其の價劣る。何となれば、巨壁、高障は利字には宜しきも、素室の蓄へには非ざるなり。胡神、祇像、丈を徑り尋を累ぬる、雅士の喜ぶ所に非ざるなり。怒目掀唇、焮火奔雷は方内の賞する所に非ざるなり。即ち權、霸、求、祝、異を圖く徒、畫史流褒して、以て業を吳が門に受くと爲しが、當稱殆んど庶し。今、たゞ遺跡の尋ぬべきなきのみならず、之を鑒藏の家に詢ふに、秋風の耳を過ぐるが若く、ついに相入らず。そもくひとり此のみならず、摩詰、思訓をして、題を去りて跡を存せしめば、恐らくは叔明(王蒙)子久(黄公望)に勝る能はざらん。中正(苑寛)克明をして款を減して値を論ぜしめば、必ず當に伯時、吳興が下に在るべし。此習耳、好を成し、習好、風を成すと雖も、其の繇る所を探れば、未だ盡く非とすべからず。第未だ孔聖の集大成して金聲玉振する者あらざるのみ。元人の擅熾、啓南(沈周)の振聲、文氏(文徵明)の多助より俗を去る者は、別に鑒賞を爲し、易を喜ぶ者は、争ひて點綴を務め、六法漸く湮む。浩歎を爲すべし。

唐の人馬は韓幹固より灼々たるも、人は周昉に如かず、馬は曹霸、陳閔に如かざるなり。宋の花鳥最も著るゝ者は黄荃父子なるも、然れども遠く徐熙に如かざるなり。虎の最も著るゝ者は包鼎なるも、然れども遠く趙邈卓には如かざるなり。當時に在りて已に定評あり、後人偶知らざるのみ。幹が晩年の馬の如きは、定めて閔、霸が下に在らず。

二つの名ありて一人の者は、范中正、范寛なり。中正は性、落拓迂緩、人或は范寛を以て之を目せしかば後遂に用ひて以て題識せり。宣和祕殿に收むる所にも亦之あり。然れども妄者は知らず、無款の古畫を以て、題して巨范寛進むと曰ひ、其の敢て范寛を以て進御せざるを知らざるなり。一款にして二人の者あり、鍾隱なり。隱は天台の人にして郭乾暉を師とす。其の鷺鳥、荆棘に於けるや尤も妙なり。李後主煜の蓄ふ所極めて多し。然れども煜が作る所の畫は亦題して鍾隱と曰へり。蓋し之を鍾山隱者に托して以て自ら寓せしなり。米元章は鍾隱あるを知らずして、凡そ鷺鳥、荆棘を畫くは皆之を後主に屬す。尤も笑ふべきなり。

唐の王洽の潑墨は醉ふ毎に先づ墨藩を以て圖障の上に潑す。乃ち其の形像に因りて、山石林泉、雲霞卷舒、自然天成、倏たること造化の若し。張璪の畫は松石山水、手を以て雙管を握り、一は生枝を爲り一は枯幹を爲り、四時の行は、筆を驅りて之を得たり。畫く所の山水は、則ち高低秀絶、咫尺深重、ほとんど斷聯の如し。二子、一は則ち群品、逸を推し、一は則ち衆論、神と稱す。然れども予を以て之を言へば一時縱横の状をみて、能く目驚かさらんや。六要盤礴の原を尋ぬるに、未だ心醉すべからず。後に彦遠の記するを覽るに云ふ、「收むる所の洽の跡は頗る少から